

動詞の音便の方言学的研究 サ行イ音便を中心として

著者	坂喜 美佳
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第18374号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00124594

博 士 論 文

動詞の音便の方言学的研究

ーサ行イ音便を中心としてー

東北大学大学院文学研究科 言語科学専攻

坂 喜 美 佳

動詞の音便の方言学的研究—サ行イ音便を中心として—

目 次

第1章 研究の背景と目的	7
1. はじめに	7
1.1. サ行イ音便とは	7
1.2. なぜサ行イ音便を取り上げるのか	8
2. 本論文の目的・方法	9
2.1. 本論文の目的	9
2.2. 本論文の方法	10
3. 本論文の意義	11
4. 本論文の構成	12
 第2章 サ行イ音便はどう取り上げられてきたか	16
1. はじめに	16
2. 中央語文献におけるサ行イ音便に関する研究	16
2.1. 中央語文献におけるイ音便形をとりにくい動詞に関する研究	17
2.1.1. 橋本四郎(1962)「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」	17
2.1.2. 奥村三雄(1968)「サ行イ音便の消長」	18
2.1.3. 北原保雄(1973)『きのふはけふの物語研究及び総索引』	19
2.1.4. 柳田征司(1993)『室町時代語を通して見た日本語音韻史』	19
2.2. 中央語文献におけるサ行イ音便の割合、衰退時期等に関する研究	22
3. 方言におけるサ行イ音便に関する研究	22
4. その他の先行研究	25
5. 中央語規則とその時代別段階	26
6. おわりに	27
 第3章 動詞の音便の地理的・歴史的分布	29
1. はじめに	29
2. 日本諸方言の音便の実態	30
3. 地理的分布	33

4. 歴史的分布	34
5. 地理的分布と歴史的分布の照合	35
6. 地理的分布と歴史的分布の解釈	37
7. おわりに	41

第4章 富山県におけるサ行イ音便 42

1. はじめに	42
2. 先行研究	42
3. 富山県高岡市調査	44
3.1. 調査概要	44
3.2. 調査結果	48
3.3. 富山県高岡市調査のまとめ	49
4. 富山県におけるサ行イ音便の実態	49
4.1. 調査概要	49
4.2. 調査結果	50
4.3. 調査結果の分析	50
4.3.1. 地域差	50
4.3.2. 調査結果と中央語規則	51
4.3.2.1. 2音節動詞アクセント第一類の語	52
4.3.2.2. 使役性他動詞	52
4.3.2.3. 語幹末が長音である語	53
4.3.2.4. 語幹末母音がeである語	53
4.4. 調査結果のまとめ	54
5. おわりに	55

第5章 鹿児島県におけるサ行イ音便..... 56

1. はじめに	56
2. 先行研究	56
3. 鹿児島県におけるサ行イ音便の実態	59
3.1. 調査概要	59
3.2. 調査結果	60
3.2.1. イ音便の形態	61
3.2.2. 2音節動詞アクセント第一類の語	63
3.2.3. 使役性他動詞	64

3.2.4. 語幹末が長音である語	65
3.2.5. 語幹末母音が e である語	65
3.3. 調査結果のまとめ	66
4. おわりに	68

第6章 高知県におけるサ行イ音便 69

1. はじめに	69
2. 先行研究	69
3. 高知県におけるサ行イ音便の実態	70
3.1. 調査概要	70
3.2. 調査結果	71
3.2.1. イ音便とヒ音便	71
3.2.2. 2音節動詞アクセント第一類の語	72
3.2.3. 使役性他動詞	73
3.2.4. 語幹末が長音である語	74
3.2.5. 語幹末母音が e である語	74
3.3. 調査結果まとめ	75
4. 鹿児島県南部との比較	75
5. 高知県におけるサ行イ音便の実態成立の要因	76
6. おわりに	78

第7章 サ行イ音便における中央語規則の地理的対応 79

1. はじめに	79
2. GAJ による検討	79
2.1. 地図の作成	79
2.2. 仮説	82
3. 各地点での中央語規則の比較	83
3.1. ①2音節動詞アクセント第一類の語	83
3.2. ②いわゆる使役性他動詞	85
3.3. ③語幹末が長音である語	87
3.4. ④語幹末母音が e である語	89
3.5. 各地点での中央語規則まとめ	91
4. 中央語規則の地理的対応	92
5. おわりに	93

第8章 「返す」のサ行イ音便と「カヤス」の成立..... 94

1. はじめに.....	94
2. 先行研究.....	94
2.1. 中央語文献におけるサ行イ音便の語幹末母音が e である語に関する研究.....	95
2.2. 中央語文献における「カヤス」に関する先行研究.....	95
2.3. 方言における「カエス」のサ行イ音便に関する先行研究.....	97
3. 仮説.....	98
4. 例外語と音便化する語の割合.....	99
5. 文献から見た「カエス」と「カヤス」.....	100
5.1. 文献調査の概要.....	100
5.2. 中央語文献に現れる「カエス」と「カヤス」.....	101
6. 全国的な「カヤス」の分布.....	103
6.1. 分布図の作成.....	103
6.2. サ行イ音便と「カヤス」の分布.....	104
7. 富山県呉西地域における実態.....	105
7.1. 面接調査の概要.....	105
7.2. 富山県呉西地域における「カエス」と「カヤス」.....	106
7.3. 「かえた」と「換える」などのタ形との区別.....	108
8. 中央語文献における「かえた」語形が存在.....	108
9. おわりに.....	110

第9章 「咲く」の方言形「サス」の成立.....112

1. はじめに.....	112
2. 先行研究.....	112
3. 全国的な「サス」の分布.....	113
4. 「サス」の成立.....	115
4.1. 「サス」の成立過程.....	115
4.2. 現在「サス」が見られる地域.....	116
4.3. 「咲く」と「差す」.....	117
5. 富山県呉西地域における「サス」.....	119
5.1. 調査概要と結果.....	119
5.2. 富山県呉西地域における「サス」の動態.....	121
6. おわりに.....	123

第10章 本論文のまとめ	124
1. はじめに	124
2. 各章のまとめ	124
2.1. 第1章「研究の背景と目的」	124
2.2. 第2章「サ行イ音便はどう取り上げられてきたか」	124
2.3. 第3章「動詞の音便の地理的・歴史的分布」	125
2.4. 第4章「富山県におけるサ行イ音便」	125
2.5. 第5章「鹿児島県におけるサ行イ音便」	126
2.6. 第6章「高知県におけるサ行イ音便」	126
2.7. 第7章「サ行イ音便における中央語規則の地理的対応」	127
2.8. 第8章「「返す」のサ行イ音便と「カヤス」の成立」	127
2.9. 第9章「「咲く」の方言形「サス」の成立」	128
3. 本研究の意義と今後の課題	128
3.1. 本研究の意義	129
3.2. 今後の課題	129
4. おわりに	130
使用した文献・索引	131
参考文献	131
既発表論文との関係	136
資料	137

第1章 研究の背景と目的

1. はじめに

本論文は、「サ行イ音便」という現象を対象とし、方言学の立場から調査・考察を行うことで、改めてこの現象がもつ特徴やその影響を明らかにしようとするものである。本章では、本論文の導入として、サ行イ音便について述べ、それをふまえて、本論文の目的や方法を提示する。

1.1. サ行イ音便とは

現代日本語では、五段活用動詞の連用形に助詞「テ」や助動詞「タ」がつくとき、殆どの行で音便形をとる。この「音便」とは、発音の便宜で発生した臨時的な語形が、次第に固定化した語形となる現象のことであり、現在では一般に4種類の音便が認められている。その4種類とは、イ音便・ウ音便・撥音便・促音便である。

「音便」は、本来悉曇学で用いられてきた概念であるが、現在用いられる意味で初めて論じたのは、本居宣長の『漢字三音考』である。そこには「連声」や「ハ行転呼音」なども含まれており、「臨時的な発音」という意味であった。今日の4種類に整理したのは、山田孝雄の『日本文法論』である。4種類のうち、イ音便・ウ音便は「書いて」が「書いて」となるように、子音が脱落 (ki → i) することによって生ずる音韻現象である。一方、撥音便・促音便は「取りて」が「取って」となるように、他の音への転化 (ri → t) によって生ずる音韻現象である。生じ方の違いはあるが、発音の便宜で発生したものとしてこの2タイプの音韻現象をまとめ、「音便」と呼んでいる。

上で五段活用動詞の連用形に助詞「テ」や助動詞「タ」がつくとき、殆どの行で音便形をとると述べたが、サ行動詞に限っては音便形をとらない。例えば、カ行動詞「書く」に「テ」がつくと「書いて」というイ音便形をとるのに対して、サ行動詞「出す」は「出して」とはならず、「出して」という非音便形をとる。しかし、特定の時代の文献や、西日本を中心とした方言では、「出す」であれば「出いて」というイ音便形をとることがある。この現象をサ行イ音便という。

1.2. なぜサ行イ音便を取り上げるのか

サ行イ音便に関する研究は、サ行イ音便が中央語で盛んであった室町時代の資料研究を中心として広く行われてきた。その結果、中央語文献上のサ行イ音便については、それを支配する諸条件を含めて、かなりの実態が明らかになっている。

一方、そのような歴史的変異に対して、地理的変異である方言については、サ行イ音便の実態は十分明らかになったとはいえない。国立国語研究所(1991)『方言文法全国地図』第2集における分布の提示(図1・図2)はあるものの、全般的に見て、動詞活用の一部として数語を扱った研究や、個々の語を対象とする個別具体的な研究が多い。

この現象の分布は、主として西日本に広がっている。国立国語研究所『方言文法全国地図』第2集の92図「出した」(図1)でサ行イ音便の分布を確認してみると、東日本には認められないが、西日本では近畿中心部を除く西日本全体に分布が認められる。ちょうどフォッサマグナ付近、いわゆる糸魚川―浜名湖線を境に東西に分かれる様子は、東西対立分布と呼ばれる分布類型の一例と言ってよい。すでに、牛山(1969)など、様々な先行研究で、サ行イ音便は東西対立分布を示すことが指摘されてきた。しかし、ここで注目されるのは、サ行イ音便が認められる西日本の中でも、近畿から四国にかけてサ行イ音便が現れないことである。さらに、同98図「貸した」(図2)のように、動詞が違っていると分布も変わることがある。

より詳しく見ると、図1「出した」では、おおよそ赤の記号が分布している地域が、サ行イ音便現象がある地域である。先に西日本に分布していると述べたが、赤の記号が分布している西日本の内側に、近畿から四国にかけて、赤の記号がない地点がある。後で詳しく述べるが、中央語文献を精査した先行研究によって、サ行イ音便は歴史的に、中央で衰退したということが分かっており、それが図1では地理的に表れているということが推測される。

また、図2「貸した」では、赤い記号は、ほぼ九州を中心に分布していることが分かる。なぜ動詞によって音便化したりしなかったりするのだろうか。実はこれも先行研究によって、中央語では、音便化する語・しない語があったということが明らかとなっており、それに何らかの影響を受けていることが推測される。

例えばカ行五段動詞であれば、「行く」のような一部の例外語を除き、ほぼ規則的にイ音便形をとり、地域的にも、ほぼ日本全国でイ音便形が用いられている。例として同96図「書いた」を図3に示すが、ほぼ全体に赤い記号が分布しており、琉球列島を除く全ての地点で音便形をとることがわかる。それに対し、サ行五段動詞は地理的にも音便形をとる地域・とらない地域があり、また動詞によっても音便形をとるもの・とらないものがある。この点が他の音便と異なり、音便形をとる・とらない差は何によるものなのかという点が大変興味深い。

さらに、地理的にまたは語彙的に、その音便形をとる・とらない傾向が、室町時代の中

中央語文献において見られる音便形をとる・とらない傾向と類似しているようであるところも興味深い。中央語の傾向と類似しているということは、「音便」という形態音韻論的な現象が、中央から地方に伝播した可能性を示唆しているということである。一般にことばの伝播という言語外的要因を考えるときに用いられる「方言圏論」は、「方言地理学」の理論であり、語彙の分野で成り立ちやすいとされる。一方、アクセントや音韻など「音」に関する現象や体系的な文法の分野では、言語内的な要因に注目し、「比較方言学」の方法が用いられることが多く、「孤立変遷」や「自律変化」によって成立したと説明されることが多い。実際の方言の成立には伝播と自律変化の両方が関わっており、一概には言えないが、そのような傾向はある。では「音便」はどうだろうか。体系的な動詞活用の一部であり、発音の便宜のため、子音が脱落または転化することによって発生した臨時的な語形であることを鑑みれば「音」のような現象であるとも言える。このように言語内的な要因の方が注目され、一見、自律変化が主体となりそうな「音便」という現象も、中央語に類似の現象が見られることからすれば、ことばの伝播という言語外的な要因からも考えることができ、その点が興味深いため、本論文では音便を取り上げ、その中でもサ行イ音便を研究対象としている。

2. 本論文の目的・方法

2.1. 本論文の目的

本論文の主たる目的は、以下のように設定する。

〈サ行イ音便の、日本全国での分布形成過程を推定するとともに、サ行イ音便の影響で成立した語の成立過程を明らかにすることで、従来主として中央語文献を資料として研究されてきたサ行イ音便を、方言学の視点から新たに捉え直し、方言上、どのような現象として現れるのかを明らかにする。〉

具体的な目的としては、以下の3つが挙げられる。

目的(1)動詞の音便現象全体の地理的・歴史的分布形成を推定する。

サ行イ音便の研究に入る前に、音便現象全体の中でのサ行イ音便の位置づけを明らかにするため、動詞の音便現象を概観する。音便現象は、冒頭で述べた通り、生じるタイプにも2通りあり、その上さらに様々な音声環境や音自体が持つ性質が関わるため、音便とまとめて扱い研究の対象とする先行研究は管見の限りない。しか

し、音便の種類によって歴史上の成立時期には差があること、地理的な分布の仕方も音便の種類によって異なることに注目すると、その両者には関係性があると考えられる。それは音便現象を個々に考察するだけでは分からないので、ここでは動詞の音便全てを扱う。動詞の音便現象を概観し、中央語文献研究の成果を用い、その地理的分布と歴史的分布を照合する。その結果を元に音便現象の日本全国における通時的な変遷を推定する。

目的(2)従来のサ行イ音便の中央語史に検討を加え、各地での記述的調査を行い、それを対照させてサ行イ音便の分布形成過程を示す。

対象とする音便現象をサ行イ音便に絞り、中央語の伝播とその変容が日本語方言形成の基本的な要因であるという考えに立ち、中央語と各地方言との比較対照を行う。各地方言での調査・記述の成果を元に「中央語規則」と比較する。中央語規則を基準とした中央語と方言間の比較を行い、派生関係を明らかにする。さらにその結果を地図上に置き、音便現象の歴史的な形成過程を明らかにする、というように研究を展開する。

目的(3) サ行イ音便の影響を受けたと考えられる語の成立過程を考察し、音便史と語彙史の交渉について考察する。

サ行イ音便の歴史や方言形成は、それ自体で閉じられた現象ではなく、実は、他の言語分野、具体的には語彙史や語彙の方言形成にも影響を及ぼしている。そこで、サ行イ音便が影響して成立したと考えられる特定の語に焦点を当て、形態論的な面から特徴を記述するとともに、その成立過程について考察する。それらの語がどのようにサ行イ音便の影響を受けたのか、これも方言と中央語を比較することによって、その成立過程を推定することにしたい。具体的には、「返す」に対応する方言形「カヤス」、「咲く」に対応する方言形「サス」を取り上げた。

2.2. 本論文の方法

方言分布の形成を明らかにするという目的から、本論文で方言地理学の方法を用いることは言うまでもない。

まず、方言分布の資料として、国立国語研究所『方言文法全国地図』は、動詞の音便の全国的な分布に関する方言地図を取めており、これを用いることにした。『方言文法全国地図』には、動詞の音便に関して 14 枚の地図があり、他の現象に比べて充実していると言える。しかし、枚数の制限のためか動詞の活用する行は網羅しておらず、用意された地図のみでは、この現象を十分把握することができない。このような問題を克服するためには、地域ごとのことばのしくみを細かく考察し、それを方言分布の解釈に結び付ける記述的方

法が有効である。そこで、音便現象、特にサ行イ音便の分布を全国的に眺めた時に、重要と思われる地域に赴き、現象を把握するための記述的調査を実施することにした。

また、冒頭でみたように、近畿中央ではサ行イ音便が衰退してしまっていることを鑑みると、記述的調査を行うだけでは、かつての中央であった京都や大阪での変遷を知ることにはできない。また、かつての中央語がどうであったのか、現在の方言に残っていない形式であったかもしれず、各地方言と中央語との比較が必要であり、その前提として中央語を明らかにすることが必要である。そして、そのためには、文献資料による古典語の考察が必要であり、文献学的方法をとることになる。

さらに、前の項で「中央語文献上のサ行イ音便については、それを支配する諸条件が明らかになっている」と述べたように、先行研究の成果として、中央語文献でイ音便形をとらないまたはとりにくい語の特徴が明らかとなっている。本論文では、それらをまとめたものを「中央語規則」と呼び、様々な地点の方言と対照させ、測定する方法をとる。「中央語規則」は各地のサ行イ音便を考察する際の基準であるということである。サ行イ音便の現在の姿や分布が、中央語の伝播とその変容によるものであるという考えに立てば、中央語の姿が各地方言にどのように反映されているかというような比較対照を行うことが妥当であると考えられるためである。

本論文は、ここまで何度も述べたように、全国分布の解釈、主要地点の記述、中央語文献との比較を行い、それぞれを照合させるという方法で考察を進めていく。こうした総合的な方法は、小林(2004)の「方言学的日本語史」でも格助詞「サ」の成立などを例に提唱されており、ここではそれをサ行イ音便の分布形成に適用していくことにしたい。

3. 本論文の意義

サ行イ音便の研究は、橋本(1962)の中央語文献を資料としたまとまった論考をはじめとし、それを受けて他の文献や方言も考慮した奥村(1968)、それらをまとめサ行イ音便が共通語で消失した理由について考えた柳田(1993)等の主たる研究で区切りがついたと考えられている。それ以降、小西(2001)など方言での優れた研究はあるものの、研究が盛んに行われているテーマではなく、停滞している状態であると言える。

本論文の意義としては、音便のような形態音韻論的な現象について、通時・地理両面の掛け合わせの視点から捉えたことが挙げられる。さらにその地理面として記述調査を行い、その対象を音便だけでなくサ行イ音便の影響を受けた語の成立にまで広げたことも本論文の特徴である。具体的には、以下の3つが挙げられる。

第一に、本論文の全体に関わることとして、通時・地理両面の掛け合わせの視点から音便現象を捉えたことである。文献での現象、方言での現象と別個に扱うのではなく、その

両面を掛け合わせることで、これまでの史的考察や個別の方言記述を、地理的な広がりに関連付けて捉えた点で、意義があると言える。

第二に、サ行イ音便の実態を記述するため、主要地点に赴き調査を行ったことである。これまで文献中心に進められてきたサ行イ音便の研究に、方言学の視点を導入したことは本論文のひとつの特色である。文献を資料とした調査・研究では、限られた動詞についてしか知ることができないが、サ行イ音便が残存する地域に赴いて記述調査を行えば、未調査の動詞を調査することができる。

第三に、音便現象が影響して成立した語があるという新しい報告を行ったことである。そのような語があることは、各地方言の概説書などで触れられるのみであり、あまり注目されてこなかった。そのような語の成立を考察した研究は今までにない。従来、サ行イ音便の内部に留まっていた関心を、この現象に影響されて成立した語の考察に拡大した点も、本論文の意義であると言える。

4. 本論文の構成

最後に、本論文の構成を示す。

第1章として、本章では、導入として、サ行イ音便について述べ、それをふまえて、本論文の目的や方法を提示した。続く第2章では、現在までのサ行イ音便研究を概観し、第3章で本論文の核となる「中央語規則」について考察する。

第4章は、中央語と方言の動詞音便形の関係を明らかにするため、動詞音便形を横断的に扱いつつ、動詞の音便現象の地理的・歴史的分布の形成について考察する。続いて第5・6・7・8章は、それぞれ富山県・鹿児島県・高知県で行った実地調査の結果から、サ行イ音便の実態をまとめ、中央語と比較対照したものである。次の第9・10章では、それぞれサ行イ音便がその成立に影響を与えたと考えられる「返す」の方言形「カヤス」、「咲く」の方言形「サス」について考察を行う。

最後の第11章は、本論文のまとめである。本論文の結論を提示するとともに、残された課題や今後の発展などについても述べる。

なお、本論文での「中央」とは、基本的に京都を中心とする近畿地方を指す。

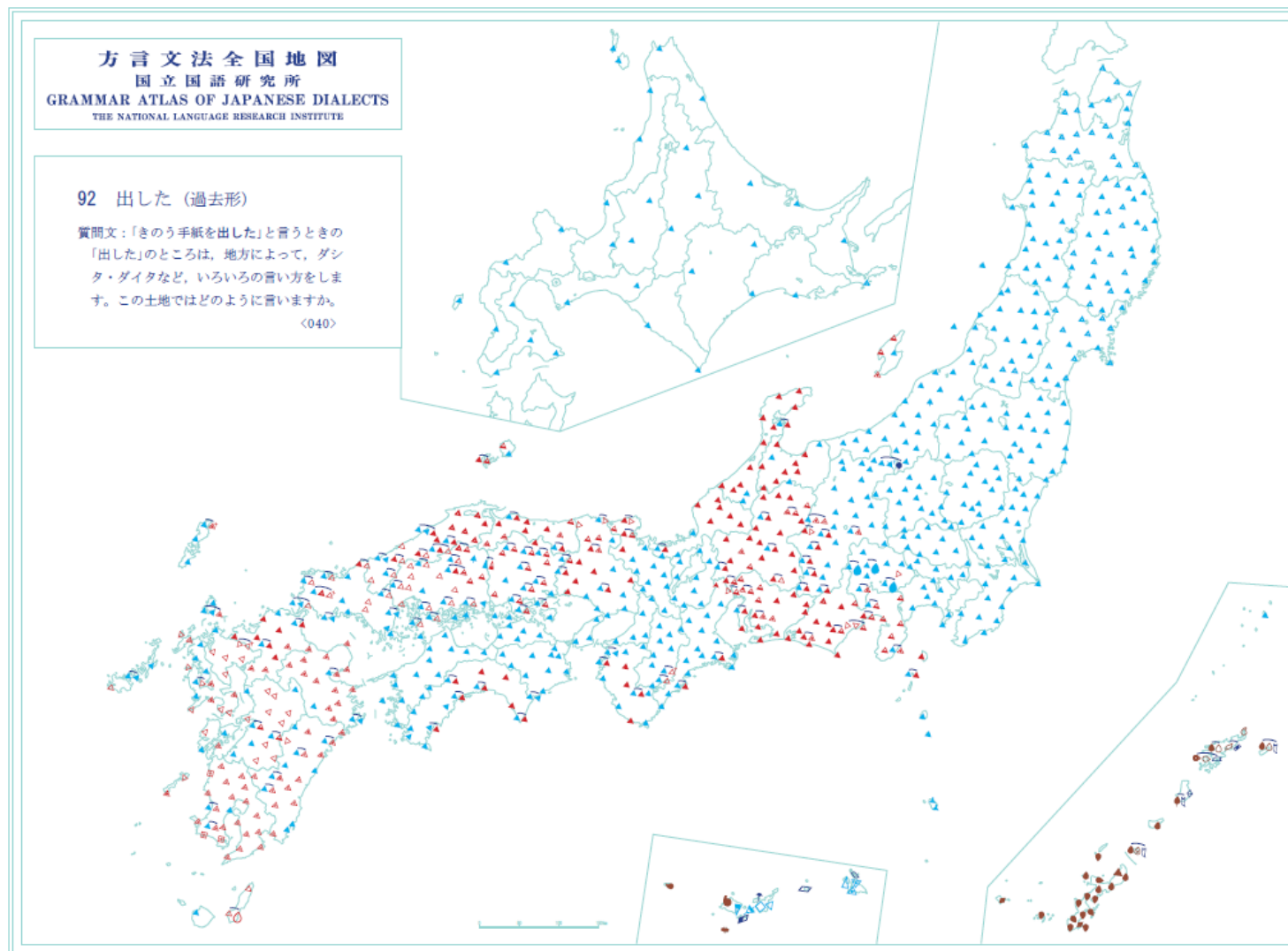
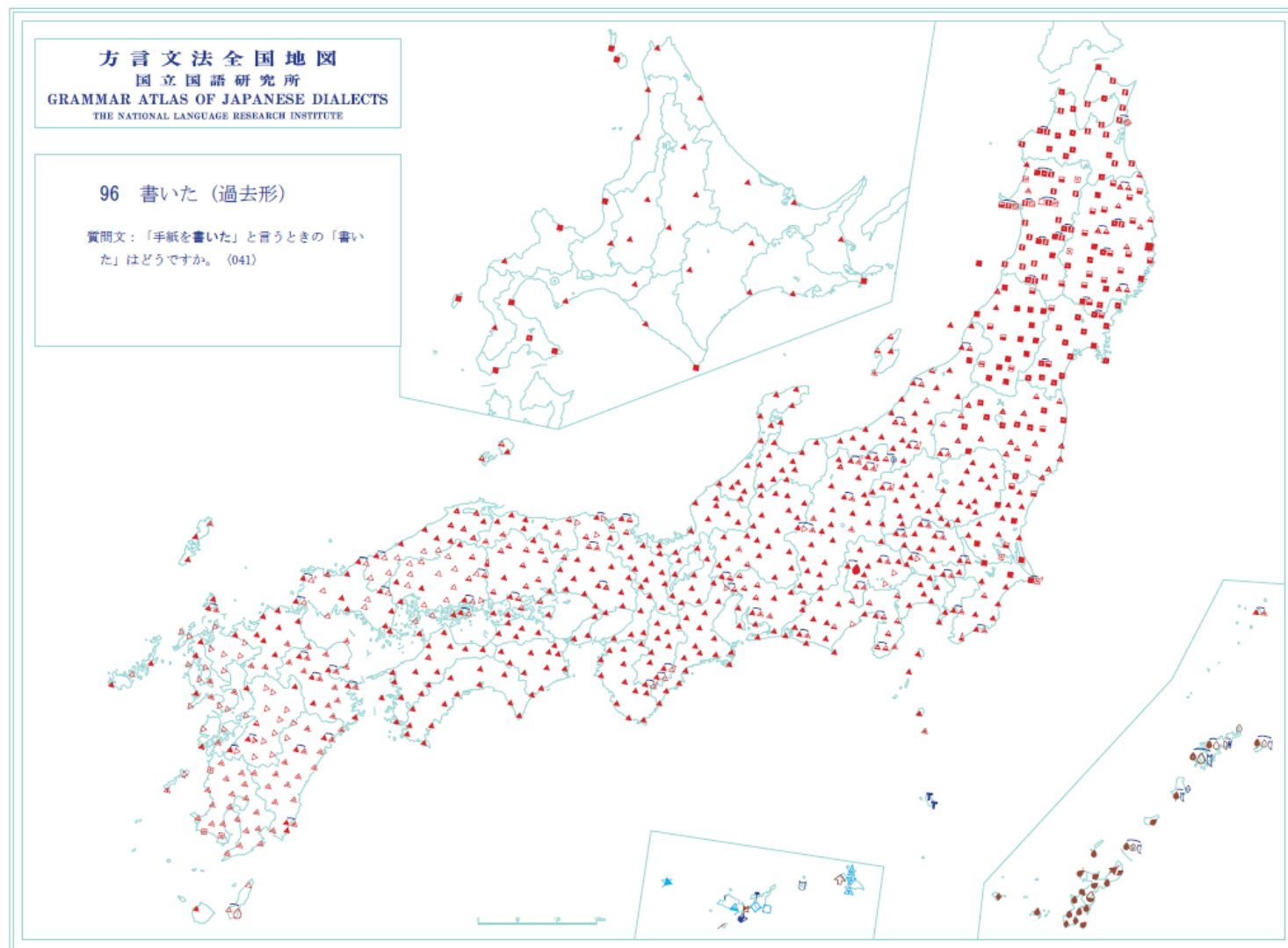


図1 『GAJ』第2集92図より「出した」

92 出した (過去形)

- ▲ <dasita> daŋita, danita, daŋita, dasita
- ▲ <dasita-zja, dea, dee, doo, jja, jo>
- ▶ <danŋita> danŋita
- ▲ <deesita>
- ▲ <dahita> daŋita, dacita
- ▲ <dasuta> dasuta, dasūta
- ▲ <danitaa> daŋita, dasita
- ▲ <danitoo>
- ▲ <danitara>
- ▲ <idaŋita>
- ▲ <idasuta i> idasuta i
- ▲ <Nzasutaru>
- ▲ <idasutaruu>
- ▲ <Ndasuta>
- ▲ <idaŋita>
- ▲ <Nidasuda>
- ▲ <daita>
- ▲ <daeta> daeta, daŋta
- ▲ <daeta>
- ▲ <daeta>
- ▲ <djaata>
- ▲ <dejaata>
- ▲ <zjaata>
- ▲ <deita> dæita
- ▲ <deeta> deita, dæeta, dæita, djæita
- ▲ <deeta>
- ▲ <deeta>
- ▲ <deeta>
- ▲ <deeta> dæita
- ▲ <deda>
- ▲ <daisa>
- ▲ <daatoo>
- ▲ <Tizjaejan>
- ▲ <Tizjaejan-doo>
- ▲ <Tizjaejan>
- ▲ <N'zjaejan>
- ▲ <Nzjaejan>
- ▲ <Tizjaejan>
- ▲ <Tizjaejan>
- ▲ <Tizjaejan>
- ▲ <NzacaN>
- ▲ <Tizacca>
- ▲ <Ndasjan>
- ▲ <Tizjaejan>
- ▲ <idasjaan>
- ▲ <Tizjatan>
- ▲ <Ndahjan>
- ▲ <deesike>
- ▲ <Tizjaejan>
- ▲ <Tizjaejan>
- ▲ <Tizjaejan>
- ▲ <Tizjaejan>
- ▲ <itani>
- ▲ <Ndasii>
- ▲ <Nzancee>
- ▲ <Ndanis ita>

↑ その地点における他の話者の回答



96 書いた (過去形)

- | | |
|--------------------------------------|----------------------|
| ▲ 〈kaita〉 kaita, ka ita | ▲ 〈kaki taru〉 |
| ▲ 〈kaita-zoo, jo, wano〉 | □ 〈kak ida〉 |
| ▲ 〈kaeta〉 kaeta, kaeta | ◇ 〈kakuda〉 |
| ▲ 〈kaeta〉 | |
| △ 〈kaata〉 | ● 〈kacjan〉 |
| ▷ 〈kjaata〉 | ◆ 〈kacjanN-daa, doo〉 |
| ▽ 〈kjaata-doo〉 | ● 〈hacjan〉 |
| ▲ 〈kseta〉 kseta, kseta | ● 〈kacjan〉 |
| ▲ 〈kseta〉 kseta, kseta, kseta, kseta | ● 〈kacjam〉 |
| ▲ 〈kseta〉 | ● 〈kacjai〉 |
| ▲ 〈keta〉 | ● 〈kacjaruu〉 |
| ▲ 〈kata〉 | ○ 〈kacja〉 |
| ▷ 〈kjata〉 | ○ 〈kacjaa〉 |
| ▲ 〈ksetaa〉 kseta, kseta | ● 〈hac'jan〉 |
| ■ 〈kaida〉 kaida, ka ida | ◆ 〈kacjan〉 |
| ■ 〈kaida-dea〉 | ■ 〈haccaN〉 |
| ■ 〈kaeda〉 kaeda, kaeda | ▽ 〈kacca〉 |
| ■ 〈kaeda〉 | ▽ 〈hataN〉 |
| □ 〈kaada〉 | ▽ 〈kottaru〉 |
| ■ 〈keda〉 keda, kjesida, keda | ◇ 〈kattaa〉 |
| ■ 〈keda〉 keda, keda | ／ 〈hakjan〉 |
| ■ 〈keda〉 | |
| ■ 〈keda〉 keda, kjeda, keda | ▽ 〈kreke〉 |
| ■ 〈kada〉 | ↑ 〈kakara〉 |
| ◇ 〈kjada〉 | |
| ■ 〈kaidaa〉 | ▽ 〈kaci〉 |
| ● 〈kaitoo〉 | ▽ 〈kacii〉 |
| ○ 〈kaatoo〉 | ◇ 〈kaç i〉 |
| | ■ 〈kaçç i〉 |
| | ▽ 〈kakii〉 |
| | ● 〈hakee〉 |
| ▲ 〈katitaN〉 | ↑ 〈kak'ip ita〉 |
| ▲ 〈kak ita i〉 | ↑ 〈kakadaa〉 |
| ▽ 〈kakuta i〉 kakuta i | |
| ▲ 〈kak itaa i〉 kak ita: i | |

↑ その地点における他の話者の回答

図3 『GAJ』第2集96図より「書いた」

第2章 サ行イ音便はどう取り上げられてきたか

1. はじめに

本章では、これまでの研究において、サ行イ音便がどのように取り上げられてきたかを概観し、本論文の以下の目的に適う記述が、諸先行研究において十分でない、または注目されてこなかったことを具体的に見ていく。

〈サ行イ音便の、日本全国での分布形成過程を推定するとともに、サ行イ音便の影響で成立した語の成立過程を明らかにすることで、従来主として中央語文献を資料として研究されてきたサ行イ音便を、方言学の視点から新たに捉え直し、方言上、どのような現象として現れるのかを明らかにする。〉（前章の目的を再掲）

サ行イ音便に関する先行研究は、ほとんどが文献、あるいは現代方言の調査を元にして、サ行イ音便衰退の原因を考察するというものである。なぜなら、サ行イ音便研究においては「サ行動詞は中央語で一度音便化していたにも関わらず、なぜ衰退したのか」ということが研究者の最も大きな関心事であり、注目を集めてきたからである。以下、主な先行研究を、その扱う資料別に中央語文献・方言・その他に分けて概観する。

2. 中央語文献におけるサ行イ音便に関する研究

中央語におけるサ行イ音便は10世紀頃発生し、17世紀半ばには衰退したと言われている。現在文献上で発見されているサ行イ音便の一番古い例は、築島(1969)によると、『守護国界主陀羅尼經』(900年頃)の「下(クタイて)」「臥(フイて)」である。また、『狂言記(正篇・続篇・外篇・拾遺)』を調査した大倉(1995)は

正篇のイ音便の状況から、正篇刊行当時の十七世紀半ばには、京都方言から「さす」以外のイ音便形はほとんど衰退していたと見られる。(p.10)

と述べ、サ行イ音便の衰退時期を 17 世紀半ばとしている。

サ行イ音便は全てのサ行五段(四段)活用動詞がとるわけではない。これまでの先行研究でイ音便形をとらない、またはとりにくい動詞が存在すると指摘されている。イ音便形をとりにくい動詞について、中央語文献を資料として調査を行い、その動詞の特徴を挙げている先行研究は数多くあるが、以下、その特徴について論じた先行研究の主たるものについて述べる。

2.1. 中央語文献におけるイ音便形をとりにくい動詞に関する研究

2.1.1. 橋本四郎(1962)「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」

『天草版伊曾保物語』、『天草版平家物語』、狂言詞章の虎明本・虎寛本・鷺流などについて調査した橋本(1962)は、サ行動詞においてイ音便形をとらない語群として、以下の 3 つを挙げている。

- (1)二音節動詞のうちアクセント第一類の語群…貸す・消す・来す・足す・伸す・
減す・増す・召す
- (2)使役性の他動詞…言わす・折らす・立たす・のかす・持たす・やらす・つぶさす
- (3)敬語…申す・おはす・(召す)

この(1)～(3)を、もともとイ音便を起こしていたが、後にイ音便を起こさなくなったものであるとし、これらの語群にサ行イ音便衰退の原因を求めた。橋本(1962)は中世末期を既にサ行イ音便の衰退が進んでいた時期と認定している。

(1)については、「貸す」「消す」「来す」などの 2 音節動詞がイ音便形をとらず、「刺す」「為す」「出す」などの 2 音節動詞がイ音便形をとっていることに注目して、前者が 2 音節動詞のアクセント第一類、後者が第二類にほぼ当たることを指摘した。この要因として橋本(1962)は、

中世に音便しがたい二音節動詞のみが中世に至る過程においてアクセント変化
を起こしたらしい。(p.286)

と述べているが、このアクセント変化は第 1 類だけではなく、第 2 類にも起きており、後に挙げる奥村(1968)はこの解釈はやや疑問であると述べている。

(2)については、原形で現れることの多い語に「持たす」「折らす」「つぶさす」など、四段活用動詞を語基とする使役性の他動詞が多いこと、一方でこれらの語が使役の助動詞「スル」をとった「持たせた」「折らせた」「潰させた」で現われることに注目し、これらの四

段活用形「～シテ」は「～セテ」が本来の形であるという強い制約があったために、イ音便を起こさなかったものと指摘した。

(3)については、敬語がイ音便を起こしにくかったとしたが、橋本氏は「申す」は語幹末が長音である語であること、「おはす」の活用が動いていたということ、「召す」が(1)に当てはまることなどを次のように指摘している。

独自の不安定性があり、それに敬語という事情が重なって遂に音便を起こさないで終わったのであろう。(p.293)

このように、敬語は確かに音便形をとりにくかったが、「独自の不安定性」のような他の要因もあったと考えているようである。また、同じ敬語でも「致す」や「おはします」などはイ音便を起こしていることも指摘している。

語群としては挙げていないが、「通す」についても「申す」と同様語幹末が長音で音便形をとらないとしている。「通す」についてはイ音便を起こしていたものが早く音便形を失ったもの、「申す」についてはもともと音便を起こしていなかったとしている。さらに、橋本(1962)は少音節語も原因の一つとして指摘している。しかし橋本(1962)で

音便の失はれたのはサ行四段だけだから、条件の一つであっても所詮は直接の契機とは言へない。(p.284)

と述べ、直接の原因ではないとした。

2.1.2. 奥村三雄(1968)「サ行イ音便の消長」

次に、『大蔵流狂言本』『狂言記』『近松世話物浄瑠璃』などの資料と、自身の岐阜県下における記述的調査の結果や、国立国語研究所編(1959)・日本放送協会編(1981)等の資料をつきあわせて研究した奥村(1968)は、イ音便形をとらない語群として、以下の4つを指摘した。これらは文献と方言の両方で確認できるとしている。

- (a)サ行四段式使役辞等附属語の音便形は、極めて少ない。
- (b)少音節語は多音節語に比し、非音便語が多い。
- (c)二拍語中、アクセント分類における一類語は音便形が稀。
- (d)通ス申ス等の長音語の音便形は稀。

(a)について奥村氏は橋本氏の(2)の論を支持し、方言でもイ音便が起こりにくいことを確認した。

(b)については、少音節語は多音節語に比べて非音便形が多いとし、その理由については、

＜少音節語における活用語尾の示差的機能が、多音節語のそれより大きい＞為と言えよう。つまり、押シタ貸シタ等のイ音便形は、置イタ書イタと同形になるが、三拍以上の語では、その様なおそれが殆んど無い訳である。(p.711)

と述べている。

(c)については「アクセントとの相関性等が、難しい問題として残る」(p.712)と言及を避けている。この(b)(c)は橋本氏の(1)を分けたものである。

(d)については、「通す」も「申す」もサ行イ音便よりも後に長音化が起きたものとしている。その理由として、サ行イ音便が起こっていて「通す」が原形で行われているという方言があるということを挙げた。

奥村(1968)は、(b)・(c)をサ行イ音便発生当初からのものとし、(a)・(d)を後に起こったものとした。このうちの(a)をサ行イ音便衰退の原因の一つだと指摘したが、(a)～(d)についての考察とは別に、関東方言の影響やサ行四段動詞完了形の類推的影響などにも原因を求め、衰退の時期を「徳川前期から中期ごろ」(p.612)と推定した。

2.1.3. 北原保雄(1973)『きのふはけふの物語研究及び総索引』

さらに北原(1973)は、『きのふはけふの物語』の研究編で、橋本(1962)が指摘した語群の他に、

(i)イ音便化する音節「し」の直前の音節がエ列音である。

ということを指摘している。「召す」「消す」「減す」「返す」などの語幹末がエ列音である語は、イ音便形をとっていない。形容詞の場合でも、「あはつけし」「あまねし」など語幹末母音がeであるものは「～い」のイ音便の形を持たないことに注目し、理由はわからないけれども、ある時期にe-iの母音連続が避けられたとした。

2.1.4. 柳田征司(1993)『室町時代語を通して見た日本語音韻史』

柳田(1993)は、橋本(1962)・奥村(1968)・北原(1973)の先行研究で指摘された、イ音便を起こしていない語を以下の五つにまとめた。

(I)敬語…橋本(3)

(II)語幹末が長音である語…奥村(d)

(Ⅲ)二音節動詞アクセント第一類の語…橋本(1)、奥村(b)(c)

(Ⅳ)いわゆる使役性他動詞などの、活用が浮動していた語…橋本(2)、奥村(1)

(Ⅴ)語幹末母音が e である語…北原(i)

(Ⅰ)については、橋本氏も述べているように、「致す」「おはします」は音便化しており、「召す」「申す」は語幹末 e、長音にそれぞれ当てはまることから、敬語はサ行イ音便の衰退に無関係であるとしている。

(Ⅱ)については、『日葡辞書』で、

申す Moxi, su, ita.

通す Touoxi, su, oita.

催す Moyouoxi, su, oita

と記述されているように、「申す」は語幹が長音形となっている一方、「通す」「催す」は長音形ではない形で示されている。このことから、「申す」は語幹が早く長音化していたためにイ音便化せず、「通す」「催す」は語幹の音便化が遅く、イ音便を起こし、その後長音化したために音便をやめて原形に戻ったとしている。

(Ⅲ)については、柳田氏は

カ行イ音便との衝突を避けるために、当初から原形でとどまるものがあつた。時には衝突をおかしてイ音便が進行することもあり、それはやがて原形にもどつたと見られる。しかし、そのような語は多くないと見られる。(p.701)

と述べており、橋本氏や奥村氏のようにアクセントの類では説明できないとしている。

(Ⅳ)については、いわゆる使役性他動詞は、当初から原形でとどまっていたものでもなければ、一旦イ音便を起こし後にイ音便形にもどつたものでもなく、イ音便を起こさない「して」形の語が増加したのであるとしている。もともとイ音便を起こしにくかったのは意志動詞+「シ」の、本来「せて」形であるもの(「言わす」など)であり、無意志動詞+「シ」の本来「して」形であるもの(「澄ます」など)は音便化していたのであると述べている。

(Ⅴ)については、「消す」「滅す」「召す」は二音節語であるため音便化しないものであり、それらを除くと「返す」「示す」のみであり、「返す」はもともと音便化していたとした。そして、

語幹末母音が e であるサ行四段活用動詞は、二音節語を除いて、もとイ音便を起こしていたが、江戸時代に入って、e-i の母音連続が e 列長音化すると、これを避け

て原形に戻った。(p.698)

と述べている。

以上のように、柳田(1993)は「サ行イ音便が行われるようになった当初から原形でとどまっていたもの」(p.632)と「一旦はイ音便を起こしていながら、後になんらかの事情で原形にもどったもの」(p.632)とを厳密に区別し、詳細な検討を行った。結局、イ音便の衰退の原因には決定的な原因が見つからないとしつつも、上二段活用にサ行の動詞がないこと、当初から原形でとどまっていた語が相当数存在したことの影響を強く考えた。相当数の非音便語があった室町時代末期に、「いわゆる使役性他動詞」などイ音便を起こさない語が増加し始め、そのためにイ音便が不安定になり、江戸時代に入って、今までイ音便を起こしていた「語幹末がeである語群」が原形に戻り、これを機に衰退の方向へ向かったと推定している。柳田(1993)は(I)(II)はサ行イ音便発生当初から音便を起こしていなかったものの、(III)は使役の「せて」形が転化して「して」形の語が新たに生まれ、それが転化形であることが認識されておりイ音便を起こさないもの(認識が薄れ音便化していることはある)、(IV)はもとイ音便を起こしていたが、江戸時代に入ってe-iの母音連続が長音化するようになると、他の語幹末母音の語はイ音便化しているので活用語尾がイであるのに対して、語幹末母音eである語だけが長音で孤立するために、原形に戻ったものとした。そしてサ行イ音便衰退の主な要因は、イ音便を起こさない動詞にあるわけではなく、サ行に上二段活用動詞が存在しないため、カ行やタ行のように上二段活用動詞と形態上の差異化を図る必要が特にない(カ行であれば「置く」と「起く」等、イ音便と原形で形態上の差異化を図っている)ことに求めた。そして語幹末母音eである語が原形に戻ったのをきっかけに、他の語幹末母音の語も原形に戻ったとしている。

以上、主要な中央語文献におけるサ行イ音便の先行研究をみたが、研究者によって、名づけや説明は異なる。例えば、橋本(1962)・奥村(1968)では、イ音便形をとらない語群に「少音節語」が挙げられていたが、柳田(1993)は少音節語については詳しく取り上げていない。敬語が取り上げられたり、取り上げられなかったりするなどの違いがある。しかし、音便化しない語群については、およそ以下の5つに集約されるようである。

- ①2音節動詞アクセント第1類の語…「押す」「貸す」「消す」「足す」「召す」など
- ②いわゆる使役性他動詞…「言わす」「折らす」「立たす」「のかす」「持たす」など
- ③語幹末が長音である語…「申す」「通す」「催す」
- ④語幹末母音がeである語…「示す」「試す」「返す」など
- ⑤少音節語

2.2. 中央語文献におけるサ行イ音便の割合、衰退時期等に関する研究

サ行イ音便の例外語の条件に関する主要な研究は以上の4つであるが、これらの論文の文献調査で主に用いられている文献は、サ行イ音便が最も盛んであったとされる室町時代のものである。文献を用いて、サ行イ音便が用いられる割合を調査した研究は数多くある。他に、室町時代以外の文献を扱った先行研究、それらの文献からサ行イ音便の衰退時期を推定する先行研究等がある。

『源氏物語』のサ行イ音便を調査しているものに、江口(1975)がある。『源氏物語』でのサ行動詞の連用形の述べ語数が3845であるうち、サ行イ音便の述べ語数は166(異なり語数43)であり、音便率は4.1%となっている。カ・ガ・サ行全体の音便率も4.5%であることから、平安時代では「形容詞の音便率に比べて動詞の音便率は極めて低いとみるべきであろう。」(p.49)としている。また、江口(1975)は『源氏物語』に現れるサ行イ音便化する動詞の語幹末母音についても調査しているが、aが28、uが10、oが5であり、平安時代に語幹末母音がiとeの動詞は無いようである。

『杜詩続翠抄』を中心に、抄物のサ行イ音便を調査しているものに、高見(1978)がある。また、先に挙げた主要文献でもよく扱われる『天草版平家物語』『天草版伊曾保物語』の他に、『コリヤード懺悔録』『捷解新語』の調査も一緒に行っている秋山(1999)がある。ここで1つ1つ割合を挙げることはしないが、どちらも数を数え、従来の例外語の条件に当てはまるかどうかを調査したものである。その結果、少音節(特に2音節語)の動詞・いわゆる使役性他動詞・敬語動詞については例外語である傾向が認められるとしている。

サ行イ音便が衰退した時期に焦点を当て、主に『近松浄瑠璃』を調査したものには、中川(1984)・坂梨(1990)・依田(2005)がある。また、『狂言記』を調査したものに大倉(1995)、『上方絵入狂言本』を調査したものに山県(1987)があるが、これらの調査は全て前掲の大倉(1995)のように、サ行イ音便の衰退時期を

正篇のイ音便の状況から、正篇刊行当時の十七世紀半ばには、京都方言から「さす」以外のイ音便形はほとんど衰退していたと見られる。(p.10)

と述べ、17世紀半ばとみている。

3. 方言におけるサ行イ音便に関する研究

次に現代方言の調査を元にサ行イ音便について研究しているものを挙げる。

牛山(1969)は中部地方の通信調査によって、「落とした」を「おといた」と言うかを調

査し、サ行イ音便の境界について、

北陸地方に於ては新潟・富山両県境、長野・富山・岐阜・三県境がその境界線をなし、中央部では長野県西筑摩・東筑摩両郡境から西筑摩と上伊那の群境を経て上伊那・下伊那両郡境を横断して山梨県に入り、山梨・静岡の両県境を下って静岡県の庵原郡の小島村・興津町を結ぶ線が境界線となる。(p.36)

とした。

また、池上(1953)は長野県木曾地方で面接調査を行い、この土地にサ行イ音便が広く分布していることを示した。

鎌田(1968)は、通信調査によって広く北陸・近畿・中国・四国・九州におけるサ行イ音便について 15 語を調査し、その実態を明らかにした。

宮治(1993)は、滋賀県での特殊なサ行イ音便と、文献上でのサ行イ音便について照らし合わせ、滋賀県を含む近畿地方では「サス」が「サイセ」になるような特殊なイ音便が存在すること、必ずしも文献上の例外語が当てはまらないことを述べている。

福井(1982)は、岐阜県益田郡萩原町におけるサ行イ音便の現象について、筆者自身の内省に基づき動詞のモーラ数ごとに音便化しない語を次のように整理している。

2 モーラ動詞…音便を起こすものは連体形が頭高のものに限られ、音便を起こすかどうかはアクセントとその単語がこの方言にとって native であるかどうかによって決まる。

3 モーラ動詞…2 モーラ動詞と違い、完全に非文法的と判定できるものが殆どなく、「申す」のみ。「知らす」「食わす」など「～せる」の形の方が普通のものは音便化しにくい。アクセントとは無関係に音便が起こる。

4 モーラ動詞…3 モーラ動詞の場合と殆ど同じで、アクセントには関係なく音便が起こる。

複合動詞…その後部要素に単独ではイ音便化しない「足す」「越す」などが来る場合は、完全に非文法的だとは言えなくなる。ただし、「消す」が後部要素となるものは非文法的である。

また、モーラ数に限らず全てのサ行動詞について、語幹末が e のものは音便を起こしにくいようであるとも述べている。上の整理では、2 モーラ動詞の場合はアクセントが関係するが、3 モーラ以上の動詞では全く関係しないように見える。これについて福井(1982)では、以下のような表記を用い、

押す	Loʃihta	————	刺す	ʃsaʃihta, ʃsaɛhta
殺す	{ Lkoʃroʃihta Lkoʃroɛhta	————	話す	{ Lhaʃnaʃihta Lhaʃnaɛhta

(福井 1982 p.244 から引用)

「オシタ」と「サシタ」はアクセント素において対立しているが、「コロシタ」と「ハナシタ」の間には音韻論的に対立がないのである。(中略) 2 モーラの動詞と3 モーラ以上の動詞では音韻的に異なる立場に立つものであることが明らかにされた。(p.244)

と述べている。

今村(1999)は長野県を中心に中部地方で高年層・若年層に対する調査を行い、この土地でのサ行イ音便の実態を明らかにした。

小西(2001)は富山県富山市におけるサ行動詞イ音便の現象について、生え抜きの 1945 年生まれ男性をインフォーマントとして面接調査し、補助的に筆者自身の内省についても触れている。調査結果をまとめると以下ようになる。

2 モーラ動詞…イ音便化しない語が多く、アクセント類別上第一類の語でイ音便化するものは「足す」のみである。この方言においても、2 モーラ動詞第一類のサ行動詞でイ音便がおこりにくいと言える。しかし、この方言ではアクセント上の動詞の対立がないので、福井(1982)のようにアクセントの違いがイ音便化するかどうかを決定する共時的な規則となるわけではない。第1類の動詞以外でもイ音便形が不可な動詞「伏す」「蒸す」などがある。

3 モーラ以上の動詞…語幹末がe以外の動詞でイ音便化が不可なものは「申す」「話す」のみである。「話す」については文献上や他方言でイ音便化しにくいという報告は見られない。

複合動詞…単純要素でイ音便化する動詞が複合動詞の後部要素となる場合はイ音便化する。「越す」はイ音便化しないが、それを後部要素とする複合動詞ではイ音便化が可能である。

他に語幹末がeである語は音便化しないこと、語幹末が長音の語使役性他動詞はイ音便形が可能なが述べられている。そして富山市方言の場合、イ音便化しないことを決定する共時的な音韻上の条件としては「語幹末がe」という点があげられるのみとした。

4. その他の先行研究

これまでに挙げた他にも、近世尾張方言に注目した研究に彦坂(1980)、現代のサ行五段活用動詞に注目した研究に福島(1992)・坪井(2007)がある。

彦坂(1980)は、近世尾張方言のサ行イ音便を、洒落本や説教本を資料として調査し、現代方言についても勘案した。結果、

- (1)この期の尾張方言においては一般にこの音便が盛んであるが、それはほぼ中世末期の中央語（京都語）の状況を反映するものである。ただし、いくらかこれよりも音便が盛んであったふしもある。
- (2)しかし、尾張方言の中でも位相的な差異をみせ、職業からは一般庶民に対して遊里層、場面（文体）からはくだけた物言いに対し改まりの際に、音便形が避けられる傾向が認められた。
- (3)その理由の一つは、国語史の上からみて中央語（上方語・江戸語）にこれが使われず、尾張においても非音便形と併存することから、かなりくだけた物言いでないしやや卑俗感の伴うものであったことが考えられる。(p.9)

と述べている。地方語の文献によって、尾張方言でも中央語の反映が見られたこと、そこには位相差があったことがわかる。

福島(1992)は、現代語のサ行五段活用動詞の大半が他動詞であるという点に注目して、現代語のサ行五段動詞だけにイ音便が起こらないのは、形態面において「他動性」を維持するためであるとした。次のような流れでイ音便の衰退を論じている。まず、文体的な価値の差異の表現として、他の四段動詞と同じくサ行四段動詞も原形と音便形の対立を持った。そして、時代の流れとともに音便形の役割が、文体的な価値の差異の表現から、連用形内部での機能分担に移った。ところが、他動詞がほとんどのサ行四段動詞は、「他動性」を形態面で表示するために連用形全ての場合にサ行子音を保持する道を選んだのだろう、と考察している。

坪井(2007)は、福島(1992)と柳田(1993)の成果をまとめ、自分の考えを付したものである。サ行イ音便の衰退は、そもそも上二段動詞にはサ行の活用語尾を持つ動詞がもともと無く、形態上の差異化の要請は他の行ほど強くなかったのだが、サ行四段動詞が他の行と同じようにいったんはイ音便となり、その後何らかのきっかけによって原形に復帰したものとしている。それを後押しする形で福島(1992)や柳田(1993)の指摘する、2モーラ動詞のうちアクセント第一類の語・いわゆる使役性他動詞・語幹末が長音である語・語幹末母音がeである語等の諸事情が働いたのだとしている。坪井(2007)は柳田(1993)の次の言葉に賛同している。

ここに、サ行の上二段動詞が存在せず、従って、上二段活用は原形、四段活用はイ音便形という対応が存在しなかったから、サ行四段活用動詞が一旦原形にもどりはじめると、容易に回帰は進んだのではないかと見られる。もし、上二段活用動詞にサ行の語が存在していたら、サ行イ音便の歴史は大分変わったものとなっていたはずである。(p.704)

5. 中央語規則とその時代別段階

以上述べたように、中央語のサ行イ音便について言及している先行研究は、殆どがその衰退要因を考察するというものである。なぜなら、サ行イ音便研究においては「サ行動詞は一度音便化していたにも関わらず、なぜ衰退したのか」ということが最も大きな問題であり、注目されてきたからである。2.1 節で取り上げたような、先行研究に挙げられている中央語では音便化しない・しにくい語群も、その語群が衰退の要因であるという観点から考察されているものである。主要なサ行イ音便の先行研究をみると、研究者によって、名づけやイ音便化しない理由の説明は違うものの、音便化しない・しにくい語群については、およそ前掲の①～⑤の 5 つに集約されるようである。ただし⑤少音節語に関しては、音便化しない・しにくい語群として挙げられているものの、①2 音節動詞アクセント第一類の語を内包するものであり、①が反映されているかどうか分かれれば、⑤も当てはまるということになるため、以降、一旦音便化しない・しにくい語群は以下の①～④の 4 つとする。

- ①2 音節動詞アクセント第 1 類の語…「押す」「貸す」「消す」「足す」「召す」など
- ②いわゆる使役性他動詞…「言わす」「折らす」「立たす」「のかす」「持たす」など
- ③語幹末が長音である語…「申す」「通す」「催す」
- ④語幹末母音が e である語…「示す」「試す」「返す」など

本章以降、上掲の音便化しない・しにくい語群のことを、「中央語規則」と呼び、一つの基準とし、この中央語規則が地理的にどう反映されているのかを考察する。すなわち、中央語規則を基準としてみたときの、中央語と方言に現れるサ行イ音便の関係を明らかにすることを主眼に置いて論を進めていくことにする。

さらに通時的には中央語規則は常に①～④が揃って出現しているのではなく、変化していることがわかる。これらの語群が全く音便化しなかったのか、または一旦音便化していたのかと詳しく考察している柳田(1993)の説を参照すると、大まかには以下の表 1 のよう

に変化してきたと考えられる。

表 1 時代別中央語規則

	中古	中世		近世	
	後	前	後	前	後
①二音節語 第一類					
②使役性他動詞 意志動詞 無意志動詞					
③長音 「申す」 「通す」「催す」					
④語幹末e					
	発生				衰退

表 1 の黒い矢印は、その語が音便化していない時代を示している。つまり、十世紀末のサ行イ音便発生時～近世に入るまでの中央語規則は、①の第一類・②の意志動詞・③の「申す」の 3 つであり、近世～サ行イ音便衰退までは②の無意志動詞・③の「通す」「催す」・④の規則が加わり、下位分類も含むと 6 つの中央語規則があったことになる。このことから、中央語規則にも時代別の段階があったことがわかる。

6. おわりに

以上、本章では、これまでのサ行イ音便研究において、サ行イ音便がどのように取り上げられてきたかを概観した。中央語文献・方言・その他の分野で数多くの研究がなされており、特に中央語文献上のサ行イ音便については、橋本(1962)の中央語文献を資料としたまとめた論考をはじめとし、それを受けて他の文献や方言も考慮した奥村(1968)、それらをまとめサ行イ音便が共通語で消失した理由について考えた柳田(1993)等の主たる研究で区切りがついたと考えられている。それ以降、小西(2001)など方言での優れた研究はあるものの、研究が盛んに行われているテーマではなく、停滞している状態であると言える。また、サ行イ音便の消失ばかりが注目されており、以下に挙げるように、いくつかの点において十分でないといえる。

【中央語文献について】

- ・ 動詞の音便現象の中で、サ行イ音便はどのような位置づけなのかが明らかでない。
- ・ 中央語でサ行イ音便が消失した点に主眼が置かれ、それ以外のサ行イ音便に関する記述が少ない。
- ・ 方言と関連しそうであるという研究は多くあるものの、その検証が行われていない。

【方言について】

- ・ 話者が高年層にとどまり、年代差への視点がない。
- ・ 記述は中部地方に多く、その他残存する地域の記述が少ない。

先行研究は全て有用な研究だと言えるが、一方で上記のような課題を残すものであることが分かった。

また、サ行動詞において音便化しない語群については、4 つにまとめ、本章以降「中央語規則」と呼び基準とすること、その中央語規則にも時代別の段階があったことを述べた。

次章では、サ行イ音便の研究に入る前に、音便現象全体の中でのサ行イ音便の位置づけを明らかにするため、動詞の音便現象を概観する。音便現象は、冒頭で述べた通り、生じるタイプにも2通りあり、その上さらに様々な音声環境や音自体が持つ性質が関わるため、音便とまとめて扱い研究の対象とする先行研究は管見の限りない。しかし、音便の種類によって歴史上の成立時期には差があること、地理的な分布の仕方も音便の種類によって異なることに注目すると、その両者には関係性があると考えられる。それは音便現象を個々に考察するだけでは分からないので、ここでは動詞の音便全てを扱う。動詞の音便現象を概観し、中央語文献研究の成果を用い、その地理的分布と歴史的分布を照合する。その結果を元に音便現象の日本全国における通時的な変遷を推定していく。

第3章 動詞の音便の地理的・歴史的分布

1. はじめに

動詞の音便は、特に文献国語史の分野で注目を集めてきたテーマであり、これまでそれぞれの音便が生じた時代やその成立の諸条件などについて広く研究されてきた。中央語文献では、次の表1のような音便形が確認されている。

表1 中央語の音便

活用する行 音便の種類	カ行	ガ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行	バ行	ラ行	マ行
イ音便	○	○	○	×	×	×	×	×	×
ウ音便	×	×	×	×	×	○	○	×	○
撥音便	×	○	×	×	○	×	○	×	○
促音便	○	×	×	○	×	○	×	○	×

これらの音便形は、現代共通語ではすでに衰退しているものもある一方、各方言でその形態が現れることもある。また、中央語文献には現れない方言独自のものと思われる音便形も存在する。これまで各方言の音便形については多くの報告がなされているものの、それらを横断的に扱った研究は少ない。また、中央語文献において音便化する語の音韻・形態論的特徴を方言に適用した研究も多く、中央語と方言の音便に何らかの関係があることが考えられるが、その関係については明言されていない。

そこで本章では、中央語と方言に現れる動詞の音便の関係を明らかにするため、動詞の音便を横断的に扱い、音便化しないことも含めた音便現象の地理的・歴史的分布の形成について考察を行う。すなわち、動詞の音便を扱った地図や中央語文献の先行研究を用い、それらを俯瞰的に総合することで、大まかに方言と中央語に現れる音便の関係を捉えることを目的とする。

以下、中央語と方言に現れる動詞の音便の関係を明らかにすることを論点に据え、次のように進める。まず2節では、『方言文法全国地図(以下 GAJ)』を用いて、複数の地図を重ね合わせ、日本語諸方言の音便の実態について記述する。次に3節では2節で作成した

地図を元に、地理的分布についてより詳細に記述する。4 節では先行研究で明らかになっている中央語の動詞の音便について、大まかな流れを把握し、5 節で地理的分布と歴史的分布を重ね合わせ、6 節でその重ね合わせたものに解釈を加えて、7 節でまとめる。

2. 日本諸方言の音便の実態

表 2 図 1 のパターン一覧

パターン	買	出	飲	飛	研	立	書
1	○	◎	○	○	○	○	○
2	○	◎	○	○	◎	○	○
3	○	◎	○	○	×	○	○
4	○	◎	◎	◎	○	○	○
5	○	×	○	○	○	○	○
6	○	×	○	○	○	△	○
7	○	×	○	○	◎	○	○
8	○	×	○	○	◎	△	○
9	○	×	○	○	△	○	○
10	○	×	◎	○	○	○	○
11	○	×	◎	○	◎	○	○
12	○	×	◎	◎	◎	○	○
13	○	×	△	○	○	○	○
14	◎	◎	○	○	○	○	○
15	◎	◎	○	○	○	△	○
16	◎	◎	○	○	◎	○	○
17	◎	◎	○	◎	○	○	○
18	◎	◎	○	△	○	○	○
19	◎	◎	◎	○	○	○	○
20	◎	◎	◎	◎	○	○	○
21	◎	×	○	○	○	○	○
22	◎	×	○	○	○	△	○
23	◎	×	○	○	△	○	○
24	◎	×	◎	○	○	○	○
25	◎	×	◎	○	◎	○	○
26	◎	×	◎	◎	○	○	○
27	◎	×	◎	◎	○	△	○
28	◎	×	◎	×	×	×	×
30	◎	×	×	×	×	○	△
31	△	◎	○	○	○	○	○
32	△	×	○	○	○	○	○
33	△	×	◎	×	×	×	×
34	△	×	◎	△	×	×	×
35	△	×	×	×	×	×	×
36	△	×	×	×	△	×	×
37	△	×	×	×	△	×	△
38	△	×	×	×	△	△	×
39	△	×	×	×	△	△	△
40	△	×	×	△	×	×	×
41	△	×	×	△	×	△	×
42	△	×	×	△	△	×	×
43	△	×	△	△	△	△	△

まず、日本諸方言に現れる音便の実態を把握するため、GAJ の過去形を示した地図を参照した。14 枚ある過去形の地図のうち、各行の動詞の地図を 1 枚ずつ、計 7 枚選んだ。(カ行 96 図「書いた」)、ガ行 (97 図「研いだ」)、サ行 (92 図「出した」)、タ行 (95 図「立った」)、ハ行 (105 図「買った」)、バ行 (102 図「飛んだ」)、マ行 (103 図「飲んだ」) について、それぞれの語が各地でどのような形態をとるか確認した。同じ行で複数の地図がある場合の地図の選び方は、例えば、サ行動詞の過去形を示す地図は 92 図「出した」・93 図「任した」・98 図「貸した」の 3 枚があるが、「任した」「貸した」は、それぞれ「任せた」「貸せた」との分布を示すことに焦点がある地図であるため、音便だけを観察できる「出した」の地図を選択するというものである。なお、ナ行動詞は GAJ では調査されておらず、ラ行動詞には「蹴った」が存在するが、四段動詞として一般化するのは江戸時代以降であること、また「蹴る」以外の語形で現れることが多いことから、今回は考察から除外している。現代共通語に現れる形式は各語の後に括弧で示した通りであり、サ行のみ非音便形で現れ、その他は音便形で現れる。

上記 7 枚の地図における音便形・非音便形の現れ方を表 2 のように整理し、1 枚の地図にまとめたものが図 1 である。ただし、共通語形と方言形の併用をおこなう地域が非常に多く、全ての語形を地図に反映させると地図が煩雑になるため、共通語形との併用などで複数回答がある地点は、現代共通語に対してより有標な形を採用(「ダシタ」と「ダイタ」の併用ならば、音便形の「ダイ

凡例

- | | | | | | | | |
|----|---|----|---|----|---|----|---|
| 1 | ✂ | 12 | ⊙ | 23 | ┌ | 34 | ∟ |
| 2 | ✂ | 13 | ⊙ | 24 | ┐ | 35 | ∟ |
| 3 | ▲ | 14 | ● | 25 | + | 36 | ∟ |
| 4 | ◼ | 15 | + | 26 | ψ | 37 | ☙ |
| 5 | ・ | 16 | ■ | 27 | ∨ | 38 | ☙ |
| 6 | ⊙ | 17 | ● | 28 | ∨ | 39 | ☆ |
| 7 | ⊙ | 18 | ● | 29 | ┌ | 40 | ☆ |
| 8 | ⊙ | 19 | ✂ | 30 | ┐ | 41 | ♡ |
| 9 | ⊙ | 20 | ✂ | 31 | ↑ | 42 | ☆ |
| 10 | ⊙ | 21 | ψ | 32 | ≡ | 43 | ☙ |
| 11 | ⊙ | 22 | + | 33 | ∟ | | |

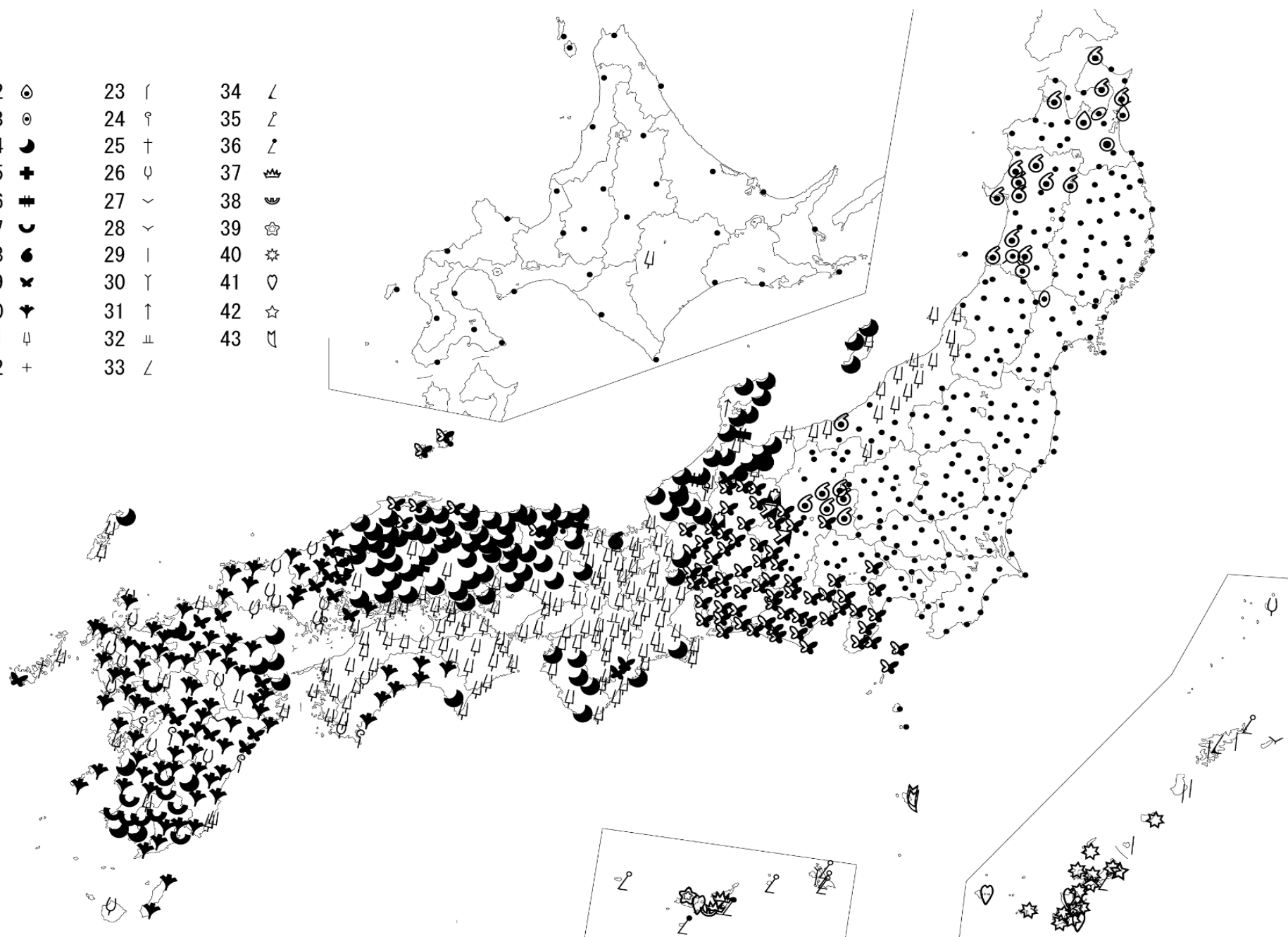


図1 動詞の音便パターン

タ」を採用)し、各地点1回答を地図に反映させている。GAJの7枚の地図に現れる語形を整理すると表2のようになり、ここで示したパターンによって図1の各記号を当てている。表2・表3の「買った」から「書いた」までの各語はGAJの地図の順序とは入れ替えて示しているが、これは音便現象の分布を整理する便宜を図ったためである。例えば、一番左側に挙げた「買った」という語は、GAJ105図を見ると、促音便形「カッタ」とウ音便形「コータ」の対立が典型的な東西分布を成しており、一番右側に挙げた「書いた」は、GAJ96図でほぼ全国的にイ音便形「カイタ」が分布しているものである。このように表2・表3の語の順番は、右側にいくほど、音便のあり方が全国的に同じ語であり、限られた地域でそれとは異なる形態が現れているということになる。

また、表2の記号は、現代共通語を基準として付しており、

- …音便形①（現代共通語に現れる音便形）
- ◎…音便形②（方言にのみ現れる音便形）
- △…その他（調査語と方言形式の対応が異なるもの）
- ×…非音便形

をそれぞれ示している。現代共通語を基準としたのは、音便の種類が違うものを統一的に見ようとするため、イ音便・ウ音便と整理しても動詞の音便を横断的に扱うことにはならないからである。非音便・共通語の音便・方言の音便と整理することで、動詞の音便を横断的に扱えるようになる。

表3 活用する行と音便

GAJ 活用する行	105買った ハ行	92出した サ行	103飲んだ マ行	102飛んだ バ行	97研いだ ガ行	101立った タ行	96書いた カ行
非音便	カヒタ	ダシタ	ノミタ	トビタ	トギタ	タチタ	カキタ
音便①	カッタ	—	ホンダ	トンダ	トイダ	タッタ	カイタ
音便②	コータ	ダイタ	ノーダ	トーダ	トンダ	—	—
その他	トータ等	—	クロータ等	アガッタ等	ミガイタ等	アガッタ等	カカラ等

このように、異なる語の音便のあり方を総合して整理していくと、全部で43パターンの現れ方が存在した。各記号が表わすそれぞれの行ごとの語形については表3に挙げる。表3には非音便形、音便形①、音便形②、その他の具体的な語形を挙げている。

なお、琉球方言については、共時的な過去形の形態で音便・非音便を判別した。判断不能な場合はその他に分類している。例えば「買った」で琉球に一番多く分布している「kootan」は語幹がkootなので音便②、「書いた」で琉球に一番多く分布している「kacjan」は語幹がkacであり判別不能なのでその他に分類したということである。動詞の過去形の形態や出自が本土

方言とは異なることを考慮すると、一様に判断することはできないが、今回は音便現象の概略を掴むことを目的としているため、このような扱いとした。

3. 地理的分布

以上のように作成した図1だが、43種類と音便のパターンが多いため、一旦細かいパターンの分布は除き、大きなパターンの分布だけを取り出してみた。それが図2である。

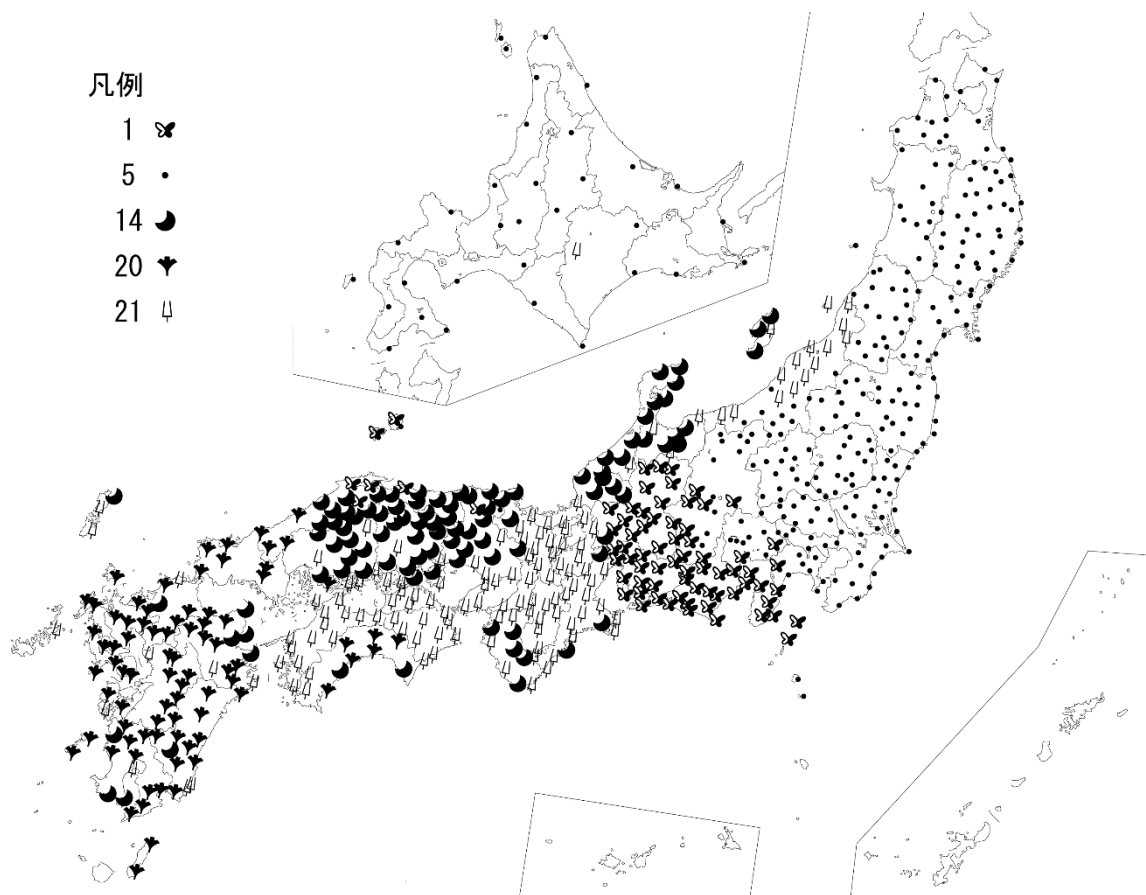






図1 主要なパターンの分布

北海道・東日本に広くパターン5が分布しており、このパターンはサ行が非音便形、その他の行は音便形①で、共通語と同じものである。静岡・長野・岐阜・愛知の中部地方に広く分布しているのは、パターン1である。これはサ行が音便形②のイ音便、その他の行が音便形①となるものである。新潟・近畿・高知以外の四国に広く分布しているパターン21は、サ行が非音便形、ハ行がウ音便形、その他の行は音便形①となるものである。北陸・三重・和歌山・中国地方・九州地方に見られるのは、パターン14である。これはサ行がイ音便形、ハ行がウ音

便形で、その他の行は音便形①である。主に九州地方にみられるのはパターン 20 で、これはサ行がイ音便形、ハ行がウ音便形、バ行・マ行がウ音便形、その他は音便形①のものである。関東以北に現れるパターン 5 がもっとも広い分布を示しており、関東以西はいくつかのパターンに分けられる。

このいくつかのパターンを詳しく見てみよう。近畿から四国や瀬戸内地域にかけて、音叉型  の分布が広がっている。このパターンに特徴的なのは、ハ行ウ音便であり、共通語のハ行が促音便「買った」となるのに対し、この地域はウ音便「買うた」となって現れる点で先に述べた東西分布を見せる地域となっている。その周辺に位置する地域には、月型  が分布しているが、この分布は音叉型のパターンとサ行がイ音便化するという点で対立している。また、月型の西に位置する高知県や九州地方にはイチョウ型  の記号が広く見られるが、これはハ行ウ音便、サ行イ音便の他に、バ行・マ行がウ音便形となって現れる地域である。一方で、月型の東側に位置する中部地方や東海地方に蝶々型  の分布がまとまって見られる。この地域は全ての行で音便形が現れるという点では月型やイチョウ型の地域と通じるが、その実態はむしろ共通語の体系に似ており、共通語のサ行非音便に対しサ行がイ音便化するという点で対立している。

以上のように地理的分布を概観する時、このような音便形の現れ方はどのように形成されたのだろうか。これらの音便、また非音便の地域的なあり方を解く手がかりとして、中央語文献に現れる音便現象について見ていこう。

4. 歴史的分布

中央語の音便に関する築島(1969)や柳田(1993)などの先行研究を基に、各時代の中央語ではどのような音便が成立していたのかをまとめたものが、次ページ表 4 である。まとめる際は、大まかな歴史的変遷を捉えるため、時代ごとの細かな背景は考察せず、定着していたとされる音便形を挙げた。

中央語の音便形は 9 世紀ごろの訓点資料が初出とされており、奈良時代の文献では全ての語が非音便形として現れる。平安時代初期に「書いた」「咲いた」のようなカ行イ音便を中心に動詞の音便現象が広がってきたとされ、サ行イ音便やその他の撥音便・促音便なども数多く出現してはいるが、特に動詞に限った場合、これらが盛んに使用されるのは、カ行イ音便の定着よりも時代が下ってからだと考えられている。その後、室町時代になって全ての音便が定着したとされ、中央語史上最も音便形が多く用いられていた。江戸時代前期の上方では、サ行はイ音便形から非音便形へと回帰した。ハ行はウ音便形、バ行・マ行は撥音便形となった。江戸時代後期になると、京都中央では依然として江戸時代前期の音便形をとるが、中央が江戸に移動したため、江戸中央語としては、音便形は現代共通語のような形をとる。このように中央語でも、

時代によって音便現象は種々の様相を呈している。この各時代の音便のあり方は、現代方言の音便とどのような関わりがあるのだろうか。

表4 時代別動詞の音便

時代 \ 語	買った	出した	飲んだ	飛んだ	研いだ	立った	書いた
奈良	カヒ	イダシ	ノミ	トビ	トギ	タチ	カキ
平安	カヒ	イダシ	ノミ	トビ	トギ	タチ	カイ
室町	コー	ダイ	ノー	トン	トイ	タッ	カイ
江戸前期	コー	ダシ	ホン	トン	トイ	タッ	カイ
江戸後期	カッ	ダシ	ホン	トン	トイ	タッ	カイ

5. 地理的分布と歴史的分布の照合

では、現代の各方言と4節に示した各時代の音便のあり方について考えてみよう。

奈良時代の音便のあり方は全ての行で非音便形が現れるものであるが、現代の方言では全てが非音便形で現れている地域は存在しない。しかし、GAJのパターン33~43は、非音便形とその他（判別不能なもの）のみが現れており、このパターンは琉球地方に集中して分布している。音便形が現れないという点では、奈良時代の音便のあり方に通じるものであると考えられる。

平安時代は各音便が発生する時代であるが、盛んに用いられたカ行イ音便だけを平安時代の音便として位置付けた時、GAJの中には平安時代の音便のあり方に近いものは確認されない。さらに言うと、平安時代に近いパターンを探しても見当たらない。これは、平安時代が、音便が発生し定着していく過渡期にあたる時代であり、現代方言がその過渡期的な状態を反映してはいないからだと解釈できる。

一方で、音便が盛んに用いられ定着した室町時代のあり方とそれに類似したパターンは現代方言の中にもまとまって確認され、GAJではパターン19や20がそれに相当する。すなわち、ハ行・マ行にウ音便が、サ行・ガ行・カ行にイ音便が、タ行に促音便がとすべての行に音便が生じるものであり、九州地方全域や山口県、高知県などに分布している。ここで気をつけなければいけないのがバ行動詞「飛ぶ」のあり方である。室町時代の中央語文献に現れるバ行動詞は語幹末がア、イ、エ、オ段の場合、「呼ぶ」が「呼うだ」のようにウ音便化し、語幹末がウ段の場合に撥音便化することが指摘されているが、GAJで唯一取り上げられているバ行動詞の「飛ぶ」は、語幹末がオ段にも関わらずウ音便化しない語と言われている(湯澤1924)。つまり、表4に示した「飛ぶ」の音便形「トン」は室町時代においては例外であるので、室町時代の音

便のあり方では、この「飛ぶ」を考慮せず現代諸方言に照らした時に、パターン 20 だけではなく、19 とも重なっているということである。

江戸時代前期の音便のあり方は室町時代とは大きく姿を変えており、サ行のイ音便だったものが非音便に、バ・マ行のウ音便が撥音便に変わったとされる。このあり方は現代の方言ではパターン 21 として新潟県・近畿地方・四国地方などに確認されるが、特にサ行のあり方に注目した時、新潟県と近畿地方・四国地方のあり方は、同じパターンでありながら、その成立を異にしていると解される。これについては後述するが、結論だけ先に触れると、近畿地方・四国地方に分布するサ行非音便は、江戸時代前期の中央語でそれまでサ行イ音便であったものが非音便形に回帰した後に広まったものであり、新潟県のサ行音はイ音便の時期を経ることがなく非音便としてあり続けたものと考えられる。これは第5章でも述べるが、サ行イ音便が現れる東端が富山県であることからそう考えることができる。つまり、江戸時代前期と一致するのは、パターン 21 が確認される地域のなかでも、近畿地方・四国地方であるということになる。

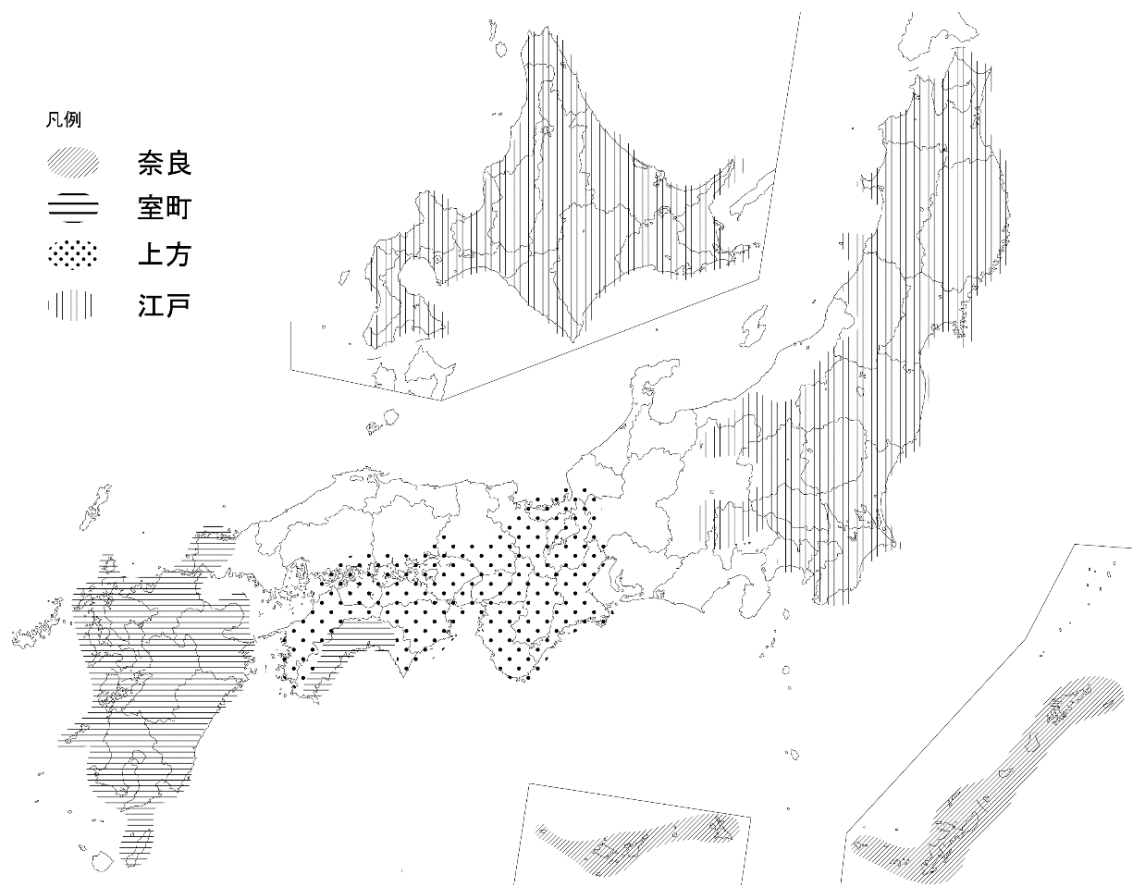


図3 各時代と対応した地域

江戸時代後期の音便のあり方は、現代方言の中では GAJ のパターン 5 に相当する。パターン

5 は北海道・東日本全域に広く分布しており、すでに現代語と同じく、サ行が非音便、ハ行・タ行は促音便、マ行・バ行は撥音便、カ行・ガ行はイ音便をとる。

これらの各時代の音便のあり方と対応する地域を示すと、図3のようになる。このように各時代の音便のあり方は、平安時代を除いて、現代方言にも同じパターンを示す地域が確認され、さらに地理的分布が歴史的分布と相関するように見受けられるのである。このような地理的分布と歴史的分布の重なりからどのようなことが言えるだろうか。本節での照合をもとに、あらためて図1または図2の解釈をおこなう。

6. 地理的分布と歴史的分布の解釈

5 節の照合から、音便パターンの地理的分布と歴史的分布は相関しそうなことがわかった。改めてこれまで挙げた地図を見てみよう。

まず奈良時代の音便のあり方と完全に一致するパターンの地域は存在しないが、音便形が現れないという点では琉球のパターンと同じである。平安時代に対応する音便パターンを持つ地域はないが、室町時代のあり方とそれに類似したパターンは九州地方全域や山口県、高知県などに分布している。江戸時代前期の音便のあり方は、近畿地方・四国地方などに確認される。そして東日本の大部分が江戸時代後期のパターンと一致している。

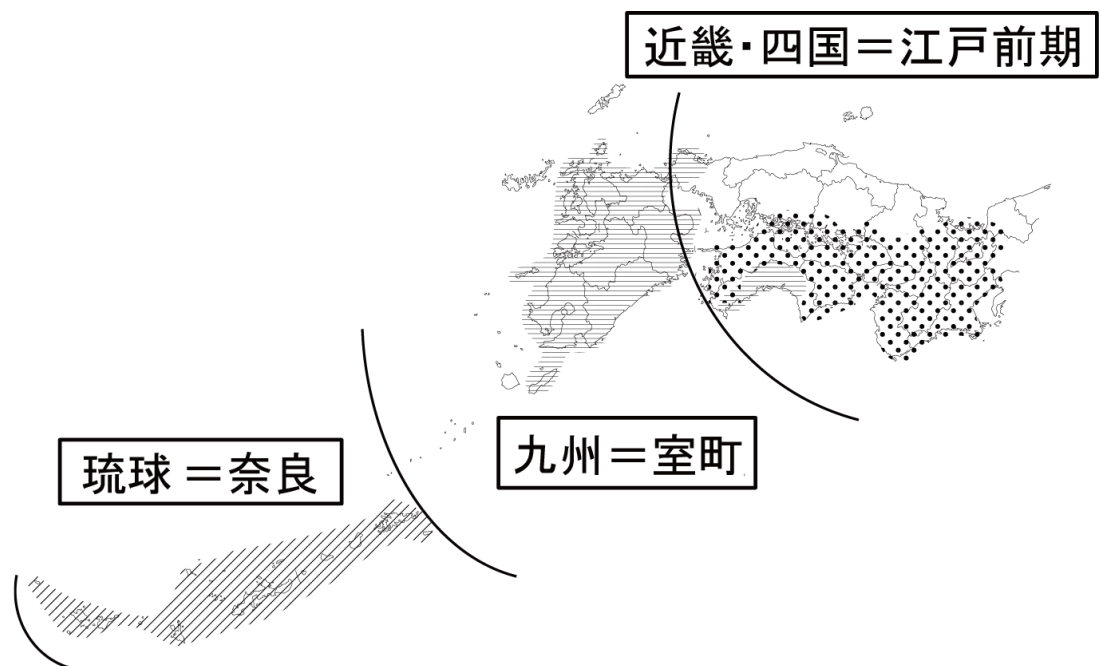


図4 西日本における同心円状の分布

このように分布を見ていくと、大きく次のような対応をしていることがわかる。すなわち、図4のように琉球には奈良時代の、九州・北琉球には室町時代の、近畿・四国には江戸時代前期の音便形が分布しており、西日本を中心とした周圈的な広がりを見ることができるとのことである。その一方で、関東から東北にかけては江戸時代後期の音便パターンが広がっていた。江戸時代後期と東日本にあるこのパターンについては後述する。

このような地理的分布と歴史的分布の対応から、各地に現れる音便形は、大局的には京都中央からの伝播によるものと考えて良いのではないだろうか。周辺部には古い時代の音便パターンが、京都中央に近くなるとより新しい時代の音便パターンが広がっている。

ここまで取り上げたパターンだけではなく、例えば、北陸から中国地方にかけて広く分布するパターン14は、歴史的分布と一致していないため5節の照合では取り上げなかったが、これは方言だけにみられるパターンであり、中央語文献には現れないけれども、実際に京都中央では音便形がそのようなパターンである時期もあったということが考えられる。以下の表6に室町・パターン14・江戸前期の音便パターンを並べてみたが、サ行「出す」についてはイ音便形という点でパターン14は室町と共通しており、マ行「飲む」では撥音便形という点でパターン14は江戸前期と共通している。

表6 室町・パターン14・江戸前期の音便

語 時代・パターン	買った	出した	飲んだ	飛んだ	研いだ	立つた	書いた
室町	コー	ダイ	ノー	トン	トイ	タッ	カイ
パターン27	コー	ダイ	ホン	トン	トイ	タッ	カイ
江戸前期	コー	ダシ	ホン	トン	トイ	タッ	カイ

また、図1や図2を見ると、パターン14は、江戸時代前期と対応すると先述したパターン21の近畿地方・四国地方における分布の外側に分布し、さらに室町と対応するとしたパターン19・20の九州地方・山口県・高知県における分布の内側に分布しており、地理的にもこれらは連続している。以上から、パターン14のような音便パターンは、室町～江戸前期の間にあったと想定することができる。

以上のように中央語の音便パターンと方言における音便パターンの分布が対応することから、音便パターンの分布については、大まかには京都中央からの伝播で説明することができると考えて差し支えないと思われる。

中央からの伝播と言っても、それぞれの音便形の分布は、同じように同心円状に広がっているというわけではない。すでに表2でも示したように、例えばハ行の音便は東西で大きく対立し、ガ行撥音便は局地的な分布しか見せていないというように、音便の種類によってその全国的な分布が異なっている。これを踏まえて、各音便の分布形成について考察していこう。

まず、全国でもっとも顕著な対立を持つのは、ハ行のウ音便「買うた」と促音便「買った」

であり、西日本にウ音便が、東日本に促音便が広がっている。これは東西方言の言語体系によって生まれた対立と解され、西日本では一般に母音優位性が、東日本では子音優位性が指摘されており、このような東西方言の基層にある言語体系の差が異なる音便を形成したと解される。同様の事がサ行のイ音便「出いた」と非音便「出した」にも見られる。これも東西に大きく対立して見られる音便で、母音優位の西日本ではイ音便化が広く確認され、子音優位の東日本では非音便形が展開している。ただし、イ音便が分布する西日本諸方言にあって、もっとも中心に位置する近畿・四国にイ音便は現れていない。これはサ行イ音便が中央語で盛んに使用された室町期に、西日本では一気にイ音便が広まったものの、江戸時代前期の中央語でサ行イ音便が衰退し、非音便形「出した」に回帰すると、その非音便形が中央から現在の近畿・四国に伝播していきこのような分布を形成したものと考えられる。この西日本内での非音便形の分布を見ると、もともと母音優位である西日本諸方言では回帰したサ行非音便形の伝播は定着しにくかったと見てよいだろう。

サ行非音便形の西日本における分布を以上のように捉えたと、マ行ウ音便「飲うだ」の分布についても平行して説明できそうである。マ行の音便はウ音便「飲うだ」と撥音便「飲んだ」であるが、ウ音便はやはり西日本方言にしか確認できない。具体的には富山、石川、奈良、高知、島根、山口、九州各地にマ行ウ音便が分布しているが、西日本の中心では撥音便となって現れている。この分布はすなわち、先に西日本でウ音便形が広がったのち、上方期になって西日本のウ音便が衰退し撥音便化したものが西日本諸方言の中に伝播していき、その周辺にもとのウ音便形が残存していると解されるのである。サ行非音便の伝播より広い地域にマ行撥音便形は伝播したと言えるだろう。

話を東日本に戻して、江戸時代後期と東日本のパターンを見てみると、表5のように、「出した」が非音便であり、「買った」は促音便、その他は江戸時代前期と同じ音便形をとる。それ以外の「飲んだ」「飛んだ」「研いだ」「立った」「書いた」は江戸前期以前に定着した音便であるということが分かる。

表5 江戸後期とパターン5の音便

語 時代・パターン	買っ-た	出し-た	飲ん-だ	飛ん-だ	研い-だ	立つ-た	書い-た
江戸前期	コー	ダシ	ホン	トン	トイ	タッ	カイ
江戸後期	カッ	ダシ	ホン	トン	トイ	タッ	カイ
パターン5	カッ	ダシ	ホン	トン	トイ	タッ	カイ

ここで金田一(1967)を見ると、

「思ッテ」「笑ッテ」のような、動詞の促音便と言われるものは、もともと関東の土語で、古い omopite, warapite の [i] が無声化して発音された形から直接変化した形

であろう。関東方言では、関西方言よりも p>F の変化がおくれたことと思われる。静岡県安倍郡井川村方言や東京都下の伊豆八丈島方言などに、パシル（走る）とかピカル（光る）とかいう類のパ行音ではじまる語があるのもそれと関係があるであろう。加藤信昭氏によると、この現象は千葉県山武郡の方言にも見られるらしい（『方言学講座』第2巻 p.p.286～7）。

「思ヒテ」「笑ヒテ」が「思ッテ」「笑ッテ」となっているのに対して、「書キテ」「動キテ」が「書ッテ」「動ッテ」とならず「書イテ」「動イテ」のようなイ音便の形になっているのは、東国の発音としてはなはだ不調和である。「カキコム」が「カッコム」になり、「ツキタツ」が「ツッタツ」になるのが東国的な言い方である以上は、「書イテ」「動イテ」は、「カイコム」と言ったり「ツイタツ」と言ったりする関西的な言い方だ。これは、関西方言がそのままの形で東国の地へはいつてきた例と見られる。今、東京都下の八丈島とその属島で「書ッテ」「動ッテ」という言い方が行なわれている。これは、以前関東の地に広く行なわれていた言い方が残存したものであろう。「行キテ」が「行ッテ」になっているのは、もともとの関東の言い方が今の東国に広く残存した珍しい例だ。「歩キテ」を「歩ッテ」と言う例も関東を中心としてかなり広い地域に聞かれる。

ところで、八丈島の中の郷・檜立方言では、動詞の促音便はもっと進んで、が行やハ行の四段活用動詞にも及び、「泳ギテ」を「泳ッデ」と言い、「飛ビテ」を「飛ッデ」と言う。これに似た傾向は、伊豆利島の方言に見られ、寺田泰政氏によると、静岡県井川村の方言にもあり（『国語研究』第6号 p.37）、馬瀬良雄氏によると、長野・新潟県境の秘境、秋山郷にもある（『方言学講座』第2巻 p.325）。

中沢政雄氏の記述によると、群馬県北部の山間地帯にありそうだ（『季刊・国語』第6号 p.39）。こういう例を見ると、四段活用動詞プラス「テ」「タ」の形を、今東日本で「泳イデ」「飛ンデ」と言うのは関西方言の形で、「泳ッデ」「飛ッデ」が関東の古い言い方であろうと思う。（pp.43-44）

と述べている。先ほど東日本は子音優位だと述べたが、「イ音便形ははなはだ不調和」、イ音便形を「関西方言がそのままの形で東国の地へはいつてきた例」と述べているように、イ音便は東日本では受け入れがたかったことが分かる。古くからイ音便形が成立していたカ行動詞は受け入れざるを得なかったものの、後発のサ行動詞は東日本の多くの地点で受け入れられなかったようである。

その他の語「研ぐ」「書く」「立つ」は琉球を除き全国的に同じ音便形が分布しており、「研いだ」「書いた」「立った」となって現れている。これらの語が東西対立を形成せずに、全国一律な音便形を持つ理由については定かではないが、東西の言語差ではない日本語全体に通じる言語規則が存在しているかもしれない。さらにガ行動詞「研ぐ」には、イ音便形「トイダ」と共に撥音便形「トンダ」が、青森、秋田、長野にまともって現れ、新潟、岐阜、富山、石川、

長崎に各1地点ずつ現れる。これも伝播によるものかと言えばそうではなく、非音便形「トギタ」のngのgが脱落して撥音便のようになった、iが鼻母音であった故にイ音便形を介して「トンダ」と撥音便形になったなど、各地の音環境もそこに関わって、その地域で独自の自律的变化を起こしたものと考えるのが妥当であろう。

音便形が必ずしも全て中央からの伝播によって形成されたわけではなく、各地の自律的变化が起きることもあり、音便形の形成には伝播と自律的变化が複雑に関わっていると言える。

7. おわりに

以上、GAJによる音便の地理的分布と、先行研究による中央語における変遷から、

- (1) 音便は西日本だけで言えば、周圈的な分布で現れる。
- (2) 音便の地理的分布は、中央語の歴史的変遷と対応している。
- (3) 音便・非音便は中央からの伝播によって起こる現象である。
- (4) 自律的变化によって音便・非音便が起こることもある。

ことが明らかになった。

今後の課題としては、今回は音便の地理的分布をGAJのごく限られた動詞でしか確認しなかったため、果たして他の動詞にも同じことが言えるのか、確認してみる必要があるということが挙げられる。また、音便現象がどのような要因によって広まったのかということも、より詳細に考える必要がある。

第4章 富山県におけるサ行イ音便

1. はじめに

本章では、第2章で確認した中央語規則を一つの基準として、面接調査の結果をもとに、富山県におけるサ行イ音便の実態について詳細な記述を行うことにする。

サ行イ音便は、現在は西日本を中心とした方言に残存し、本章で調査を行う富山県はほぼ全域にサ行イ音便が存在していることが、国立国語研究所(1991)『方言文法全国地図(以下GAJ)』第2集の92図「出した」で確認できる。富山県におけるサ行イ音便の記述的研究には、第1章の先行研究で述べたように、小西(2001)に富山県富山市方言の例がある。小西(2001)は、非常に詳細に、また動詞を網羅的に調査し報告したものであるが、1人のインフォーマントによる調査のため、一個人の記述にとどまっている面がある。そこで本章では、富山県内全域の調査により、できるだけ多くのサ行動詞について、イ音便化する語・しない語の実態を明らかにすることを目的とする。

次節から、富山県高岡市と富山県全域で行った調査をもとに報告する。

まず初めに行った富山県高岡市調査は、富山県全域で調査を行う前に、富山県高岡市という限られた地域の中で誰がサ行イ音便を用いるのか、を知るために設定した調査である。具体的に言えば、もしサ行イ音便の使用に年代差や性差が生じるのであれば、富山県全域調査でのインフォーマントの年代・性別を固定しようとするための調査である。

次に行った富山県全域調査は、富山県高岡市調査で得られた結果からインフォーマントを一定の条件で固定し、富山県内での地域差と、各地点でのイ音便化する語・しない語の実態を明らかにするための調査である。

以下、富山県におけるサ行イ音便の実態を探ることを論点に据え、次のように進める。まず2節で富山県高岡市調査の概要と結果について述べる。次に3節では、富山県全域調査の概要と結果について述べ、考察し、4節でまとめる。

2. 先行研究

富山県におけるサ行イ音便の記述的研究には、前節でも述べたが、小西(2001)がある。小西

(2001)は富山県富山市におけるサ行動詞イ音便の現象について、生え抜きの 1945 年生まれの男性をインフォーマントとして面接調査し、補助的に筆者自身の内省についても触れている。調査結果をまとめると以下のようになる。

2 モーラ動詞…イ音便化しない語が多く、アクセント類別上第一類の語でイ音便化するものは「足す」のみである。この方言においても、2 モーラ動詞第一類のサ行動詞でイ音便がおこりにくいと言える。しかし、この方言ではアクセント上の動詞の対立がないので、福井(1982)のようにアクセントの違いがイ音便化するかどうかを決定する共時的な規則となるわけではない。第 1 類の動詞以外でもイ音便形が不可な動詞「伏す」「蒸す」などがある。

3 モーラ以上の動詞…語幹末が e 以外の動詞でイ音便化が不可なものは「申す」「話す」のみである。「話す」については文献上や他方言でイ音便化しにくいという報告は見られない。

複合動詞…単純要素でイ音便化する動詞が複合動詞の後部要素となる場合はイ音便化する。「越す」はイ音便化しないが、それを後部要素とする複合動詞ではイ音便化が可能である。

他に語幹末が e である語は音便化しないこと、語幹末が長音の語使役性他動詞はイ音便形が可能なことが述べられている。そして富山市方言の場合、イ音便化しないことを決定する共時的な音韻上の条件としては「語幹末が e」という点があげられるのみだとした。小西(2001)では中央語規則④のみに従っているということになる。

また、先述の通り GAJ では、数語のみだが県内での分布が分かる。GAJ では「出す」と「貸す」の 2 語が富山県内 11 カ所において調査されており、結果を地図で示すと、以下の図 1・2 のようになる。「出す」と「貸す」はそれぞれアクセントが、「出す」は第二類であり、「貸す」は第一類である。つまり、中央語規則①「2 音節動詞のうちアクセント第一類の語は音便化しにくい」によると、中央語において「出す」は音便化する動詞であり、「貸す」は音便化しない

凡例

◎ ダイタ
▲ ダシタ

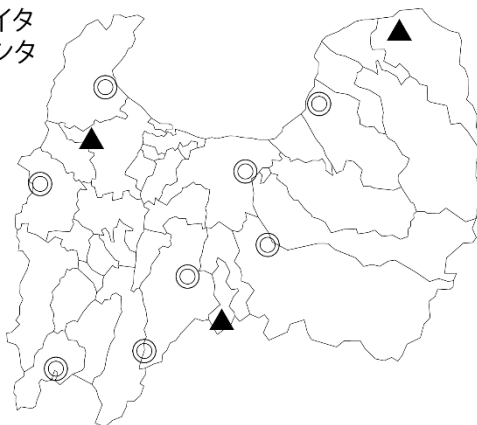


図1 GAJ「出した」

凡例

▲ カシタ
■ カセタ

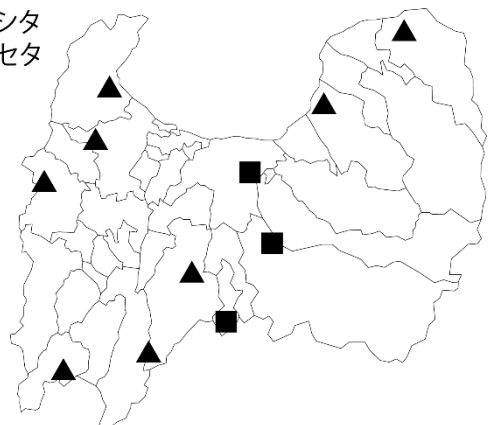


図2 GAJ「貸した」

動詞である。1 語ずつではあるが、この 2 枚で中央語規則①がどのような分布を成しているのかを見ることができるのである。図 1 と図 2 を比べると、富山県では、「出す」は 8 地点で音便化しているが、「貸す」は音便化する地点がない。この 2 語だけを見ると、中央語規則①「2 音節動詞のうちアクセント第一類の語は音便化しにくい」に従っているようである。さらに図 1「出した」の地図を見ると、おおよそ県内全域にサ行イ音便が存在していることが分かる。このように 2 語については分かるが、他の動詞はどうか、中央語規則の通りなのか等、詳細までは分からないため、富山県においてサ行イ音便の実態を調査行うことにする。

3. 富山県高岡市調査

3.1. 調査概要

小西(2001)が対象としている富山県富山市に次いで大きい市町村であり、富山県内の西側の中心地である高岡市に地域を限定し、富山県高岡市調査を行った。この調査は富山県高岡市という、富山県内のある特定の地域での、サ行イ音便使用の位相差を見ることを目的とした調査である。

調査期間：2006 年 7 月～8 月

調査地点：富山県高岡市内全域(地点は図 1 を参照)

調査語：大西拓一郎編(2002)の動詞一覧表を参考に抜き出した、富山県高岡市方言で一般に使用される以下の標準語の動詞 56 語。

貸す・刺す・挿す・差す(指す)・足す・出す・蒸す・消す・押す・越す・干す・あやす・荒らす・凝らす・壊す・澄ます・照らす・鳴らす・均す・離す(放す)・話す・更かす・蒸かす・化かす・燃やす・隠す・なくす・外す・許す・返す・起こす・落とす・降ろす・こぼす・過ごす・倒す・寄越す・通す・差し出す・しでかす・耕す・費やす・出くわす・持て成す・寝過ごす・甘やかす・驚かす・思い出す・志す・唆す・膨らます・煩わす・思い起こす・思い直す・思い巡らす

調査方法：臨地面接調査で「「出す」を「ダイタ」と言いますか？」とイ音便形の使用の有無を質問した。調査の際、調査者からイ音便形を提示し、使用するか判断してもらう。

インフォーマント：富山県高岡市の生え抜き(外住歴 3 年以内、両親共に富山県内出身者)で 10 歳代～70 歳代の各年代男女 3 名ずつ、80 歳代のみ男女 2 名ずつ計 46 名。

インフォーマントの出身地・生年・性別(M:男性 F:女性)を以下に挙げる。

川原本 1991M/大野 1989M/能町 1988M/川原 1990F/戸出 1988F/開発本 1988F/

戸出 1986M/戸出 1985M/戸出 1985M/開発本 1985F/頭川 1984F/頭川 1983F/

45

表1 富山県高岡市調査の結果

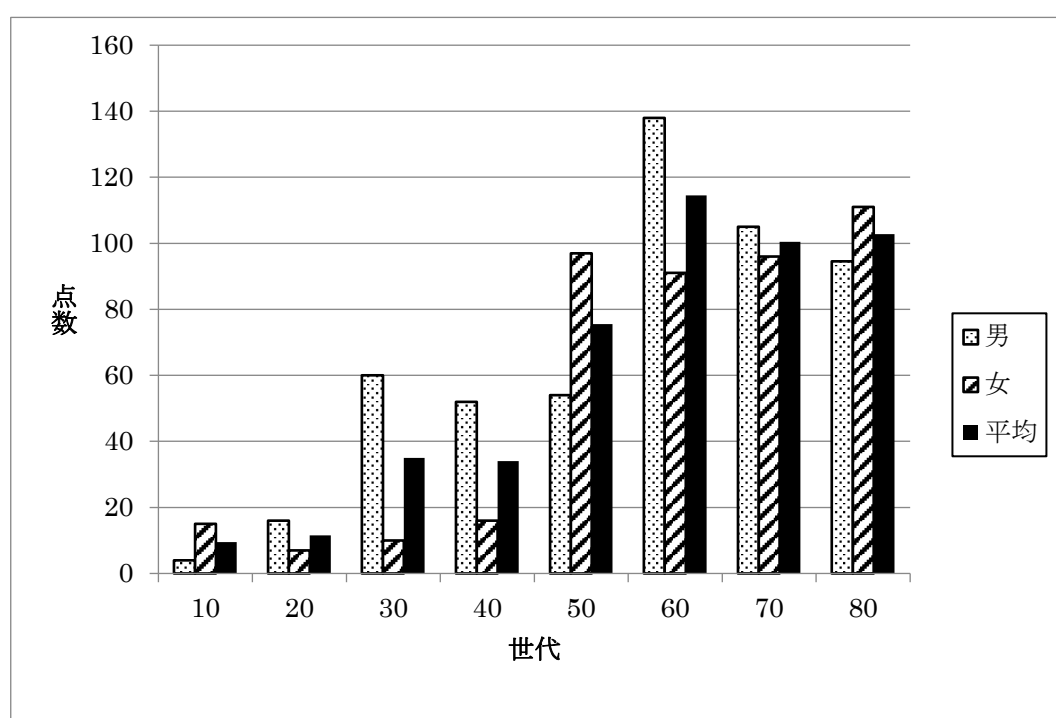
世代		10		20		30		40		50		60		70		80	
男女		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
2エーラ動詞																	
a	貸す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	刺す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	挿す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	差す(指す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	足す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
u	出す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	蒸す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	消す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	押す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	漉す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
o	越す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	干す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
3エーラ動詞																	
a	あやす	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	荒らす	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	凝らす	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	壊す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	澄ます	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	照らす	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	鳴らす	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	均す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	離す(放す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	話す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	更かす	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	蒸かす	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	化かす	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	燃やす	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
u	隠す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	なくす	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	外す	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

年代	10		20		30		40		50		60		70		80	
男女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
許す	×××	×××	×××	×××	○××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	×××	○××	×××	××	○×
e 返す	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	××	××
o 起こす	×××	○××	○××	×××	○××	×××	○××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
落とす	○××	○××	○××	○××	○××	×××	○××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
降ろす	×××	○××	○××	○××	○××	×××	○××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
こぼす	×××	○××	○××	×××	○××	×××	○××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
過ぐす	×××	×××	×××	×××	○××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
倒す	×××	○××	○××	×××	○××	×××	○××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
寄越す	×××	○××	○××	×××	○××	×××	○××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
oo 通す	×××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
4エーラ動詞																
a 差し出す	×××	×××	×××	×××	○××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	×××	○××	○××	○×	○×
しでかす	×××	×××	×××	×××	○××	○××	×××	×××	○××	○××	○××	×××	○××	○××	××	○×
耕す	×××	×××	×××	○××	○××	○××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
費やす	×××	×××	×××	×××	○××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	××	○×
出くわす	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
持つ成す	×××	×××	×××	×××	○××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	××	○×
o 寝過ぐす	×××	×××	×××	×××	○××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
5エーラ動詞																
a 甘やかす	×××	×××	×××	×××	○××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
驚かす	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
思い出す	×××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
志す	×××	×××	×××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	××	○×
唆す	×××	×××	×××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
膨らます	×××	×××	×××	×××	○××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
煩わす	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	××	○×
6エーラ動詞																
o 思い起こす	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
思い直す	×××	×××	×××	×××	○××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
7エーラ動詞																
a 思い巡らす	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	×××	○××	○××	○××	○××	○××	○××	○×	○×
点数	4	15	16	7	60	10	52	16	54	97	138	91	105	96	94.5	111

3.2. 調査結果

前ページ表1は、富山県高岡市調査の調査結果である。○がイ音便形を使用すると回答した人、×がイ音便形を使用しないと回答した人である。各動詞は音節ごと、語幹末母音ごとに並べた。一番上の数字は世代であり、その下に男女別で○×を示している。一番下の点数は、音便形を使用した人(○の人)が1点、音便形を使用しない人(×の人)が0点、ただし80歳代は2名ずつなので音便形を使用した人(○の人)が1.5点とし、世代・性別ごとにその合計を出したものである。

グラフ1 世代・男女ごとの音便化の点数



上のグラフ1は、表1の点数を棒グラフにしたものである。点数が高いほど、音便形をよく使用するということになる。まず、年齢差に注目してみると、10・20歳代、30・40歳代、50歳代、60歳以上と使用する世代を分けることができる。10・20歳代の若年層では、かなり音便形を使用しておらず、衰退していることが分かる。一番多くの語で音便形を使用するのは60歳代であり、一番使用しないのは10・20歳代であった。また、50歳代を見てみると、男性は30・40歳代に近く、女性は60歳代以上と似たグラフになる。50歳代は壮年層と老年層の中間に位置づけられるようである。したがってイ音便形を比較的好く使用する世代は60歳代以上であると言える。この地域でのサ行イ音便の使用には年代差があることが分かった。

次に男女差に注目してみると、若干男性の方が多く音便形を使用するという傾向が見える。急に音便率が上がるのが、男性が30歳代以上・女性が50歳代以上ということからも、男性の

方が、比較的年齢が若くても使用することが分かる。しかし男女でひどく差があるという語は見られず、世代別にせず全体を平均した時も、男女差と言えるほどの差は見られなかった。サ行イ音便の使用に性別は関わらないと言える。

3.3. 富山県高岡市調査のまとめ

今回の調査は、富山県高岡市という富山県内のある特定の地域でのサ行イ音便使用の位相差を見ることを目的とした調査である。したがって、一語ずつを見ていくことはせず、大きくサ行イ音便の使用に世代差があるか・男女差があるかについて見た。結果、世代差はあり、世代別に分けると60歳代以上、50歳代、30・40歳代、10・20歳代という順にサ行イ音便をよく使用する。また、サ行イ音便に性別は、積極的には関わらないようである。この結果に従って、次の富山県全域調査では、インフォーマントの世代を60歳代以上に限定し、性別については限定しないということにした。

4. 富山県におけるサ行イ音便の実態

4.1. 調査概要

富山県高岡市調査で位相差を明らかにした上で、富山県全域を対象とする富山県全域調査を行った。この調査は富山県全域において、サ行イ音便の地域差と、イ音便を起こす語と起こさない語の傾向を見ることを目的とした調査である。



図4 富山県全域調査の調査地点

調査期間：2007年9月下旬～11月上旬
調査地点：富山県内旧市町村区分の19地点(図4を参照)

調査語：国立国語研究所(1971)と富山方言に関する語彙集30冊を参考に、標準語の語彙は標準語の語彙は2音節19語・3音節133語・4音節46語・5音節23語・複合動詞31語・使役性他動詞16語の計268語、方言の語彙は2音節3語・3音節38語・4音節60語・5音節128語・6音節56語・7音節35語・8音節8

語・9音節2語の計330語、全部で計598語(高岡市調査で調査した語を含む)

調査方法：臨地面接調査で「「出す」を「ダイタ」と言いますか？」とイ音便形の使用の有無を質問した。調査の際、調査者からイ音便形を提示し、使用するか判断してもらう。

インフォーマント：その土地生え抜きの 60 歳代以上の方、各地点 1 名以上で計 22 名である。

60 歳代以上のインフォーマントに限定した理由は、富山県高岡市調査や先行研究などから富山県内において普段イ音便形を多く使用するのは 60 歳代程度の世代であろうと推定されたためである。富山県全域調査のインフォーマントの出身地・生年・性別を以下に挙げる。

氷見市脇方 1932F / 氷見市脇方 1932F / 福岡町福岡 1932 生 F / 福岡町福岡 1930F / 高岡市開発本町 1932F / 福野町八塚 1930F / 大門町大門 1935M / 小杉町太閤町 1935F / 上平村小原 1925M / 婦中町長沢 1932F / 八尾町諏訪町 1929F / 富山市安養寺 1937M / 大沢野町下大久保 1935M / 大沢野町下大久保 1937F / 細入村猪谷 1937M / 立山町芦峯寺 1937F / 滑川市柳原 1928M / 上市町東種 1937M / 魚津市上口 1932M / 宇奈月町浦山 1926M / 入善町上野 1932F / 朝日町横水 1931F

4.2. 調査結果

本調査は 19 地点で 598 語の調査を行ったため、調査結果全体から分析は行っているが、結果のすべてを示すと煩雑になってしまうため、ここでは調査結果のうち、4.3. の調査結果の分析で触れる部分を特に抜粋し、表に示す。全ての調査結果は巻末資料に示す。

4.3. 調査結果の分析

4.3.1. 地域差

富山県全域調査の結果について、地域差に注目してみると、まず、朝日・入善・宇奈月(図5の×の地点、表2・巻末資料の右端の3地点)ではサ行イ音便は一つも現れなかった。これらの地点は富山県の東端にあり、『GAJ』では朝日のみ非音便形を使用している。この朝日・入善・宇奈月はイ音便形が殆ど現れない新潟県と隣接している地域である。ここから、富山県におけるイ音便形使用の大まかな境界線(図5の太線)が分かる。全く音便化しないこの3地点に関しては、次からの考察に含めない。

『GAJ』の92図「出した」を見ると、富山県全域でイ音便形「ダイタ」が回答されているが、福岡町福岡・細入村猪谷・朝日町草野の3地点は「ダシタ」と非音便形が回答されている。福岡町福岡の周辺地域ではイ音便化が盛んであり、そこだけがイ音便化しないというならばその理由を考える必要があるだろう。ところが筆者の調査では、朝日町以外の福岡町福岡・細入村猪谷においてイ音便形がよく現れ、『GAJ』とは異なる結果となった。それが何故かについて言及することは避けるが、本論では今回の調査の結果に従い、これ以降福岡・細入はイ音便を持つ地域とみなして論をすすめていく。

また、富山県の全地点でイ音便形が現れるような動詞ではイ音便形が現れるが、その他の動詞ではイ音便形が現れない地点に、上平・上市(図5の△の地点)がある。この2つは他の地域と比べ、比較的山の地点であり、昔は平野部との交流もなかった地点である。これらの地点でイ音便形の使用が少ないのは、元々現在音便化している語のみイ音便化していたのか、共通語化の影響で衰退したのかのどちらかである。また、表2・巻末資料の中で使用した○の回答の実態に触れておくと、平野部の地点(富山・大沢野等)では質問に対してすぐイ音便形が回答されなかったり、誘導で思い出したりしてもらった語もいくつかあるが、海に近い地点(氷見・高岡・滑川・魚津等)ではイ音便形がすぐに回答された、ということからも、山側の地点より平野部の地点がイ音便形をよく使用し、またその平野部の地点よりも海に近い地点の方がさらにイ音便形をよく使用すると言える。

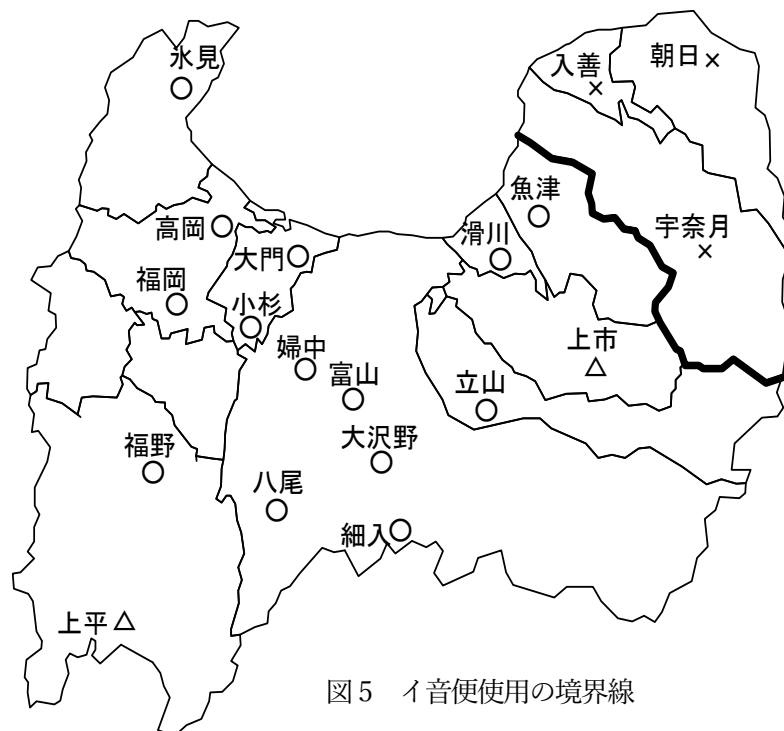


図5 イ音便使用の境界線

4.3.2. 調査結果と中央語規則

これまでの章でも挙げたが、中央語規則を以下に再掲する。中央語規則とは、サ行でイ音便が起こりにくいとされる動詞の特徴のことであり、次のものが挙げられる。

- ①2 音節動詞アクセント第一類の語は音便化しない。
- ②いわゆる使役性他動詞は音便化しない。
- ③語幹末が長音である語は音便化しない。
- ④語幹末母音がeである語は音便化しない。

以下、サ行イ音便の実態を探るにあたって、上掲の①～④の中央語規則はどのように現われるのかを中心に述べていくこととする。

4.3.2.1.2 音節動詞アクセント第一類の語

それでは、中央語規則①～④の順に各地点がその規則に従っているかという観点から調査結果を見ていこう。地点名を左側は西部、右側は東部となるように順に並べている。○が音便形を用いる、×が非音便形を用いる、空欄はその動詞を使用しないと回答されたものである。

まず、①2 音節動詞アクセント第一類の動詞について見ていこう(表1)。第一類のアクセントは京阪式アクセントでは HH、東京式アクセントでは LH になるもの、第二類のアクセントは京阪式アクセントでは LH、東京式アクセントでは HL になるものである(H=高く発音、L=低く発音)。富山県は動詞のアクセントが一型なので、全て HL になる。

第一類では、全地点において音便形を用いない。第二類では「越す」のように音便形があまり現れない語はあるものの、調査した語は必ずどこかの地点で音便形となっている。中には「刺す」「干す」のように 1 地点を除きすべて音便形で用いる語もある。地点を見てみると、上平は第二類でも音便形を使用することが少ないようである。富山では使用するすべての第二類の語が音便形を用いることができるようだ。この調査結果から、富山県では、中央語規則①の傾向がかなり残存しているようであると言える。

表1 2 音節動詞

中央語規則①		氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津
第一類	オス(押す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	カス(貸す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	ケス(消す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	タス(足す)	×	×	×	×	×		×	×	×		×	×	×			×
	マス(増す)	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×		×			×
第二類	コス(濾す)	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	×			○
	コス(越す)		×	×	×	×		×		×		×	○	×		×	×
	サス(刺す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	サス(注す)	×	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	○	○
	サス(挿す)	○	○	×	○	×		×	×	○	○	×	×	○		○	○
	サス(差す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○		○	○
	ダス(出す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○
	ホス(干す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ムス(蒸す)	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×

4.3.2.2. 使役性他動詞

次に、②使役性他動詞について見ていこう(表2)。全ての地点で音便形が回答されており、

非音便形のみ用いるという動詞はなかった。全体的に×の非音便形が多いようではある。氷見・福岡・滑川・魚津のような地点は、比較的どのような使役性他動詞でも音便形を用いるようであるが、小杉・府中・上市のような地点1語ずつしか音便形を用いていない。しかし、同じ音節数の使役性他動詞ではない動詞が、殆どの語・地点で音便形になっていることを鑑みると、音便形になりにくい傾向にあると言えるかもしれない。

表2 使役性他動詞

中央語規則②	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津
イカス(行かす)	○	×	○	×	×	○	×		×	×	×	○	×	×		○
イワス(言わす)	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
オラス(折らす)	×	×	○	×	×	○	×	×	×	○	×	○	×	×	○	×
カガス(嗅がす)	×	×	×	×	×		×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
キカス(聞かす)	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
クワス(食わす)	○	×	×	×	×	×	○		×	×	×	×	○	×		×
シラス(知らす)	×		○	×	×			×		○	×	×	×	×	○	×
ナカス(泣かす)	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	○
ネカス(寝かす)	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	×	○	○	×	○	○
ノマス(飲ます)	○	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	○	○
モタス(持たす)	○	×	○	×	×		×	×	×	○	×	×	×	×	×	○
アソバス(遊ばす)	○	×	○	×	×	○	×	×	×	○	×	○	×	×	○	○
コロバス(転ばす)	○	×	×	×	×	○	○	○			×		×	×		
ハシラス(走らす)	○	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○	○	×	×	×
ナワラス(習わす)	×	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	○	○
ハタラクas(働かす)		○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○		×	○	○

4.3.2.3. 語幹末が長音である語

次に、③語幹末が長音である動詞について見ていこう(表3)。現代共通語で用いられている語幹末が長音のサ行五段動詞は、「通す」と「催す」の2語のみである。今回「申す」も調査してみたが、やはり使用する地点はなかった。「通す」とその複合語「やり通す」は全地点で音便形を用いる。富山県方言はシラビーム方言のため、長音をそのまま保存するか否かに違いは見られたが、語幹末が長音であっても、音便形になると考えてよいだろう。「催す」の調査も行ったが、こちらは語の使用頻度が低いからか、非音便形で用いる地点の方が多いものの、音便形を用いる地点もみられる。この調査結果から、中央語規則③は残存していないと言える。

4.3.2.4. 語幹末母音がeである語

最後に、④語幹末母音がeの動詞について見ていこう(表4)。全体的に×が多く、音便形は殆ど回答されていない。つまり、語幹末母音がeであるという中央語規則は残存していると言えるだろう。特に本動詞の、他の語幹末母音の場合と比べると、圧倒的に語幹末母音がeである語は音便形になっていないことが分かる。また、複合動詞になると、高岡のように音便形を

表3 語幹末が長音である語

中央語規則③	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津
トース(通す)	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ
モース(申す)																
モヨース(催す)			×	×	×	○ モヨース	×	×	○ モヨース	×	×	○ モヨース		○ モヨース	○ モヨース	○ モヨース
ヤリトース	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ

とる地点も出てくるが、それほど多くの語や地点が音便形をとるわけではない。

語幹末がeであるにも関わらず、「覆す」で「クツガエタ」、「裏返す」で「ウラガエタ」のようにイ音便形とは異なる形が回答されている結果も出ている。これらの語は、語幹末母音が e の語の中でも、「返す」の複合語や、語に「カエス」を含むものである。この語に関する考察は、第8章で行う。

表4 語幹末母音がeである語

中央語規則④		氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津
本動詞	ケス(消す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	カエス(返す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	シメス(示す)		×	×	×	×					×	×	×	×			×
	タメス(試す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
	ナメス(なめす)				×	×					×			×			×
	クツガエス(覆す)				×	×	×				×	×	ガエタ	○			ガエタ
	ヒルガエス(翻す)			×	×	×			×			×		○			エイタ
	cf.アカス(明かす; 語幹末a)	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
	cf.カクス(隠す; 語幹末u)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	cf.オコス(起こす; 語幹末o)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
複合動詞	フキケス(吹き消す)	×		×	×	×		×	×	×	×	×	×	×	×		×
	イイカエス(言い返す)	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	ウラガエス(裏返す)	×	○	×	○	×	ガエタ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	ヒキカエス(引き返す)	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	トリカエス(取り返す)	×	○	×	×	×	/	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	ヒックリカエス(ひっくり返す)	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	タタキノメス(叩きのめす)	○		×		○	○		×			×	×	×			○
	cf.オモイダス(思い出す; 語幹末a)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	cf.オイコス(追い越す; 語幹末o)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○

4.4. 調査結果のまとめ

ここまで①～④の中央語規則を一定の基準とし、調査結果を元に富山県の各地点でその規則が当てはまるかどうかを見てきた。結果、「①2音節動詞のうちアクセント第一類の語」と「④語幹末母音がeである語」の中央語規則ははっきりと残存していることが確認できた。「③語幹末が長音である語」が音便化しないという規則は当てはまらない。また、「②いわゆる使役性他動詞」については、はっきり規則が残存しているとは言えないが、音便化しにくい傾向として

働いているようであると言える。今回の調査結果からは、③以外の中央語規則の残存が認められた。つまり、富山県において中央語規則は保持されているものもあるということが分かった。

5. おわりに

本章は、富山県内全域の調査により、富山県で現在使用されているサ行イ音便の実態を明らかにすることを目的とした。

最初に行った富山県高岡市調査(3 節)は、富山県全域調査でのインフォーマントの年代・性別を固定するために行った。結果、男女差はないが、年代差については、50 歳代を境に若年層(10・20 歳代)・壮年層(30・40 歳代)と老年層(60 歳代以上)に開きがあることが分かり、この結果を承けて富山県全域調査では、サ行イ音便を用いる年代としてインフォーマントを 60 歳代以上に固定することにした。

富山県全域調査(4 節)は、富山県高岡市調査で得られた結果からインフォーマントを 60 歳代以上で固定し、富山県内での地域差と、各地点でのイ音便化する語・しない語の実態を明らかにした。その結果、海側の地域はイ音便化する傾向が強く、次いで平野部、そして山側の地域はイ音便化する傾向が弱いという地域差が見られた。これは調査現場での話者の反応も踏まえた地域差である。

イ音便化しない語については、中央語規則のうち「①2 音節動詞のうちアクセント第一類の語」・「④語幹末母音が e である語」は富山方言においても残存していることが分かり、「②いわゆる使役性他動詞」はやや残存している傾向のようなものが見られる。「③語幹末が長音である語」は富山方言においては当てはまらず、イ音便化することが分かった。

次章では、サ行イ音便をもつ東端である富山県に続いて、南端である鹿児島県南部のサ行イ音便の記述を行う。

第5章 鹿児島県におけるサ行イ音便

1. はじめに

前章で、富山県方言は、おおよそサ行イ音便の中央語規則に従っていることが分かった。それでは、他の地域も富山県方言のように中央語規則に従うのだろうか。中央語規則が各地にどのような形で残り、また変容した姿を示しているのかを見ることで、いわゆる中央語に限らず、日本全体でのサ行イ音便の展開が明らかになるだろう。日本の全ての地域で調査を行えば、日本全体でのサ行イ音便展開の全体像が見えてくるだろうが、それには膨大な調査が必要になるため、いくつかの地域を取り上げて、考察を行う。そこで本章では、GAJなどでサ行イ音便が残存すると報告されている南端である、鹿児島県南部方言を取り上げることにする。

本章では、鹿児島県南部において、サ行五段動詞の音便・非音便を調査し、その結果を元に鹿児島県におけるサ行イ音便の実態とその成立について考察する。以下、鹿児島県におけるサ行イ音便の実態を探ることを論点に据え、次のように進める。まず2節で先行研究について記述する。3節で調査結果を示し、それを元に、中央語規則と照らし合わせたサ行イ音便の実態について記述する。4節で現在の鹿児島県のサ行イ音便の実態が成立した要因を考察し、5節でまとめる。

2. 先行研究

第1章で述べたように、方言におけるサ行イ音便について記述している先行研究は少ない。特に鹿児島県におけるサ行イ音便について述べたものは、管見の限り木部(1997)などで概説が述べられている程度である。例えば木部(1997:15)は次のように述べている。

イ音便はカ・ガ・サ行五段活用動詞に現れる。(中略)イ音便は直前の母音と融合を起こして、「ケタ(書いた)」「ネタ(泣いた)」「ケタ(貸した)」「オケタ(起こした)」のようになる。しかし先に述べたように、鹿児島市ではサ行五段活用動詞が下二段活用になるために、サ行のイ音便は語的に残るにすぎない。

このサ行動詞の下二段化については、木部(1997)は次のように指摘する。

特徴的なのは「貸す」「消す」など、共通語のサ行五段活用動詞が下二段化することで、この特徴は鹿児島市を中心に周辺部へ徐々に広がっている。短い語に下二段化が著しく、長い語では五段活用を残すことが多い。(p.14)

また、上村(1998)はサ行動詞の下二段化の成立について、次のように述べる。

なお薩隅ではサ行五段動詞はすべて下二段化するのだ(貸セン、貸セタ、貸スレバ)が、それは本来の語尾スは促音化しないので、他の動詞の入声音化に類推してスツとなり、それがスルに意識されて生じた比較的新しい形である。

木部(1997)は、トカラ列島中之島の方言については、

サ行五段動詞がイ音便を起こす。「イ」は直前の母音と融合する。しかし薩隅方言に比べるとイ音便を起こす率が低く、非音便形で現れることも多い。(p.43)

と述べている。また、平山(1967)は、トカラ群島・屋久島・種子島の方言については、

全方言に共通な点では、動詞のいわゆるサ行イ音便もかなり現われている。たとえば次の通り。ka:ta(貸した) oke:ta(起こした) ka:ʃte(貸して) oke:te(起して)。上記の例は種子島西之表市方言であるが、中種子・南種子の方言では「て」にあたる形は tʃe が対立するから,ka:tʃe(貸して)となる。上のサ行イ音便は kaʃita→kaita→ka:ta と 変化したものであろう。(p.95)

他に、九州方言研究会編(1991)では次のように記されており、「出す」のみだが九州地方での大まかな分布が分かる。

〔老〕肥筑にダシテ・ダイテがある。なお西肥にジャーテ・ジャーチが点在。豊日にデーチ、薩隅にデテ・デッがある。〔少〕ダシテの分布領域が豊日へ拡大。薩隅にダセテ・ダセッがある。両肥にジャーテ・ジャーチ。

ここから鹿児島県では、老年層は「デテ・デッ」、少年層は「ダセテ・ダセッ」を用いることが分かる。この少年層の「ダセテ・ダセッ」という形は、木部(1997)の記述にあるように、五段ではなく、下二段に活用しているものである。この下二段化は地理的には鹿児

島県の中心である鹿児島市からその周辺地域へ、また年齢層的には少年層からその周辺の層へ広がっているようである。

GAJ では「出す」と「貸す」の 2 語が鹿児島県内 38 地点において調査されている。薩隅諸島のうち、トカラ列島以南はイ音便が現れていないのでそれを除くと、29 地点になる。その結果を地図で示すと、次の図 1・2 のようになる。「出す」と「貸す」はそれぞれアクセントが、「出す」は第二類であり、「貸す」は第一類である。つまり、中央語規則①「2 音節動詞のうちアクセント第一類の語は音便化しにくい」によると、中央語において「出す」は音便化する動詞であり、「貸す」は音便化しない動詞である。1 語ずつではあるが、この 2 枚で中央語規則①がどのような分布を成しているのかを見ることができるのである。

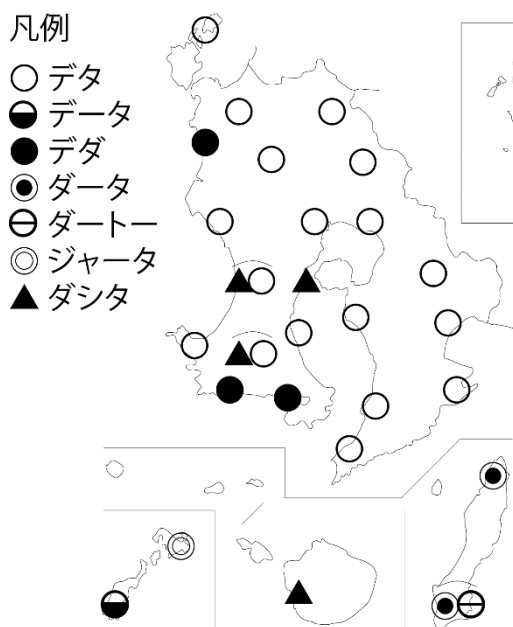


図 1 GAJ「出した」

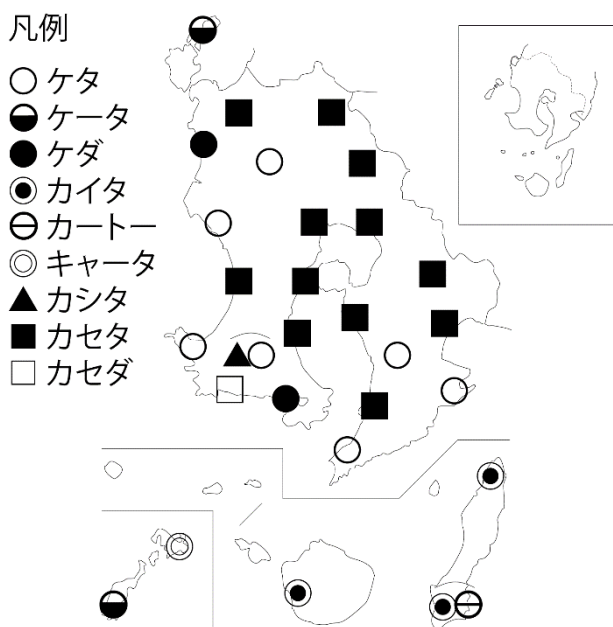


図 2 GAJ「貸した」

図 1 と図 2 を比べると、「出す」はイ音便形が多く現れているが、「貸す」は下二段の「カセタ」が広く分布していることが分かる。これを見ると、木部(1997)の記述のように、やはりこの地域ではサ行動詞の下二段化が著しいようである。しかし、よく見るとイ音便形である「ケタ」や「カイタ」も現れており、下二段を除くと非音便の「カシタ」は一地点のみ、それもイ音便と併用の地点なので、問題なくイ音便化しそうである。また、地理的には、九州方言研究会編 (1991)が述べるように、下二段化は鹿児島市を中心に広まっているように見える。鹿児島県の南部、特に島嶼部には下二段形が回答されていない。なぜ「出す」は下二段形が現れず、「貸す」だけが下二段化が著しいのかは不明だが、本章ではこの下二段化の問題には立ち入らないことにする。

このように、GAJ の 2 語だけでは、鹿児島県にサ行イ音便が存在することは分かるが、

その内実まで詳しくは分からない。さらに先行研究を見ると、これまで鹿児島県においては、サ行イ音便が存在することよりも、下二段化に注目されてきたようであり、サ行イ音便についての詳しい記述がない。そこで、本章では鹿児島県南部において、サ行イ音便の実態を調査し、記述することにする。

3. 鹿児島県におけるサ行イ音便の実態

3.1. 調査概要

鹿児島県においてサ行イ音便の実態を掴むため、調査を行った。調査概要は以下の通りである。なお、今回の調査地点は、サ行イ音便が現れる南端であり、かつ図 2 で見たように下二段化に邪魔されない地域である、鹿児島県の沿岸部と屋久島以北の島嶼部から選定した。

調査期間：2010 年 12 月

調査地点：鹿児島県内旧市町村区分の 12 地点(図 3 を参照)

調査方法：臨地面接調査で「出す」を「ダイタ」と言いますか。」とイ音便形の可否を尋ねた。

調査語：共通語形のサ行五段動詞
計 26 語。中央語規則に関連する動詞のみ取り上げている。

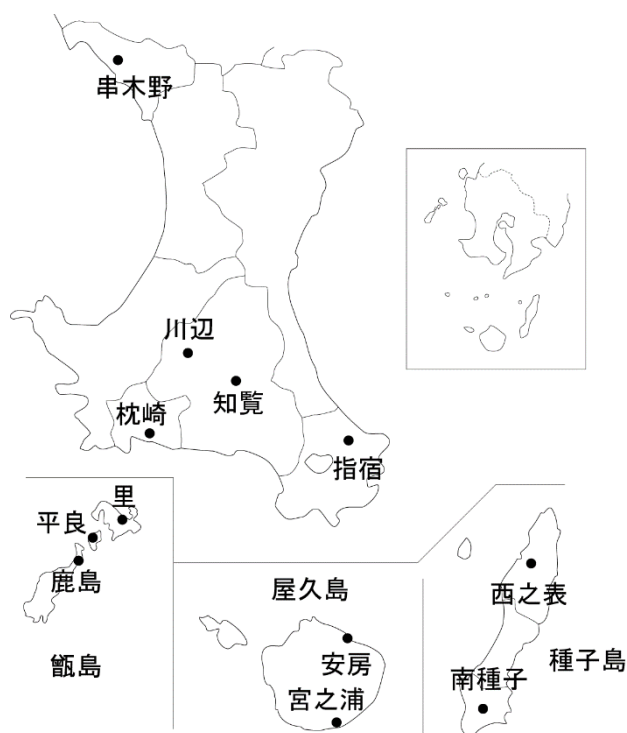


図 3 鹿児島県調査地点

インフォーマント：その土地生え抜きの 60 歳代以上の方、各地点 1 名で計 15 名である。この調査のインフォーマントの出身地・生年・性別(M: 男性 F:女性)を以下に挙げる。

(西之表) 西之表市西之表 1916F	(串木野) いちき串木野市旭町 1937F
西之表市西之表 1930F	(鹿島) 薩摩川内市鹿島町藺牟 1930M
(南種子) 南種子町荃永 1929M	(川辺) 南九州市川辺町平山 1940F
(安房) 屋久島町安房 1931F	(枕崎) 枕崎市泉町 1931M
(宮之浦) 屋久島町宮之浦 1940M	枕崎市中町 1931F
屋久島町宮之浦 1942M	(指宿) 指宿市東方 1935M
(平良) 薩摩川内市上甕町平良 1940M	(知覧) 南九州市知覧町郡 1945F
(里) 薩摩川内市里町里 1940M	

3.2. 調査結果

先に調査結果を示すと、以下の表 1 のようになる。表 1 の地点名は、左側が南の島嶼部、右側にいくにつれて沿岸部の西から東となるように、順に並べている。記号は○が音便形を用いる、×が非音便形を用いる、空欄はその動詞を使用しないと回答された、または前述のように下二段活用形式のみが回答されたものである。今回調査した 12 地点では、イ音便を全く用いないという地点はなかった。ただし、屋久島の安房では「仕返す」の 1 語のみ、同じく屋久島の宮之浦でも「出す」の 1 語のみで音便形が回答され、それ以外の動詞の音便形は回答されなかった。屋久島は GAJ(図 1)では、「出す」が「ダシタ」と非音便形で回答されている地点であり、今回の調査とは異なる結果となっている。このことから、屋久島はサ行イ音便が残存する日本の南端であり、残存はしているものの、かなり不安定な状態にあると推測される。今回の屋久島の宮之浦・安房での結果は、語的に音便形が残ったものが回答されたと言えそうである。反対によく音便形が現れたのは、種子島の南種子と西之表、甕島の平良と里であった。表 1 では、2 音節動詞より 3 音節以上の動詞が音便化しないように見えるかもしれないが、これは中央語規則に関連するもののみ取り上げているからであり、2 音節動詞でよく音便形が回答された地点では、3 音節動詞も基本的に音便形をとる。

表1 調査結果一覧

調査語	宮之浦	安房	南種子	西之表	鹿島	平良	里	串木野	川辺	枕崎	指宿	知覧
オス(押す)	×	×	○	×	×	○	×		×	×	×	×
カス(貸す)	×	×	○	○	×	○	○	×	×	×	×	×
ケス(消す)		×	×	×		○	○		×	×	×	×
タス(足す)	×		○	○	×	○	○		×	○	×	×
サス(刺す)	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
サス(差す)	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
ダス(出す)	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ホス(干す)	×		○	○	×	○	○	×	×	○	×	×
ムス(蒸す)	×		○	○	×	○	×	×	×		×	
アソパス(遊ばす)		×		○	×		×		×			×
ナカス(泣かす)	×	×	○	○	×	×	×		×	×	×	×
ハタラク(働かす)	×	×		○	×							×
マカス(任す)	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×		×
トース(通す)	×	×	×	○	×	○	○	○	×	×	○	×
モヨース(催す)												
カエス(返す)	×	×		○	×				×	×		×
シメス(示す)						×						×
タメス(試す)				○							×	×
ナメス				○								
クツガエス(覆す)												
ヒルガエス(翻す)				○								
仕返す		○		○	×						×	
言い返す		×	×	○	×		○		×		×	
裏返す		×	○	○	×						×	
ひっくり返す		×	○	○			×		○		×	○
混ぜくり返す				○								

3.2.1. イ音便の形態

音便形とひと口に言っても、先行研究にもあるように、鹿児島県では連母音の融合が起こり、様々な形態が出現する。

表2 「出す」調査結果

地点 語	宮之浦	安房	南種子	西之表	鹿島	平良	里	串木野	川辺	枕崎	指宿	知覧
出す	○ データ	×	○ ダータ	○ ダータ	○ デタ	○ ダタ	○ ダータ	○ デタ	○ デタ	○ デダ	○ デタ	○ デタ

調査結果の形態を表2の「出す」を例にとって見ていくと、まず屋久島の宮之浦では「データ」と回答されている。これは「ダシタ」がイ音便形「ダイタ」となった後、/ai/の連母音が融合して[e:]となり、「データ」と回答されたものであろう。次に種子島の南種子と西之表では、「ダータ」と回答されている。これは「ダシタ」がイ音便形の「ダイタ」となった後、/ai/の連母音が融合して[a:]となっているものである。次に甕島の鹿島・平良・里だが、鹿島は「デタ」と回答されている。これは「ダシタ」がイ音便形「ダイタ」となり、

/ai/が[e]となったものである。しかし「差す」の調査での回答は「シェータ」なので、/ai/は[e:]と長音でも実現されることがあるようだ。平良では「ダタ」という GAJ にない形態が現れており、これは「ダシタ」がイ音便形「ダイタ」となり、/ai/が[a]となったものである。また里では「ダータ」と長音が保持されており、これは「ダシタ」がイ音便形「ダイタ」となり、/ai/が[a:]となったものである。次に薩摩半島の沿岸部である串木野・川辺・指宿・知覧では「デタ」と回答されており、枕崎は「デダ」と「タ」が濁るが、薩摩半島ではおおよそ同じ形態で現れると考えてよいだろう。「ダシタ」がイ音便形「ダイタ」となり、/ai/が[e]となったものである。今、「出す」についてのみ見たが、調査語全てに出現した連母音融合を、表に整理すると以下のようなになる(表 3)。空欄は不明である。今回は 38 語のみの調査なので、不明の語が多くなった。

表 3 連母音融合の実現形

地点 連母音	宮之浦	安房	南種子	西之表	鹿島	平良	里	串木野	川辺	枕崎	指宿	知覧
/ai/	[e:]		[a:]	[a:]	[e][e:]	[a]	[a:]	[e]	[e]	[e]	[e]	[e]
/ui/			[e:]	[e:]		[u]						
/ei/		[e:]	[e:]	[e:]		[e]	[e:]		[e:]			[e:]
/oi/			[e:]	[e:]		[o]	[e:]			[e]	[e]	

それでは、中央語規則①～④の順に各地点がその規則に従っているかという観点から調査結果を見ていこう。また、前述の通り、鹿児島県では音便形の形が単純ではなく、殆どが融合を起こしているため、音便形を用いる場合は、その形態をカタカナで表に示す。

これまでの章でも挙げたが、中央語規則を以下に再掲する。中央語規則とは、サ行でイ音便が起こりにくいとされる動詞の特徴のことであり、次のものが挙げられる。

- ①2 音節動詞アクセント第一類の語は音便化しない。
- ②いわゆる使役性他動詞は音便化しない。
- ③語幹末が長音である語は音便化しない。
- ④語幹末母音が e である語は音便化しない。

以下、サ行イ音便の実態を探るにあたって、上述の①～④のような中央語においてイ音便化しにくいと言われている語はどのように現われるのかを中心に述べていくこととする。

3.2.2. 2音節動詞アクセント第一類の語

表4 2音節動詞

地点 語	宮之浦	安房	南種子	西之表	鹿島	平良	里	串木野	川辺	枕崎	指宿	知覧
第一類	貸す	×	×	○ カータ	○ カータ	×	○ カタ	○ カータ	×	×	×	×
	足す	×		○ タータ	○ タータ	×	○ タタ	○ タータ		×	○ デダ	×
	増す			○ マータ					×			
	消す		×	×	×		○ ケタ	○ ケータ		×	×	×
	押す	×	×	○ エータ	×	×	○ オタ	×		×	×	×
第二類	干す	×		○ ヘータ	○ ヘータ	×	○ ヘタ	○ ヘータ	×	×	○ ヘダ	×
	刺す	×	×	○ サータ	○ サータ	○ シェータ	○ セタ	○ サータ	○ セタ	○ セタ	○ セダ	×
	差す	×	×	○ サータ	○ サータ	○ シェータ	○ セタ	○ サータ	○ セタ	○ セタ	○ セダ	×
	出す	○ データ	×	○ ダータ	○ ダータ	○ デタ	○ ダタ	○ ダータ	○ デタ	○ デタ	○ デダ	○ デタ
	蒸す	×		○ メータ	○ メータ	×	○ ムタ	×	×	×		×

まず、2音節動詞アクセント第一類の語について見ていこう(表4)。第一類のアクセントは京阪式アクセントでは HH、東京式アクセントでは LH になるもの、第二類のアクセントは京阪式アクセントでは LH、東京式アクセントでは HL になるものである(H=高く発音、L=低く発音)。鹿児島県はいわゆる N 型アクセントの地域であり無型・一型・二型アクセントが存在するが、多型アクセントの東京式・京阪式とは異なる。今回の調査地点は、基本的には二型アクセントを持ち、種子島の南種子のみ二型を基本とする曖昧アクセントを持つ地域である。この地域では 2 音節動詞は動詞単独の場合、A 型が LH、B 型は HL であり、タ形のアクセントは A 型が LHH、B 型が LHL である。A 型はおおよそ第一類の語彙に対応し、B 型はおおよそ第二類に対応しているといわれている。まったく同じものとしては扱えないが、他の地域や中央語規則と比較するときの便宜をはかり、ここでは第一類・第二類と呼ぶ。

表4を見ると、アクセントの類に関して言えば、一類・二類に関わらず、どちらも音便形が回答されている。しかし、宮之浦・鹿島・串木野・川辺・指宿・知覧のような殆どの語が音便化しない地点でも、音便化しているのは第二類の「差す」「出す」であることに注目すると、確かにアクセント第一類の語に比べると、第二類の語は音便形が用いられやすいようである。

地点に注目してみると、串木野・鹿島・川辺・枕崎のように、第二類の方がよりイ音便化する語が多い地点がある。中央語規則①「2音節動詞アクセント第一類の語は音便化しにくい」に完全に従っているというわけではないが、やや規則に従っているようである。また、西之表・南種子・里・平良のように殆ど全ての語が音便化する地点と、反対に、宮之浦・安房・指宿・知覧のように、殆ど全ての語が音便化しない地点がある。音便形になるか否かは地点ごとに異なってくるようである。2音節動詞アクセント第一類の語は、中央語規則に従っている地点と、従っていない地点があり、さらに従っていない地点では、その従わない方法が、音便化しないものと音便化するものの2通りあると言える。表5として、表4の地点を並べ替えたものを挙げる。表5を見ると、地点ごとに従っているか従っていないかが分かりやすくなる。中央語規則に従う地域は、串木野・鹿島・川辺・枕崎の4地点である。この地点は、第一類は非音便化し、第二類は音便化する。反対に中央語規則に従わない地域は、第一類・第二類にかかわらず音便化する南種子・西之表・平良・里の4地点である。類にかかわらずほぼ全ての語で音便化する。また、同じく中央語規則に従わないが、第一類・第二類にかかわらず音便化しない地域が、宮之浦・安房・指宿・知覧の4地点である。

表5 2音節動詞(地点並べ替え)

地点 語	規則に従っている				従っていない(音便化する)				従っていない(音便化しない)				
	串木野	鹿島	川辺	枕崎	南種子	西之表	平良	里	宮之浦	安房	指宿	知覧	
第一類	貸す	×	×	×	×	○ カータ	○ カータ	○ カタ	○ カータ	×	×	×	×
	足す		×	×	○ テダ	○ タータ	○ タータ	○ タタ	○ タータ	×		×	×
	増す	×			×		○ マータ						
	消す			×	×	×	×	○ ケタ	○ ケータ		×	×	×
	押す		×	×	×	○ エータ	×	○ オタ	×	×	×	×	×
第二類	干す	×	×	×	○ ヘダ	○ ヘータ	○ ヘタ	○ ヘータ	×		×	×	
	刺す	○ セタ	○ シエータ	○ セタ	○ セダ	○ サータ	○ サータ	○ セタ	○ サータ	×	×	×	×
	差す	○ セタ	○ シエータ	○ セタ	○ セダ	○ サータ	○ サータ	○ セタ	○ サータ	×	×	×	×
	出す	○ デタ	○ デタ	○ デタ	○ デダ	○ ダータ	○ ダータ	○ ダタ	○ ダータ	○ データ	×	○ デタ	○ デタ
	蒸す	×	×	×		○ メータ	○ メータ	○ ムタ	×	×		×	

3.2.3. 使役性他動詞

次に、使役性他動詞について見ていこう。表6を見ると種子島にあたる西之表・南種子のみで音便化している。ここで出てくる音便形も「任した」が「マカータ」となり、単純

な音便形よりさらに変化の進んだ、連母音融合した音便形である。その他の地域では全く音便化が起こっていない。よって種子島の2地点のみ中央語規則②「いわゆる使役性他動詞は音便化しにくい」に従っておらず、それ以外の地域では従っていると言える。

表6 使役性他動詞

地点 語	宮之浦	安房	南種子	西之表	鹿島	平良	里	串木野	川辺	枕崎	指宿	知覧
任す	×	×	○ マカータ	○ マカータ	×	×	×	×	×	×		×
泣かす	×	×	○ ナカータ	○ ナカータ	×	×	×		×	×	×	×
遊ばす		×		○ アソバータ	×		×		×			×
働かす	×	×		○ ハタラカータ	×							×

3.2.4. 語幹末が長音である語

次に、語幹末が長音である動詞について見ていこう(表7)。現代共通語で用いられている語幹末が長音のサ行五段動詞は、「通す」と「催す」の2語のみである。「通す」は西之表・串木野・里・平良・指宿で音便形が回答された。「トエータ」「トエタ」等は toosita > tooita > toe:ta > toeta という変化を辿ったのだろうと考えられるため、音便形である。「催す」は全地点で使用しないと回答されたため、表には示していない。よって西之表・里・串木野・指宿では中央語規則③「語幹末が長音である語は音便化しにくい」に従っておらず、それ以外の地域では従っていると言える。

表7 語幹末が長音である語

地点 語	宮之浦	安房	南種子	西之表	鹿島	平良	里	串木野	川辺	枕崎	指宿	知覧
通す	×	×	×	○ トエータ	×	×	○ トエータ	○ トエタ	×	×	○ トエダ	×

3.2.5. 語幹末母音が e である語

最後に、語幹末母音が e の動詞について見ていこう(表8)。多音節語になると、日常的に使用する語ではないとされ、なかなか回答が得られず、○も×もない地点が目立つ。しかし、音便形が回答されている地域もあれば、非音便形のみが回答されている地域もある。中央語規則④「語幹末母音が e である語は音便化しにくい」という規則は、従わない地域と、従っている地域があると言えるだろう。

地点に注目してみると、種子島の南種子と西之表では、語幹末母音が e であっても、問題なく音便化するようであり、この2地点は中央語規則④に従っていない。音便形が出現

しなかった宮之浦・鹿島・串木野・枕崎・指宿は、中央語規則④に従っていると言える。1,2 語のみが音便形で回答されている安房・平良・里・川辺・知覧のような地点は、かつては種子島の2地点のように音便化し、従っていなかったと考えられるが、現在は語的にイ音便が残っているだけのようである。

また、「返す」で非音便形が回答されている安房・里・川辺・知覧の地域では、複合動詞「一返す」では音便形が一語ずつ回答されている。これは奥村(1990)が言う「多音節語は音便化を起ししやすい」という、諸方言で見られる傾向に当てはまるものと考えられる。

表8 語幹末がeである語

地点 語	宮之浦	安房	南種子	西之表	鹿島	平良	里	串木野	川辺	枕崎	指宿	知覧
消す	×	×		×		○ ケータ	○ ケタ	×	×	×	×	×
返す	×	×		○ カエータ	×				×	×		×
試す			○ タメータ	○ タメータ							×	×
なめす			○ ナメータ	○ ナメータ								
覆す				○ クツガ エータ								
仕返す		○ シカエータ		○ シカエータ	×							
言い返す		×	×	○ イーカエー タ	×		○ ユーカ エータ					
裏返す		×	○ ウランガ エータ	○ ウラガ エータ	×							
ひっくり返す		×	○ ヒックリカ エータ	○ ヒックリカ エータ			×		○ ヒックリ ケータ			○ ヒックリ カエータ
混ぜくり返す				○ マゼクリカ エータ								

3.3. 調査結果のまとめ

ここまで①～④の中央語規則を一定の基準とし、調査結果を元に鹿児島県南部の各地点でその規則が当てはまるかどうかを見てきた。結果、地点によって中央語規則に従うか従わないかという傾向が異なることが確認できた。

地点ごとに傾向が異なるようであるので、規則ごとに、○：一語以上音便化する、△：一語のみ音便化する、×：音便化しないとして、左ほど音便化しない地点、右に行くほど音便化する地点となるように並べ、表9を作成した。

表 9 規則ごとの音便形回答の数

地点 規則	屋久島		甌島	県本土					甌島		種子島	
	宮之浦	安房	鹿島	知覧	川辺	枕崎	指宿	串木野	平良	里	南種子	西之表
①第一類	×	×	×	×	×	△	×	×	○	○	○	○
①第二類	△	×	○	△	○	○	△	○	○	○	○	○
②	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
③	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	×	○
④	×	△	×	△	△	△	△	△	△	△	○	○

並び替えると、殆ど音便形が回答されないのが、屋久島の 2 地点、次に甌島の鹿島、その次が県本土の 5 地点、甌島の 2 地点、種子島の 2 地点という順になる。甌島だけは離れてしまったが、その他は、島ごとに似たような回答となっている。

中央語規則に従うか従わないかという観点で見ると、一番従っているのは鹿島である。やや従っているようであるのは、知覧・川辺・枕崎・指宿・串木野の本土である。また、ほとんど従わないのは平良・里・南種子・西之表・宮之浦・安房である。この従わないグループの中でも、平良・里・南種子・西之表は中央語規則に関わらず音便化し、宮之浦・安房はほとんど音便化しないと傾向が正反対であった。

ここで、規則を守っている地点である鹿島を A グループ、いくつか音便化する地点である知覧・川辺・枕崎・指宿・串木野を B グループ、よく音便化する地点である平良・里・南種子・西之表を B' グループ、殆ど全て音便化しない宮之浦・安房を C グループとすると、図 4 のような派生関係を想定することができる。

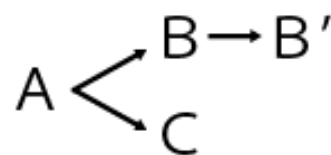


図 4 派生関係

すなわち、中央語規則を守っているものが A グループであり、そこから音便化する範囲を広げた B グループと、全て音便化しない C グループに分かれた。B グループからついに全て音便化するようになった B' グループが派生した、というように、現在の鹿児島県南部の中央語規則の状況から、図 4 のように派生関係を考えることができるのである。

これは、元々音便化していた地域が仮に規則を持っていたとしても、時間が経つにつれ規則の意識が薄れ、あるいは共通語化の影響もあって、音便化する地域は全部音便化する、音便化しない地域は全部音便化しない、という方向に二極化したからではないかと考えられる。ここでほぼ全ての語が音便化するようになったのは種子島である。その途中経過のようなものが甌島で見られ、その他の地域はイ音便形が語的に残っているだけ、屋久島で

はついに全ての語が音便化しないという変化をしたのだらうと推定される。かつてはこれらの地域でも規則があったのではないかと考えられるが、特に種子島で全ての語が音便化するようになった要因として、調査地点の中で唯一無型アクセントの地域であることが挙げられる。アクセントの区別を失えば、中央語規則①「2音節動詞アクセント第一類の語は音便化しにくい」という規則に従わなくなり、他の規則に当てはまる語まで音便化するようになったのではないかと考えられる。また、中央から遠い鹿児島県において、中央的な規範力が弱まり、語の自律的变化を促したからではないかとも考えられる。

4. おわりに

以上、鹿児島県南部において、サ行五段動詞の音便・非音便を調査し、その結果を元に鹿児島県南部におけるサ行イ音便の実態について考察してきた。本章では、次の点が明らかになった。

- (1)鹿児島県南部では、かつては中央語規則が存在したようではあるものの、現在は中央語規則に従う地点と従わない地点がある。
- (2)中央語規則に従わない地点の中でも、全て音便化する地点と全て音便化しない地点、その途中のような地点があり、中央語規則に従わない地点と言っても、その内実は地点によって異なる。

今後の課題としては、今回の鹿児島県南部と異なる中央語規則に従わないタイプがないか、また富山県と異なる中央語規則の保存タイプはないか、他のサ行イ音便が残存する地域でも調査を行うことが挙げられる。さらに、地域ごとの音便現象の起こり方に、なぜ違いが現れるのかということも併せて考えていきたい。

第6章 高知県におけるサ行イ音便

1. はじめに

前章まで、富山県方言はおおよそ中央語規則に従っていることが分かった。一方、鹿児島県南部方言では中央語規則に従わない地点があることも分かった。本章では、富山県、鹿児島県に続いて高知県方言を取り上げる。中央語規則が各地にどのような形で残り、また変容した姿を示しているのかを見ることで、いわゆる中央語に限らず、日本全体でのサ行イ音便の展開が明らかになるだろう。

本章は、四国地方の中で、唯一サ行イ音便の残存が報告されている高知県において、サ行五段動詞の音便・非音便を調査し、その結果を元に高知県におけるサ行イ音便の実態とその成立について考察した。以下、高知県におけるサ行イ音便の実態を探ることを論点に据え、次のように進める。まず2節で先行研究を概観する。3節で調査結果を元に、中央語規則と照らし合わせた実態について記述する。4節で高知県と鹿児島県南部の調査結果を比較しながら、5節で現在の高知県のサ行イ音便の実態が成立した要因を考察し、6節でまとめる。

2. 先行研究

第1章で述べたように、方言におけるサ行イ音便について詳細な記述をしている先行研究は少ない。特に高知県におけるサ行イ音便について述べたものは、管見の限り土居(1962)、浜田(1966)、吉田(1998)などで概説が述べられている程度である。例えば吉田(1998)では、

サ行五段活用動詞がイ音便をとる現象がある。カクイタ(隠す)・ホイタ(干す)など。幡多地方では、これはオトヒタ(落とす)のように、いわばヒ音便化する傾向がある。(p.432)

と述べられている。

他に GAJ や高橋(1986・1991)で、数語のみだが高知県内での分布が分かる。GAJ では「出す」と「貸す」の 2 語が高知県内 15 カ所において調査されており、結果を地図で示すと、以下の図 1・2 のようになる。「出す」と「貸す」はそれぞれアクセントが、「出す」は第二類であり、「貸す」は第一類である。つまり、中央語規則①によると、中央語において「出す」は音便化する動詞であり、「貸す」は音便化しない動詞である。1 語ずつではあるが、この 2 枚で中央語規則①がどのような分布を成しているのかを見ることが出来るのである。図 1 と 2 を比べると、イ音便形が現れる地域はおおよそ同じようである。しかし「出す」でイ音便形をとり「貸す」で非音便形をとる地点やその逆の地点もあり、動詞により地点により様々であることがわかる。この 2 語だけでは、高知県にサ行イ音便が存在することは分かるが、その内実までは詳しく分からないため、高知県においてサ行イ音便の実態を調査することにする。

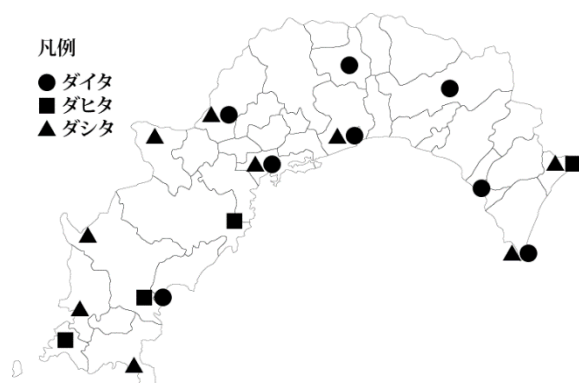


図 1 GAJ 出した

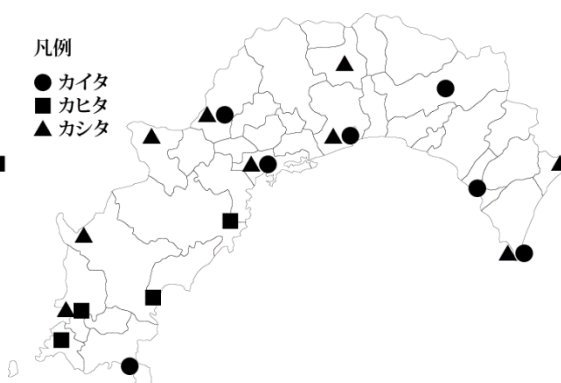


図 2 GAJ 貸した

3. 高知県におけるサ行イ音便の実態

3.1. 調査概要

高知県全域においてサ行イ音便の実態を掴むため、調査を行った。調査概要は以下の通りである。

調査期間：2014 年 2 月～8 月

調査地点：高知県内旧市町村区分の 13 地点(図 3 を参照)

調査方法：臨地面接調査で「「出す」を「ダイタ」と言いますか。」とイ音便形の可否を尋ねた。

調査語：共通語形のサ行五段動詞 2 音節 23 語・3 音節 130 語・4 音節 48 語・5 音節 22 語・複合動詞 31 語・使役性他動詞 17 語の計 271 語。

インフォーマント：その土地生え抜きの 60 歳代以上の方、各地点 1 名で計 13 名である。

この調査のインフォーマントの出身地・生年・性別(M:男性 F:女性)
を以下に挙げる。

(土佐清水) 土佐清水市越前町 1943M

(大方) 黒潮町入野 1937M

(窪川) 四万十町繁串 1931F

(東津野) 高岡郡津野町芳生野
1918F

(須崎) 須崎市上分丙 1926M

(吾川) 吾川郡仁淀川町大崎
1930M

(土佐) 土佐郡土佐町土居 1937M

(高知) 高知市春野町芳原 1935M

(香北) 香美市香北町永野 1942M

(物部) 香美市物部町別府 1943M

(田野) 安芸郡田野町 1934M

(奈半利) 安芸郡奈半利町 1938F

(室戸) 室戸市室戸岬町三津 1927M

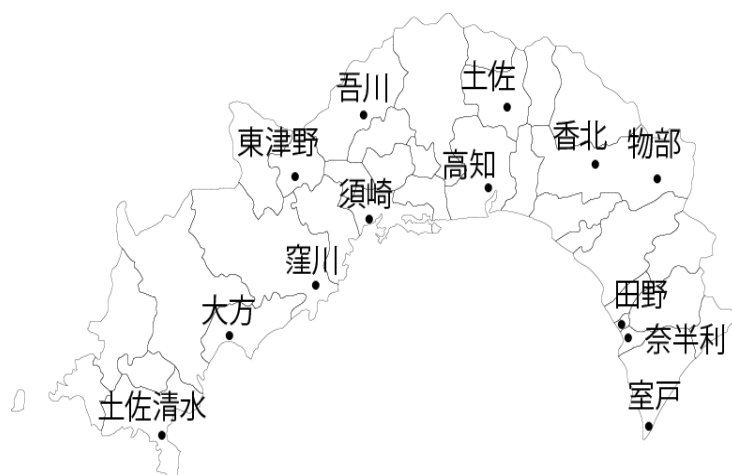


図 3 高知県調査地点

3.2. 調査結果

3.2.1. イ音便とヒ音便

調査では、窪川のみ音便形が全く現れなかった。インフォーマントからは、さらに年配の人が使用するという情報を得たので、窪川で全く用いられないわけではないようである。しかし今回の調査では音便形が得られなかったので、以降の表に窪川の結果は含めない。その窪川以外の地点では音便形が得られた。ただし、音便形とひと口に言っても、先行研究にもあるように高知県には“ヒ音便”が存在し、「イ」で実現される地点と「ヒ」で実現される地点、それが混在している地点がある。その音便形が 1 語でも現れた地点について地図に示すと図 4 のようになる。はっきりと傾向は見出せないが、どちらかと言えば西側にヒ音便の地点があり、東側に混在している地点があるようである。次の項以降は「ヒ」で実現されていても音便形とみなすことにする。



図4 イ音便とヒ音便

3.2.2. 2音節動詞アクセント第一類の語

それでは、中央語規則①～④の順に各地点がその規則に従っているかという観点から調査結果を見ていこう。地点名を左側は西部、右側は東部となるように順に並べている。○が音便形を用いる、×が非音便形を用いる、空欄はその動詞を使用しないと回答されたものである。

まず、①2音節動詞アクセント第一類の動詞について見ていこう(表1)。第一類のアクセントは京阪式アクセントではHH、東京式アクセントではLHになるもの、第二類のアクセントは京阪式アクセントではLH、東京式アクセントではHLになるものである(H=高く発音、L=低く発音)。地点を見ると、大方・須崎・香北では、使用する動詞は全て音便化している。土佐は少し非音便形の動詞が多いが、その他の地点では1~3語を除き全て音便形を用いるようである。動詞別に見ると、物部より東側では「押す」は音便化していない。全地点で音便化するのが「消す」「出す」「干す」、土佐を除く全地点で音便化するのが「貸す」「蒸す」である。アクセント類別に見ると、どちらかと言えば第二類の方が、非音便形が多く出ている。しかし、×が多い「濾す」「越す」は空欄も多く、普段から多用しない動詞であるから音便形にならないとも考えられる。空欄がない動詞の中では「押す」の非音便形が4地点で回答されており、しかもその回答が物部・田野・奈半利・室戸と高知県の東端にまとまって現れていることから、地域的な傾向が存在するかもしれない。この「押す」の非音便から、はっきりとはしないが中央語規則が一部において残存しているようである。

表 1 2 音節動詞

中央語規則①		土佐 清水	大方	東津野	吾川	須崎	高知	土佐	香北	物部	田野	奈半利	室戸
第一類	オス(押す)	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
	カス(貸す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
	ケス(消す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	タス(足す)	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○
	ヘス(減す)	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
第二類	コス(瀧す)	×			○	○	×	×	○	×	○	○	○
	コス(越す)	×	○	×		○	×	×	○			○	○
	サス(刺す)	×	○	○	○	○	○	×	○		×	○	○
	サス(注す)	○			×	○	○	○	○	○	×	○	○
	サス(挿す)	○	○	○	×	○	○	○					
	ダス(出す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ホス(干す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ムス(蒸す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○

3.2.3. 使役性他動詞

次に、②使役性他動詞について見ていこう(表 2)。全ての地点で音便形が回答されており、非音便形のみ用いるという動詞はなかった。他のサ行動詞に比べても使役性他動詞は音便化しやすいもののようであり、その動詞を使用すれば音便化する。よって高知県において中央語規則②は生きていないことがわかる。

表 2 使役性他動詞

中央語規則②	土佐 清水	大方	東津野	吾川	須崎	高知	土佐	香北	物部	田野	奈半利	室戸
アソバス(遊ばす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
イカス(行かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
イワス(言わす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オラス(折らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カガス(嗅がす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
キカス(聞かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
クワス(食わす)	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
コロバス(転ばす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
ネムラス(眠らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
シラス(知らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ナカス(泣かす)	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
ナワラス(習わす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ネカス(寝かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ノマス(飲ます)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハシラス(走らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハタラクas(働かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
モタス(持たす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

3.2.4. 語幹末が長音である語

次に、③語幹末が長音である動詞について見ていこう(表 3)。現代共通語で用いられている語幹末が長音のサ行五段動詞は、「通す」と「催す」の 2 語のみである。「通す」は田野で非音便となっているが、語幹末に長音を含まない 3 音節動詞「落とす」のように多くの地点で音便化するようである。ただし、田野で非音便形が回答されているということは、僅かに中央語規則が生きているとも考えられる。4 音節動詞になると全体的に使用頻度が下がり空欄や×が現れるが、殆どは語幹末に長音を含まない「施す」のように 1 地点で非音便形が回答されるのみである。対して語幹末が長音である「催す」は土佐清水・吾川・高知・土佐・物部の 5 地点で非音便形が回答されており、語幹末に長音を含まない 4 音節動詞と比較すると明らかに非音便形が多く、これは中央語規則が「催す」においては多少残存していると考えられる。

表 3 語幹末が長音である語

中央語規則③	土佐 清水	大方	東津野	吾川	須崎	高知	土佐	香北	物部	田野	奈半利	室戸
トース(通す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
cf.オトス(落とす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
モヨース(催す)	×	○		×	○	×	×	○	×	○		
cf.ホドコス(施す)	○	○	○	○	○	×	○	○	○		○	

3.2.5. 語幹末母音が e である語

最後に、④語幹末母音が e の動詞について見ていこう(表 4)。全体的にかなり多くの地点で音便形が回答されている。つまり、語幹末母音が e であるという規則は残存していないと考えてよいだろう。しかし、「返す」だけは、「枯らす」「隠す」「落とす」など他の語幹末母音を持つ語と比較して、非音便形で回答される地点が多く、中央語規則に従っている様子が窺える。また、複合動詞においても「一返す」で非音便形が多少回答されており、本動詞でも複合動詞でも「返す」は音便化の妨げになっているようであることが分かる。

表 4 語幹末母音が e である

中央語規則④		土佐 清水	大方	東津野	吾川	須崎	高知	土佐	香北	物部	田野	奈半利	室戸
本 動 詞	ケス(消す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	カエス(返す)	○	○	○	×	○	×	○	○	×	×	×	
	シメス(示す)	○	○	○	○	○	×	○	○				
	タメス(試す)	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○
	ナメス(なめす)		○		○	○	○	○		○			
	クツガエス(覆す)	○	○		○	○	○	○	○		○		
	ヒルガエス(翻す)	○	○		○	○	×	○	○		○		
	cf.カラス(枯らす; 語幹末a)	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
	cf.カクス(隠す; 語幹末u)	○		○	○	○	○		○		○	○	○
	cf.オトス(落とす; 語幹末o)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
複 合 動 詞	フキケス(吹き消す)	○	○		×	○	○	○	○	○	○	○	○
	イイカエス(言い返す)	○	○	○	○	○	×	○	○			×	○
	ウラガエス(裏返す)	○	○	○			×	○	○	○	○	×	○
	ヒキカエス(引き返す)	○	○			○	×		○	○	○	×	○
	トリカエス(取り返す)	○	○	○	×		×		○		○	×	
	ヒックリカエス(ひっくり返す)	○	○	○	○		×		○		○	×	×
	タタキノメス(叩きのめす)	○			○	○	○		○	○			○
	cf.オモイダス(思い出す; 語幹末a)	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
	cf.ノミホス(飲み干す; 語幹末o)	○			○	○	○	○	○	○	○		○

3.3. 調査結果まとめ

ここまで①～④の中央語規則を一定の基準とし、調査結果を元に高知県の各地点でその規則が当てはまるかどうかを見てきた。結果、①③④の中央語規則は僅かに残っていることが確認できた。しかし、殆どの動詞・地点では中央語規則を守らず音便形となっている。今回の調査結果からは、中央語規則の残滓が多少あるようであるが、現在の高知県では、大半のサ行五段動詞が中央語規則に関係なく音便化していることが分かった。つまり、高知県において中央語規則は崩壊していることになる。

4. 鹿児島県南部との比較

前節で高知県では中央語規則が崩壊していると述べたが、前章では鹿児島県南部でも中央語規則が崩壊していると述べている。今高知県との比較のために、鹿児島県南部での調査結果のうち、①2音節動詞の調査結果を示す(表5)。

表 5 鹿児島県南部

地点 語	宮之浦	安房	南種子	西之表	鹿島	平良	里	串木野	川辺	枕崎	指宿	知覧
第一類	貸す	×	×	○ カータ	○ カータ	×	○ カタ	○ カータ	×	×	×	×
	足す	×		○ タータ	○ タータ	×	○ タタ	○ タータ		○ テダ	×	×
	増す			○ マータ				×		×		
	消す		×	×		○ ケタ	○ ケータ		×	×	×	×
	押す	×	×	○ エータ	×	○ オタ	×		×	×	×	×
第二類	干す	×		○ ヘータ	○ ヘータ	×	○ ヘタ	○ ヘータ	×	○ ヘダ	×	×
	刺す	×	×	○ サータ	○ サータ	○ シェータ	○ セタ	○ サータ	○ セタ	○ セダ	×	×
	差す	×	×	○ サータ	○ サータ	○ シェータ	○ セタ	○ サータ	○ セタ	○ セダ	×	×
	出す	○ データ	×	○ ダータ	○ ダータ	○ デタ	○ ダタ	○ ダータ	○ デタ	○ デダ	○ デタ	○ デタ
	蒸す	×		○ メータ	○ メータ	×	○ ムタ	×	×	×	×	

鹿児島県南部では、音便形になるか否かは地点ごとに異なってくる。地点により規則の意識が薄れ、崩壊しているパターンと、串木野・鹿島・川辺・枕崎のように中央語と全く同じというわけではないが、やや規則に従っているパターンがある。崩壊しているパターンには、西之表・南種子・里・平良のように殆ど全ての語が音便化するパターンと、安房・宮之浦・指宿・知覧のように殆ど全ての語が音便化しないパターンの2つがある。このように、鹿児島県南部には全部で3パターンが見られる。やや規則に従うパターンを見ると、かつては鹿児島県南部にも中央語規則が存在したのではないかと考えられる。中央語規則が僅かに認められる、しかし全体的には規則は崩壊しているという点で、高知県と鹿児島県南部は共通する。ただし表1と表5を比べると、明らかに表1の高知県の方が、音便形の回答は多い。この傾向は中央語規則①についてだけでなく、②～④についても同じである。これは、高知県では全地点が、鹿児島県南部にある3つパターンのうち、規則が崩壊し殆ど全ての語が音便化するパターンをとっているということである。

5. 高知県におけるサ行イ音便の実態成立の要因

前節で高知県では全地点が、規則が崩壊し殆ど全ての語が音便化するパターンをとると述べたが、規則が崩壊していれば、鹿児島県南部のように地点によって音便化するか否かが異なるのが普通であるように考えられる。しかし、高知県で鹿児島県南部のようになら

ないのはなぜなのだろうか。高知県方言に関する先行研究を手がかりとして考えてみたい。

高知県方言では、吉田(1998:432)で「母音間で[s]が弱まりやすいこと（例　ドーシタ>ドーイタ、ソシタラ>ソイタラ）」があると述べられている。これは、サ行イ音便に限らず、この地域で母音間のs音が脱落する傾向があるということである。さらに、平山輝男他編(1992:258)の高知県方言の解説の項に「シ/si/も東京語に比べて摩擦の程度が少なく、例えば、ドウイタシマイテ(どういたしまして)のように時に脱落する場合もあるが」という記述がある。また、浜田(1966:148)は幡多地方(高知県西部)のサ行イ音便に関して、

サ行四段の音便形は京阪地方と同じくイ音便になるのが普通であるが、注意して聞くと、榎垣氏の言われる「シ」が「ヒ」になった「落ヒタ」「増ヒタ」等の形を聞きとることができる。またサ変動詞の連用形の「し」もタ行子音の前に来る時には「ヒ」と発音するのが普通である。(中略)サ変動詞ではないが、上代の作品に残っている古い尊敬の助動詞「す」の連用形「し」が「ひ」と訛って高岡郡檮原村に残っている。(中略)この「ひ」も、前述の幡多の「落ヒタ」「増ヒタ」「ドヒタチ(著者注:「どうしたとて」の意)」の「ヒ」と同様、その生成から考えて、実際の発音は多分「th」音であろう。

と述べている。s音と言っても、この現象はサ行全体に及ぶものではなく、タ・テの前に「シ」が来ると、「ヒ」に弱化したり「イ」のようにsが脱落したりすることのようである。先行研究に挙げられている例だけでなく、著者が調査の際に得た例も「アシタ(明日)>アイタ」「ノキシタ(軒下)>ノキヒタ」「ドーシテ>ドーヒテ、ドーイテ」「ソシテ>ソイテ」「ソシタラ>ソイタラ」「クローシタ(苦労した)>クローヒタ」等のように、品詞に関わらず全てタ・テの前の「シ」が弱化・脱落しているものであった。

この高知県での音声現象は、たまたまタ・テが続くと「シ」が「イ」になるというサ行イ音便の環境と合致していることになる。この点で、中央語規則が崩壊していると言っても、全て音便形となる方向に向かったのであろうと考えられる。つまり、中央語規則が崩壊すると、音便非音便が混在したり、全て非音便形になったりする可能性もあるが、高知県では、動詞の音便という範疇を超えてより一般的な音声現象が偶然重なったことにより、この音声現象に後押しされ、多くのサ行五段動詞が音便化することになったのだろうと推測される。

通時的には、中央語規則に支配されたサ行イ音便の現象が、中央から高知県へ入ってきた当時、高知県でもそれを受け入れ、音便化する語・しない語がそのまま定着したのだろう。その後、音声的な「シ」が弱化・脱落するという現象が広がり、それに引きずられて非音便形であったものも含め全てのサ行五段動詞が音便化するようになった。そこで中央

語規則が崩れたのであろう。サ行イ音便は後からできた音声的な事情に巻き込まれた形になった可能性が考えられる。

逆に言えば、「シ」が弱化・脱落するという音声現象によって、サ行イ音便が守られたということにもなる。四国地方の高知県以外の県でサ行イ音便が残らないのはなぜかと言うと、この音声現象が、高知県で特に強いものであったからではないか。平山輝男他編(1992)の愛媛県方言の解説の項には「タ行音の前のシがヒに発音される傾向がある。(中略)トバシテがトバイテとなる「サ行イ音便」はないが、トバヒテは散在する。」とあり、香川県方言の項には「ヒ/hi/、シ/si/は東京語に比べて、摩擦と口蓋化の程度が弱いが、高知方言ほどではない。」とある。これを見ると、四国地方では一般に「シ」の摩擦や口蓋化が弱く「ヒ」に発音される傾向はあるが、高知県では特にその傾向が強く、時には s を脱落させ「イ」にまでなることが分かる。

改めて言うと、まずある時期に四国地方全域で、中央語規則を伴ったサ行イ音便を受け入れた。次に中央でサ行イ音便が衰退し、非音便が復活することで、その影響が四国に及んできた際、高知県以外の3県はすぐにそれを取り入れてサ行イ音便が衰退したが、高知県の場合はすでにタ・テの前の「シ」が弱化・脱落するという現象が広まっており、その影響でイ音便が残り、衰退しなかったのであろう。ただ、その残り方は中央語規則が崩壊したものであり、サ行五段動詞は殆ど全て音便化する、という現在の高知県のサ行イ音便の状態になったのだらうと推測される。

6. おわりに

以上、高知県において、サ行五段動詞の音便・非音便を調査し、その結果を元に高知県におけるサ行イ音便の実態とその成立について考察してきた。本章では、次の点が明らかになった。

- (1)高知県では、僅かに中央語規則①③④の存在が認められるものの、全体としてほぼ崩壊している状態であると言ってよい。
- (2)鹿児島県南部のように崩壊のパターンが複数ある状態ではなく、高知県は全地点においてほぼ全て音便化するというパターンの崩壊状態であり、同じ崩壊状態と言っても内実は異なる。
- (3)動詞の音便よりもより上位概念の音声現象が、サ行イ音便という動詞の一形態の、地域独自の有り方に影響を与えることがある。

第7章 サ行イ音便における中央語規則の地理的対応

1. はじめに

第4章から第6章まで、富山・鹿児島・高知のそれぞれの県において、サ行イ音便の実態を、中央語規則に従っているか否かという観点を持って見てきた。

ここで中央語規則を再掲しておこう。

- ①2音節動詞アクセント第一類の語は音便化しない。
- ②いわゆる使役性他動詞は音便化しない。
- ③語幹末が長音である語は音便化しない。
- ④語幹末母音がeである語は音便化しない。

本章では、まずGAJを用い中央語規則①がどのように全国に分布するのかを見る。その後、第4章から第6章までの記述調査の結果を横断的に比較し、上掲の中央語規則が地理的にどう反映されているのかを考察する。すなわち、中央語規則を基準としてみたときの、中央語と方言に現れるサ行イ音便の関係と異なる方言間での関係を明らかにすることを目的とする。

2. GAJ による検討

2.1. 地図の作成

GAJ 第2集 92 図「出した」・98 図「貸した」を用いて図1を作成した。「出す」と「貸す」は共にサ行五段動詞だが、それぞれアクセントが「出す」は第二類であり、「貸す」は第一類である。つまり、中央語規則①によると、中央語において「出す」は音便化する語であり、「貸す」は音便化しない語である。一語ずつではあるが、この2枚で中央語規則①が全国的にどのような地理的分布を成しているのかを見ることができるのである。図1はGAJで調査された807地点に、どちらも音便化する、どちらも音便化しない、どちらか一

方が音便化すると 4 つの記号を付した地図である。地図が煩雑になるのを避けるため、音便形と非音便形の併用があった場合には、音便形を採用している。

まず図 1 全体を見ると、北海道・東日本の地点は殆ど×であることがわかる。北から新潟の佐渡・富山・長野・山梨・静岡のあたりで○との境界線が引けそうである。この×は「出す」「貸す」どちらも非音便形であることを示しており、北海道・東日本にはサ行イ音便は現れないことが分かる。次はこの境界線以西を大局的に見てみると、中部に○、近畿に×、中国に○、四国に×、九州に◎が分布している。もう少し詳しく見ると、◎が九州以外では愛知・和歌山・京都・高知・島根などに現れている。また、●が九州の中程にまともって現れるほか、山形・滋賀・大阪・和歌山・山口・鹿児島に 1 地点ずつ現れる。

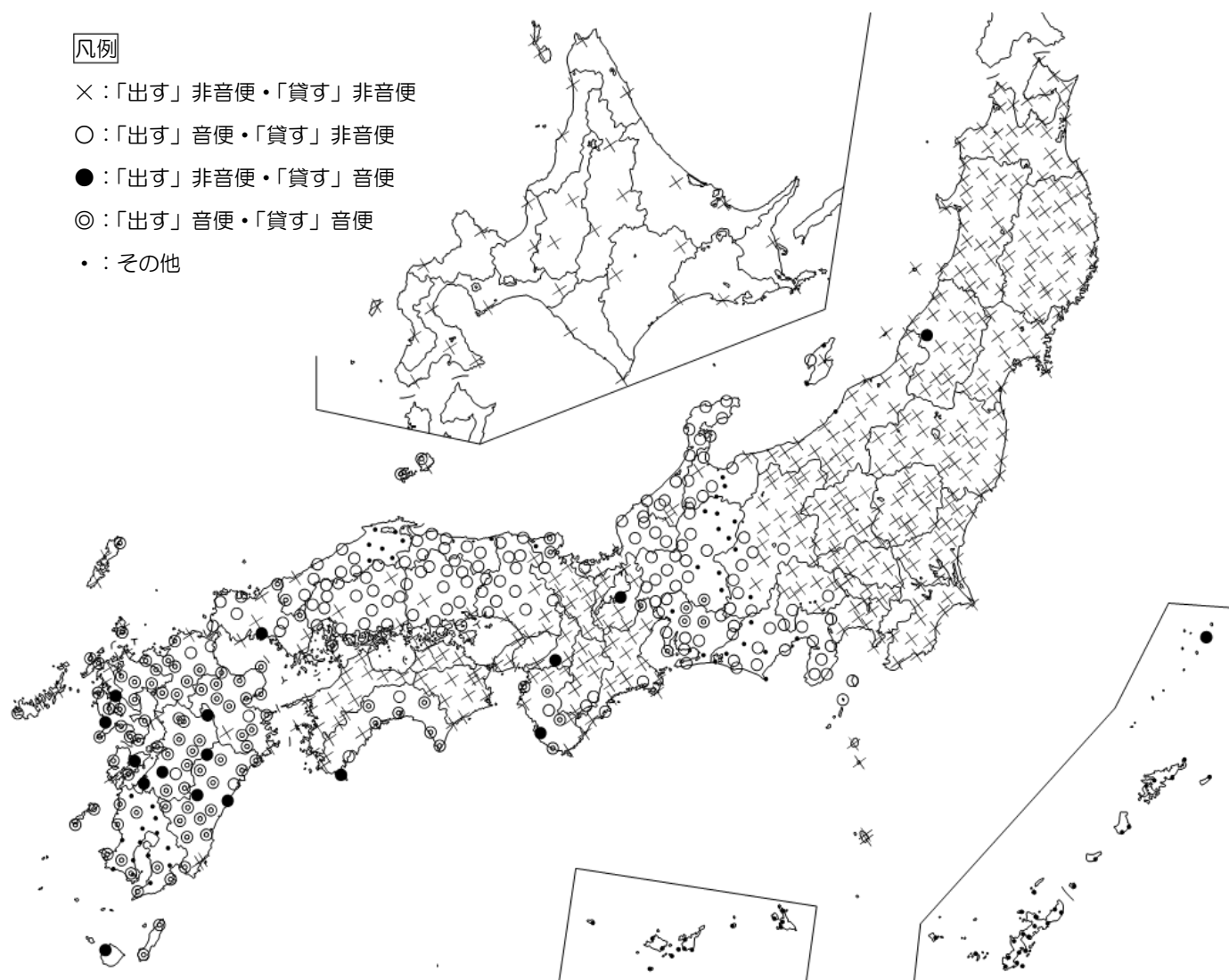


図 1 GAJ92 図と 98 図

次に、この図1の記号のあり方に地理的・歴史的解釈を与えると、次のように考えることができる。北海道・東日本以外の分布を、京都を中心にして考えると、近畿・四国が×、その外周の中部・中国が○、さらにその外側に九州の◎という周圈的な分布であるように見える。今仮にそのグループごとにA～Dの記号を付けると以下図2のようになる。

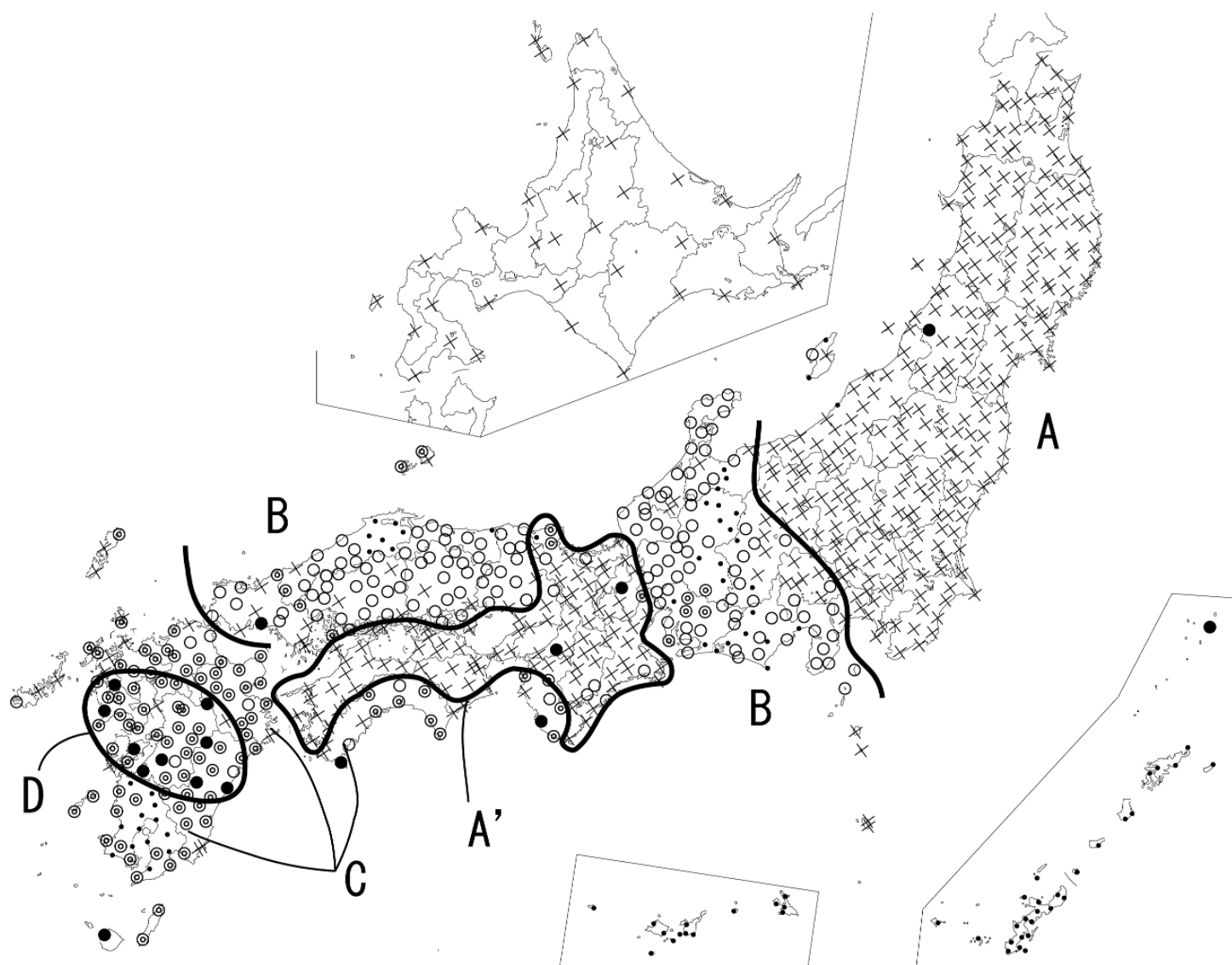


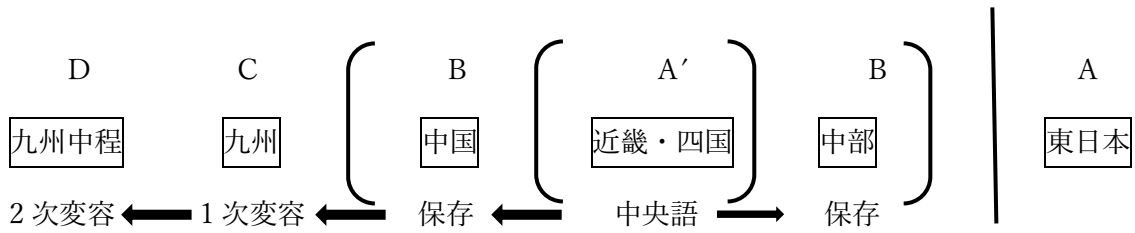
図2 図1の解釈

さらに、各地点の記号に注目すると、近畿・四国に現れた×はどちらも非音便形であるが、京都中央にサ行イ音便が存在していたことを考慮すると、この×は北海道・東日本とは、記号が同じでも性格は異なるものであると言える。つまり、近畿・四国の×は古くは音便化していたが、音便が衰退してしまった地域であると言える。そのため、図5では北海道・東日本がAであるのに対して、近畿・四国をA'としている。ではその周りの中部・

中国の○はというと、「出す」が音便形・「貸す」が非音便形のものである。これは中央語規則①をそのまま保存している地域であり、中央語の姿を留めている。さらにその外の九州の◎はどちらも音便形であり、中央語規則①は保存していないことになる。●は◎の外と言えるのかはわからないが、これは「出す」が非音便・「貸す」が音便であり、中央語の姿とは正反対になっている。また、●が現れている地点を見ると、九州・山形・滋賀以外の地点は海岸沿いの分布の端であることがわかる。●が現れるのは音便の変化が進んだ地域なのではないか。これも中央語規則①を保存していないと言えるが、◎と●の違う点は、◎は「出す」が音便形であるという点においては中央語規則①に従っているというところである。●は◎よりもさらに独自の変化を遂げた姿であると言える。

2.2. 仮説

前節で述べたことをまとめると、GAJ での現在のサ行イ音便の姿は、以下の模式図のように形成されていったものであったのではないかと考えることができる。



平安時代に成立し、室町時代に最も盛んに用いられたサ行イ音便は、語形によって、京都中央から東西に向けて伝播していった。比較的畿・四国に近い中部・中国では、中央語で用いられていた規則をそのまま受け入れて保存した。東側の伝播は中部までであり、東日本には進まなかった。一方西側は九州まで伝播し、中央から来た語形を受け入れると、九州内部で、イ音便を全てのサ行動詞に適用させるという 1 次変容が起こった。さらに変化が進んだ九州中程では、本来音便形で用いられていた語を非音便形とするような、その土地での独自の規則を作り出すという 2 次変容が起こったと考えるのである。

さらに、各地域でどのように中央から伝播した音便形を受け入れたのかを考えると、以下の模式図のようだったのではないかと考える。

時間の流れ	段階	九州中	九州	中国	近畿・四国	中部	東日本
↓ 現在	1	×	×	×	×	×	×
	2	×	×	×	○	×	×
	3	×	×	○	○	○	×
	4	○	○	○	×	○	×
	5	◎	◎	○	×	○	×
	6	●	◎	○	×	○	×

実際に仮説の模式図のように保存や変容が起きているのかを確かめるには、ABCD のグループの地点を一つずつ選んで記述調査を行うが必要になる。しかし、既に第 4 章～第 6 章で見たように、今回の調査地点の場所を確認すると、富山県は B グループ、高知県・鹿児島県は C グループに当たり、ABCD の全てのグループを確認することはできないが、B グループや C グループの内実を見ていきたいと考える。次の節から中央語規則①だけではなく、全ての中央語規則が、3 県ではどのように現れるのかを詳しく見ていく。

3. 各地点での中央語規則の比較

前節は中央語規則①についてのみ全国的に見たが、ここでは、中央語規則の一つひとつを取り上げ、その中央語規則の、富山・鹿児島・高知での振る舞いを比較していく。

3.1. ①2 音節動詞アクセント第一類の語

表 1 2 音節動詞(富山県)

中央語規則①		氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津
第一類	オス(押す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	カス(貸す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	ケス(消す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	タス(足す)	×	×	×	×	×		×	×	×		×	×	×			×
	マス(増す)	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×		×			×
第二類	コス(濾す)	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	×			○
	コス(越す)		×	×	×	×		×		×		×	○	×		×	×
	サス(刺す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	サス(注す)	×	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	○	○
	サス(挿す)	○	○	×	○	×		×	×	○	○	×	×	○		○	○
	サス(差す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○		○	○
	ダス(出す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○
	ホス(干す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ムス(蒸す)	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×

まず「①2音節動詞のうちアクセント第一類の語」について見ていく。富山県・鹿児島県・高知県の順に、それぞれの章で示した表を再掲する。調査地点の数が異なることや、調査語が異なることなど、単純に比較することはできないが、それぞれの地点で中央語規則がどのように振る舞っているのかを見渡すことができる。

表2 2音節動詞(鹿児島県)

中央語規則①		西之表	南種子	安房	宮之浦	串木野	里	平良	鹿島	川辺	枕崎	指宿	知覧
第一類	オス(押す)	×	○	×	×		×	○	×	×	×	×	×
	カス(貸す)	○	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×
	ケス(消す)	×	×	×			○	○		×	×	×	×
	タス(足す)	○	○		×		○	○	×	×	○	×	×
第二類	サス(刺す)	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×
	サス(差す)	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×
	ダス(出す)	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ホス(干す)	○	○		×	×	○	○	×	×	○	×	×
	ムス(蒸す)	○	○		×	×	×	○	×	×		×	

表3 2音節動詞(高知県)

中央語規則①		土佐清水	大方	東津野	吾川	須崎	高知	土佐	香北	物部	田野	奈半利	室戸
第一類	オス(押す)	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
	カス(貸す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
	ケス(消す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	タス(足す)	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○
	ヘス(減す)	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
第二類	コス(濾す)	×			○	○	×	×	○	×	○	○	○
	コス(越す)	×	○	×		○	×	×	○			○	○
	サス(刺す)	×	○	○	○	○	○	×	○		×	○	○
	サス(注す)	○			×	○	○	○	○	○	×	○	○
	サス(挿す)	○	○	○	×	○	○	○					
	ダス(出す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ホス(干す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ムス(蒸す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○

中央語規則①に関しては、富山県で第一類の語は一語も音便化しなかった。これは例外なく中央語規則①に従っている状態であると言えるだろう。

次に鹿児島県では、中央語規則に従い第一類は非音便化し、第二類は音便化する地点・反対に中央語規則に従わず第一類・第二類にかかわらず音便化する地点・同じく中央語規則に従わないが、第一類・第二類にかかわらず音便化しない地点と、綺麗にその性質で地点を分けることができた。地点ごとに中央語規則①に従ったり、それぞれの方法で従わなかったりしている。

最後に高知県では、どちらかと言えば第二類の方が非音便形の回答が多い。全ての地点で中央語規則に従わず第一類・第二類にかかわらず音便化し、中央語規則①に全く従っていないようである。「押す」の非音便形が4地点で回答されていることから、過去中央語規則が一部において残存していたような形跡を見ることもできる。

中央語規則①について、各地での振る舞いをまとめると、以下の表4ようになる。○は規則に従っている・×は規則に従っていないことを示す記号である。

表4 中央語規則①まとめ

	富山県	鹿児島本土 (串木野・川辺・枕崎)	鹿児島本土 (指宿・知覧)	甑島	屋久島	種子島	高知県
中央語規則①	○	○	× 全て非音便	× 全て音便	× 全て非音便	× 全て音便	× 全て音便

鹿児島県については、地点によって様々な振る舞いをするので、地域ごとに分けて示している。富山県と鹿児島本土は第一類が非音便形・第二類が音便形で中央語規則に従っているということになる。種子島・甑島・高知県は規則を守らず類にも関わらず全て音便形となる方向で中央語規則①を破っている。屋久島と残りの鹿児島本土については、第一類だけを見れば中央語規則①に従っているように見えるが、第二類も音便形をとらないことを鑑みると、どちらも非音便形になるという方向で中央語規則①を破っているのだと言える。第一類が音便形・第二類が非音便形をとるという、中央語規則①とは逆転してしまう規則の破り方は見られなかった。

3.2. ②いわゆる使役性他動詞

次に「②いわゆる使役性他動詞」について見ていく。富山県・鹿児島県・高知県の順に、それぞれの章で示した表を再掲する。この規則に関しては、鹿児島県で調査した語が極端に少なく、単純に比較することはできないが、こちらも三つの県の結果を並べて見てみよう。

中央語規則②のいわゆる使役性他動詞は、富山県においては全ての地点で音便形が回答されており、非音便形のみ用いるという動詞はなかった。同じくすべての地点で音便形が回答されている高知県と比べると、全体的に×の非音便形が多いようではある。しかし、同じ音節数の使役性他動詞ではない動詞が、殆どの語・地点で音便形になっていることを鑑みると、音便形になりにくい傾向にあると言えるかもしれない。

表 5 使役性他動詞(富山県)

中央語規則②	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津
イカス(行かす)	○	×	○	×	×	○	×		×	×	×	○	×	×		○
イワス(言わす)	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
オラス(折らす)	×	×	○	×	×	○	×	×	×	○	×	○	×	×	○	×
カガス(嗅がす)	×	×	×	×	×		×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
キカス(聞かす)	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
クワス(食わす)	○	×	×	×	×	×	○		×	×	×	×	○	×		×
シラス(知らす)	×		○	×	×			×		○	×	×	×	×	○	×
ナカス(泣かす)	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	○
ネカス(寝かす)	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	×	○	○	×	○	○
ノマス(飲ます)	○	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	○	○
モタス(持たす)	○	×	○	×	×		×	×	×	○	×	×	×	×	×	○
アソバス(遊ばす)	○	×	○	×	×	○	×	×	×	○	×	○	×	×	○	○
コロバス(転ばす)	○	×	×	×	×	○	○	○			×		×	×		
ハシラス(走らす)	○	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○	○	×	×	×
ナワラス(習わす)	×	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	○	○
ハタラカス(働かす)		○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○		×	○	○

表 6 使役性他動詞(鹿児島県)

中央語規則②	西之表	南種子	安房	宮之浦	串木野	里	平良	鹿島	川辺	枕崎	指宿	知覧
アソバス(遊ばす)	○		×			×		×	×			×
ナカス(泣かす)	○	○	×	×		×	×	×	×	×	×	×
ハタラカス(働かす)	○		×	×				×				×
マカス(任す)	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×		×

表 7 使役性他動詞(高知県)

中央語規則②	土佐 清水	大方	東津野	吾川	須崎	高知	土佐	香北	物部	田野	奈半利	室戸
アソバス(遊ばす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
イカス(行かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
イワス(言わす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オラス(折らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カガス(嗅がす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
キカス(聞かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
クワス(食わす)	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
コロバス(転ばす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
ネムラス(眠らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
シラス(知らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ナカス(泣かす)	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
ナワラス(習わす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ネカス(寝かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ノマス(飲ます)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハシラス(走らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハタラカス(働かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
モタス(持たす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

次に鹿児島県では、種子島にあたる西之表・南種子のみで音便化している。その他の地域では全く音便化が起こっていない。よって種子島の 2 地点のみ中央語規則②に従っておらず、それ以外の地域では従っていると言える。ただし、屋久島の 2 地点と本土の指宿・知覧は使役性他動詞以外にも殆どの語が音便形を取らなかったのも、使役性他動詞だという規則に従っているのか、はっきりとしない。

最後に高知県を見ると、全ての地点、ほぼ全ての語で音便形が回答されており、非音便形のみ用いるという動詞はなかった。他のサ行動詞に比べても使役性他動詞は音便化しやすいもののようであり、その動詞を使用すれば音便化する。よって高知県において中央語規則②は残存していないことがわかる。

中央語規則②について、各地での振る舞いをまとめると、以下の表 8 のようになる。○は規則に従っている・×は規則に従っていない・△ははっきりとは分からないということを示す記号である。

表 8 中央語規則②まとめ

中央語規則②	富山県	鹿児島本土 (串木野・川辺・枕崎)	鹿児島本土 (指宿・知覧)	甕島	屋久島	種子島	高知県
	△ 語や地点 により音便	○	△ 殆どの語 が非音便	○	△ 殆どの語 が非音便	× 音便	× 音便

この中央語規則②に従っているようであるのは、鹿児島本土の 3 地点と甕島であった。これらは他の語が音便形となっているのに比べて、使役性他動詞では非音便形が多くなっている。富山県でも地点によってはその傾向が表れているが、語や地点により様々な振る舞いを見せており、中央語規則は読み取れない。高知県ではほぼ全ての語・地点で音便形をとるため、中央語規則②には従っていないことが分かる。

3.3. ③語幹末が長音である語

次に「③語幹末が長音である語」について見ていく。富山県・鹿児島県・高知県の順に、それぞれの章で示した表を再掲する。この規則に関しては、そもそもの語数が少ない。表 9 の「申す」、表 10 の「催す」は全地点でその単語自体を使用しないと回答されたため、結果が空欄となっている。

表9 語幹末が長音である語(富山県)

中央語規則③	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津
トース(通す)	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ
モース(申す)																
モヨース(催す)			×	×	×	○ モヨース	×	×	○ モヨース	×	×	○ モヨース		○ モヨース	○ モヨース	○ モヨース
ヤリトース	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ

表10 語幹末が長音である語(鹿児島県)

中央語規則③	西之表	南種子	安房	宮之浦	串木野	里	平良	鹿島	川辺	枕崎	指宿	知覧
トース(通す)	○	×	×	×	○	○	○	×	×	×	○	×
モヨース(催す)												

表11 語幹末が長音である語(高知県)

中央語規則③	土佐 清水	大方	東津野	吾川	須崎	高知	土佐	香北	物部	田野	奈半利	室戸
トース(通す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
cf.オトス(落とす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
モヨース(催す)	×	○		×	○	×	×	○	×	○		
cf.ホドコス(施す)	○	○	○	○	○	×	○	○	○		○	

富山県では、「通す」とその複合語「やり通す」は全地点で音便形を用いる。このことから、富山県では中央語規則③は残存していないと言える。

鹿児島県では、「通す」は西之表・串木野・里・平良・指宿で音便形が回答された。よって西之表・里・串木野・指宿は中央語規則③「語幹末が長音である語は音便化しにくい」に従っておらず、それ以外の地域では従っていると言える。

高知県では、「通す」は田野のみ非音便となっているが、多くの地点で音便化するようである。ただし、田野で非音便形が回答されているということは、僅かに中央語規則が生きているとも考えられる。

中央語規則③について、各地での振る舞いをまとめると、以下の表12のようになる。○は規則に従っている・×は規則に従っていないことを示す記号である。

この中央語規則③に従っているようであるのは、鹿児島県の地点であった。富山県も高知県も、中央語規則③に関しては全く従っていない。鹿児島県の数地点も従っていないが、鹿児島県全体としてはやや中央語規則③が残存するようではある。ただし、前節でも述べたように、屋久島は使役性他動詞以外も殆どの語が音便形を取らなかったため、使役性他動詞だという規則に従っているのか、はっきりとしないため△とした。

表 12 中央語規則③まとめ

中央語規則③	富山県	鹿児島本土 (串木野・川辺・枕崎)	鹿児島本土 (指宿・知覧)	甕島	屋久島	種子島	高知県
	×	○ 串木野×	○ 指宿×	○ 平良×	△ 殆どの語が非音便	○ 西之表×	×

3.4. ④語幹末母音が e である語

最後に「④語幹末母音が e である語」について見ていく。富山県・鹿児島県・高知県の順に、それぞれの章で示した表を再掲する。

富山県では、全体的に×が多く、音便形は殆ど回答されていない。つまり、語幹末母音が e であるという規則は残存していると言えるだろう。特に本動詞の、他の語幹末母音の場合と比べると、圧倒的に語幹末母音が e である語は音便形になっていないことが分かる。

表 13 語幹末母音が e である語（富山県）

中央語規則④		氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津
本動詞	ケス(消す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	カエス(返す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	シメス(示す)		×	×	×	×					×	×	×	×			×
	タメス(試す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
	ナメス(なめす)				×	×					×			×			×
	クツガエス(覆す)				×	×	×				×	×	ガエタ	○			ガエタ
	ヒルガエス(翻す)			×	×	×			×			×		○			エイタ
	cf.アカス(明かす; 語幹末a)	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
	cf.カクス(隠す; 語幹末u)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	cf.オコス(起こす; 語幹末o)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
複合動詞	フキケス(吹き消す)	×		×	×	×		×	×	×	×	×	×	×	×		×
	イイカエス(言い返す)	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	ウラガエス(裏返す)	×	○	×	○	×	ガエタ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	ヒキカエス(引き返す)	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	トリカエス(取り返す)	×	○	×	×	×	／	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	ヒックリカエス(ひっくり返す)	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	タタキノメス(叩きのめす)	○		×		○	○		×			×	×	×			○
	cf.オモイダス(思い出す; 語幹末a)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	cf.オイコス(追い越す; 語幹末o)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○

鹿児島県では、あまり回答自体が得られなかったが、音便形が回答されている地点もあれば、非音便形のみが回答されている地点もある。特に鹿児島本土の地点では音便形を取らず、島嶼部で少し音便形が現れるようである。

高知県では、全体的にかなり多くの地点で音便形が回答されている。つまり、語幹末母

表 14 語幹末母音が e である語（鹿児島県）

中央語規則④	西之表	南種子	安房	宮之浦	串木野	里	平良	鹿島	川辺	枕崎	指宿	知覧
ケス(消す)	×	×	×			○	○		×	×	×	×
カエス(返す)	○		×	×				×	×	×		×
シメス(示す)							×					×
タメス(試す)	○										×	×
ナメス	○											
クツガエス(覆す)												
ヒルガエス(翻す)	○											
仕返す		○		○	×						×	
言い返す		×	×	○	×		○		×		×	
裏返す		×	○	○	×						×	
ひっくり返す		×	○	○			×		○		×	○
混ぜくり返す				○								

音が e であるという規則は残存していないと考えてよいだろう。地点としては高知と奈半利でやや非音便形が多く出現しているが、殆どの地点・語で非音便形である富山県と比べても、高知県は音便形の回答が多いように見える。

表 15 語幹末母音が e である語（高知県）

中央語規則④		土佐清水	大方	東津野	吾川	須崎	高知	土佐	香北	物部	田野	奈半利	室戸
本動詞	ケス(消す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	カエス(返す)	○	○	○	×	○	×	○	○	×	×	×	
	シメス(示す)	○	○	○	○	○	×	○	○				
	タメス(試す)	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○
	ナメス(なめす)		○		○	○	○	○		○			
	クツガエス(覆す)	○	○		○	○	○	○	○		○		
	ヒルガエス(翻す)	○	○		○	○	×	○	○		○		
	cf.カラス(枯らす; 語幹末a)	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
	cf.カクス(隠す; 語幹末u)	○		○	○	○	○		○		○	○	○
	cf.オトス(落とす; 語幹末o)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
複合動詞	フキケス(吹き消す)	○	○		×	○	○	○	○	○	○	○	○
	イイカエス(言い返す)	○	○	○	○	○	×	○	○			×	○
	ウラガエス(裏返す)	○	○	○			×	○	○	○	○	×	○
	ヒキカエス(引き返す)	○	○			○	×		○	○	○	×	○
	トリカエス(取り返す)	○	○	○	×		×		○		○	×	
	ヒックリカエス(ひっくり返す)	○	○	○	○		×		○		○	×	×
	タタキノメス(叩きのめす)	○			○	○	○		○	○			○
	cf.オモイダス(思い出す; 語幹末a)	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
	cf.ノミホス(飲み干す; 語幹末o)	○			○	○	○	○	○	○	○		○

中央語規則④について、各地での振る舞いをまとめると、以下の表 16 のようになる。○は規則に従っている・×は規則に従っていないことを示す記号である。

この中央語規則④に従っているようであるのは、富山県と鹿児島本土の地点であった。高知県や鹿児島島の島嶼部では、語幹末母音 e の語でも音便形をとり、この中央語規則④には従っていないことが分かる。

表 16 中央語規則④まとめ

中央語規則④	富山県	鹿児島本土 (串木野・川辺・枕崎)	鹿児島本土 (指宿・知覧)	甑島	屋久島	種子島	高知県
	○	○	○	× 音便	× 音便	× 音便	× 音便

3.5. 各地点での中央語規則まとめ

ここまで、中央語規則を一つずつ取り上げて見てきたが、ここで中央語規則①～④に従っているか否かを一つの表にまとめてみると、以下の表 17 のようになる。前節までで規則のまとめの表として挙げたものを、煩雑な記号はまとめ（○と×の混在は△にするなど）、比較しやすくしている。

表 17 中央語規則のまとめ

地点 規則	富山県	鹿児島本土 (串木野・川辺・枕崎)	鹿児島本土 (指宿・知覧)	甑島	屋久島	種子島	高知県
中央語規則①	○	○	×	×	×	×	×
中央語規則②	△	○	△	○	△	×	×
中央語規則③	×	△	△	△	△	△	×
中央語規則④	○	○	○	×	×	×	×

表 17 の記号は、○が中央語規則に従っているもの、△が一部中央語規則に従っているもの、×が中央語規則に従っていないものである。今回取り上げた数地点だけでも、中央語規則に従うかどうかで違いがあることがわかる。今回の地点のなかで一番規則に従っているのは鹿児島本土の串木野・川辺・枕崎である。次いで富山県までが比較的規則に従っている地点であると言えるだろう。少し従っているものに鹿児島本土の指宿・知覧、甑島と

続く。そして屋久島、種子島、高知県は殆ど規則に従っていない地点であることが分かる。ちょうど表 17 の左側の地点ほど規則に従っており、右に行くほど規則に従わない地点となっている。

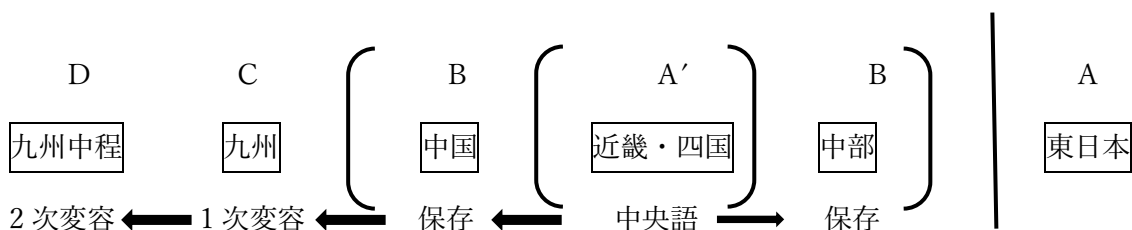
また、表 17 で同じ×の記号がついていても、その内実は同じではない。高知県と鹿児島県は×が多いように見えるが、高知県はほぼ全てのサ行動詞が音便化するために、規則に全て従わないのであり、鹿児島県では、地点により語により音便化する語がバラバラなのである。

4. 中央語規則の地理的対応

前節まで、中央語規則を一定の基準とし、中央語規則①については全国的な分布を見て、規則全てについては第 4 章～第 6 章に挙げた調査結果を用いて、各地点でその規則が当てはまるかどうかをみてきた。ここでは、それらを用いて、各地点は全国的な分布で見たときに、どのような傾向があるのかを見ていきたい。

本章の 2 節で、GAJ では富山県は B グループ、高知県・鹿児島県は C グループに当たると述べたが、前節で見たように、全国的な分布でみると同じグループでも、その内実、中央語規則への従い方は、C グループの高知県・鹿児島県で異なるように、同じではないことが分かった。

今回の調査結果では、高知県や鹿児島県は中央語規則に従っていない地点が多いが、これは下の図 1 から作成した模式図で言うと C グループに当てはまり、変容している地域であるため、中央語規則を守っていないのだと考えられる。



一方富山県は B グループに当てはまる。この地域は、中央語を保存している、すなわち中央語規則を守っている地域である。第 2 章の先行研究で見た岐阜県も、ほぼ中央語規則を守っている地域であることから、B グループに含まれる地域では、中央語を保存しているため、中央語規則を守っている地点が多いのではないかと予想される。

5. おわりに

本章では、まず GAJ を用い中央語規則①がどのように全国に分布するのかを、地図を作成して見た。その地図を元に仮説を立てたが、今回の記述調査の地点では、全てのグループを検証することはできなかった。そこで第 4 章から第 6 章までの記述調査の結果を横断的に比較し、上掲の中央語規則が地理的にどう反映されているのかを考察した。結果、以下の 2 点が明らかになった。

- (1)B グループである富山県の結果と鹿児島県・高知県の結果を比較すると、富山県は全域で中央語規則に比較的従っている。B グループに含まれる地域では、中央語を保存しているため、中央語規則を守っている地点が多いのではないかと予想される。
- (2)C グループである鹿児島県・高知県では、比較的中央語規則に従わない。その従わない内実も異なっており、高知県では規則に関係なくすべての語が音便形となってしまいう崩壊の仕方をしているのに対して、鹿児島県では、比較的従っている地点も一部あり、また全て非音便形となる地点、高知県のように全て音便形となる地点と、地点によって様々な崩壊の仕方をしている。

第8章 「返す」のサ行イ音便と「カヤス」の成立

1. はじめに

前章まではサ行イ音便の各地での分布形成について見てきたが、本章と次章では、サ行イ音便が影響して成立したと考えられる特定の語に焦点を当て、形態論的な面から特徴を記述するとともに、その成立過程について考察する。具体的に本章では、「返す」に対応する方言形「カヤス」を取り上げた。これまでの研究では、サ行イ音便の消失や衰退ばかりが注目されてきたが、この現象に影響されて成立した語の考察に拡大することで、音便史と語彙史の交渉という視点から、サ行イ音便という現象に検討を加えることができるのではないか。

本論文では、各地のサ行イ音便を比較する基準として、中央語文献でイ音便化しない、しにくい動詞の「中央語規則」を何度も用いているが、この中央語規則によると、語幹末母音がeの「カエス」(「返す」)は「④語幹末母音がeである語」に当てはまる。この④は、「カエス」で一例を示せば、イ音便形をとると「カエイタ」となり、e-iの母音連続が起こり長音化してしまうことから、これを避けたものと考えられている。そこで、「カエス」はどのようにe-iの連続を回避したのかを考えてみたい。

本章は、主として「カエス」の方言形である「カヤス」という語に注目し、「「カヤス」は「カエス」の音便が不都合であることを回避しようとして作り出した語である」という仮説を立て、この仮説を検討することで、「カエス」のサ行イ音便と「カヤス」の成立について考える。その際、中央語文献に拠るだけではなく富山で記述調査を行った結果やその考察もふまえ、総合的に考察を行うことを目的とする。

なお本章では、活用形(音便形も含む)を表す際に「かえさ」「かえし」「かえい」「かやい」「かえす」「かえせ」のように平仮名表記を用い、それらをまとめて終止形で代表させ語として表す際には「カエス」と片仮名表記を用いる。

2. 先行研究

2.1. 中央語文献におけるサ行イ音便の語幹末母音が e である語に関する研究

第2章でも述べたが、橋本(1962)・奥村(1968)などによれば、サ行イ音便が定着していた間にも、音便形が現れないサ行動詞が存在していたことが指摘されている。その1つが、語幹末母音が e の「カエス」のような語である。この語幹末母音が e の動詞が音便化しにくいことは、北原(1973)が初めて指摘したものであるが、音便化している例も挙げており、全くイ音便形をとらないわけではなく、「比較的イ音便化しにくい語」としている。

柳田(1993)は、語幹末母音が e である語はもとイ音便を起こしていたが、江戸時代に入ってから e-i の母音連続が長音化するようになると、他の語幹末母音の語はイ音便化しているので活用語尾がイであるのに対して、語幹末母音 e である語だけが長音で孤立するために、原形に戻ったものとした。そしてサ行イ音便衰退の主な要因は、イ音便形をとらない動詞にあるわけではなく、サ行に上二段活用動詞が存在しないため、カ行やタ行のように上二段活用動詞と形態上の差異化を図る必要が特になく(カ行であれば「置く」と「起く」等、イ音便と非音便形で形態上の差異化を図っている)ことにあるとした。そして語幹末母音 e である語が原形に戻ったのをきっかけに、他の語幹末母音の語も原形に戻ったとしている。まとめると以下のようなになる。

10C 発生	当初から原形のままの語が相当数存在
17C 頃 e-i 長音化	語幹末母音が e である語が原形に回帰
17C 半 衰退	音便を保持する必要がなかったため他の語幹末母音の語も原形に回帰

中央語規則④には「カエス」の他に「消す」「召す」が挙げられているが、これらは中央語規則②にも含まれているので、中央語規則④だけに当てはまるわけではない。今回問題となる語とは、3モーラ以上の語幹末母音が e である語であり、基本的に「カエス」とその複合語のことである(他に「示す」「試す」などがあるが文献上の例はごく少ない)。そのため「カエス」という語を選択した。

2.2. 中央語文献における「カヤス」に関する先行研究

語幹末母音が e である語は、中央語において室町時代までは音便化していたが、江戸時代に入り e-i の母音連続が長音化するようになると、原形に戻ったと言われている(e-i の長音化の早い例とみられるのは、土井(1934)があげている『孟子抄』(1532年成立)の「クレイ」>「クレへ」の例である。)。この「カエス」に関しては先行研究で取り上げられることも

多いが、「カヤス」は動詞の俚諺形であることに加え、語幹末母音が a の語で音便化しやすいため、あまり先行研究で取り上げられることはない。

サ行イ音便と「カヤス」の関係について述べている先行研究には、北原(1973)がある。他にも「カヤス」を取り上げている先行研究には、工藤(1978)・亀井(1982)・柳田(1993)・田中(1996)・田中(2001)がある。工藤(1978)は北原(1973)の説を支持しており、亀井(1982)は「タガヤス」について論じているが、サ行イ音便との関係については言及せず、柳田(1993)はサ行イ音便とは関係しないものとしている。北原(1973:104-105)は、「カエス」がイ音便化しにくいことと「カヤス」の関係について、

「かやす」が、いつの頃成立したものであるか、詳らかではないが、中世に「かエス」から転じて成立したものであることは、ほぼ確実であろう。この「かやし」は中世語資料にしばしば認められ、しかも比較的よくイ音便化するのであるが、この辺にも、「かへし」がイ音便化しにくかったことと連関するものがあるように思われるのである。

以上のように、北原(1973)は「返す」がイ音便化しにくかったことと「カヤス」が関係しているのではないかと述べているが、その詳細については述べていない。一方、柳田(1993:698)は「カヤス」はイ音便化による e-i の連続を避けるために作り出された形ではないと述べている。

「かへす」の異形「かやす」は、e-i の連続を避けるために作り出された形ではなく、kaiesu が kaisu に崩れていくのを補強するためにできた形であったと見られる。

また亀井(1982)は「タガヤス」という語について、サ行イ音便には全く言及せず、「タガエス」>「タガヤス」の変化は同化に見せかけた異化であると述べている。先に挙げた柳田(1993:20)はこの亀井(1982)の指摘を支持している。

タガエス(tagaiesu)>タガヤス(tagaiasu)の変化は見かけの上からすれば“前進同化”に分類しうる。しかしながら、これは見かけの上だけのはなしかもしれないのである。いったい、とかく《-aie》という結合は—《-aiu》とならんで、ともに—不安定で、えてして《-ai》となる傾向があったものと概括的にいえる。(中略)いま、このような“傾向”と“動揺”とを背景にすえて考えるならば、たとえばアド・ホックの解釈とはいっても、タガヤスの場合には一般の流れにさからい、—aie>-ai の変化をきらって—すなわち“異化”の線をえらんだものと見うるかもしれないのである。

しかし、亀井(1982)の言う「《-aie》という結合が不安定で、えてして《-ai》となる傾向」は、「カエル」(蛙)が「カイル」になる例や、「ムカエ」(迎え)が「ムカイ」になる例はあるものの、動詞の語幹の場合には見られない。また、柳田(1993)の「kaiesu が kaisu に崩れていく」や、亀井の(1982)の「-aie>-ai の変化をきらって」で述べられている「カイス」という形に、なぜ変化してはいけないのかという説明もない。

版本「絵入り狂言記」と、『現代日本語方言大辞典』により、中央語と方言の両面から「カヤス」への変化を論じたものに、田中(1996)・田中(2001)がある。これによると、狂言での「カヤス」は命令形に偏って現れることから、「カヤス」の成立について、以下のような仮説を立てている。

1. 「返す」の各活用形のうち、まず最初に命令形が[kajeje]から[kajafe]に変化した。ここで語幹部分が変化したのだから、他の活用形も次第に kajas- という形式になっていった。
2. 「推量の『ーウ』」や「サ行イ音便」などその時代の俗(新)語法が新語形「カヤス」と共起して次第に「カヤス」の使用が増え「カエス」よりも多くなって「カエス」が使用されなくなっていった。

仮説 1 の後に仮説 2 となったと考えているようである。後述するが中央語文献で一番早く見られた「カヤス」の例は『請来目録』(1350 年)であり、命令形「かやせ」は「カヤス」の活用形の中で一番現れるのが遅い。狂言以外の資料も見てみると、仮説 1 の命令形から変化したとは考えにくいのではないか。仮説 2 については具体的な検討は行われていない。

以上が「カヤス」について述べられている先行研究であるが、「カヤス」という語の成立について、明確に述べているものは見当たらない。

2.3. 方言における「カエス」のサ行イ音便に関する先行研究

富山県方言におけるサ行イ音便について記述したものに小西(2001)がある。富山県富山市(呉東地域)において生え抜きの男性をインフォーマントとして面接調査し、そのイ音便化について記述したものであり、「カエス」については「言い返す」「裏返す」「繰り返す」「取り返す」「ひっくり返す」を調査語に含め、「カエス」は単純語・複合語共に音便化は不可能であるとし、以下のように記述している。

- (1)単純動詞、(2)複合動詞の両方の結果から、「語幹末が e である語はイ音便化しない」ことが指摘できる。「返す」「消す」に対しては、同義の「カヤス」「ケヤス」が存在するが、それらではイ音便形が可能である。(中略)単純動詞でイ音便化する動詞が複合動詞の後部要素となる場合には、全てイ音便化する。単純動

詞としてはイ音便形が不可とされる「越す」を後部要素とする場合、「引っ越す」は「？」であるが、他の「追い越す」「勝ち越す」等ではイ音便形が可能である。
(p.5)

この記述から、富山県富山市では単純語「カエス」、複合語「一カエス」共に音便化が不可能であること、単純語では音便化しないが、複合語になると音便化する「越す」のような語があることが分かる。単純語ではイ音便形をとらない語が複合語の後部要素となる場合にイ音便形をとるという現象は、奥村(1968)の岐阜県各地での「足す」の場合、福井(1962)の飛騨萩原方言での「足す」「越す」の場合でも見られる。奥村(1968)は、これを「多音節語が音便化し易い」という一般的な傾向の現われとみなしている。

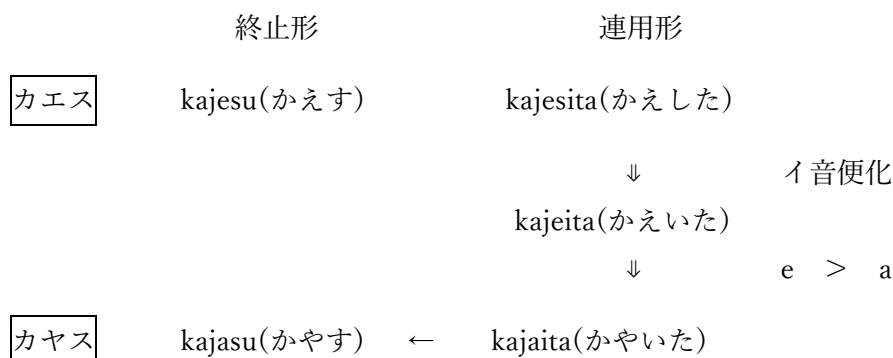
「カエス」が音便化するという他方言における記述は、宮治(1993)で報告されている、滋賀県の一部においてサ行動詞全てが音便化するという特殊なイ音便の例や、今村(1999)で報告されている長野県・岐阜県・愛知県・静岡県の一部の例がある。方言においては「カエス」が特定地域において音便化する・しないという報告は見られるが、その特定地域での「カヤス」という語自体に関する先行研究はあまり見られない。

3. 仮説

サ行イ音便と「カヤス」の関係について、「カヤス」の成立にはサ行イ音便が関係しているという北原(1973)の説に基づき仮説を立てる。

仮説：「カヤス」は「カエス」の音便が不都合であることを回避しようとして作り出した語である。

この仮説に基づくと、以下のような変化が考えられる。



まず「カエス」の連用形「かえした」(以降連用形はタ形で示す)は音便化して「かえいた」となったが、e-i が連続すると長音化が起こり、他の語幹末母音の語はまだ音便化しているのに語幹末母音が e の「カエス」は音便化することができず孤立した。それを避けるために音便化している語の数が多い語幹末母音が a の「かやいた」という音便形が作り出された。そして、その連用形を出発点として、「かやさ」「かやす」「かやせ」等の活用形を作り出し「カヤス」の活用形が揃った。

さて、上述の仮説を検討するためには、次の 3 点が確認できればよいであろう。

- (1)「かえいた」>「かやいた」という順番で現れる。
- (2)「かやいた」が現れると「かえいた」が衰退していく。
- (3)連用形のイ音便「かやいた」が終止形「かやす」等連用形以外の活用形より前に現れる。

これらについて中央語文献で確認するだけではなく、方言資料も併せて考えてみたい。具体的には、次の 3 つの方法を用いて検討を行う。

- a.中央語の状態を把握するため、中央語文献を資料とし、「カエス」から「カヤス」への通時的な変化を見る。
- b.全国方言の状態を把握するため、『口語法調査報告書』・『方言文法全国地図』と方言辞典を資料とし、全国的な分布を見る。
- c.特定地域でその現象を詳しく見るため、富山県呉西地域での臨地面接調査の結果を資料とし、「カエス」「カヤス」の振る舞いを見る。

以上 3 点を踏まえながら、次節では今回の仮説の着想に至った要因を述べ、5 節以下で、具体的に(1)(2)(3)について、abc のそれぞれの点から検討を行っていく。

4. 例外語と音便化する語の割合

前節で「音便化している語の数が多い語幹末母音が a の「かやいた」という音便形が作り出された。」と述べたが、ここで、中央語規則①②③がサ行四段動詞に占める割合はどのくらいであったのか、また音便化する語の語幹末母音語ごとの割合を出しておきたい。参考までに、国立国語研究所(1971)の動詞単純語一覧からサ行五段活用動詞計 237 語を抜き出し、それぞれの条件に当てはまるものを数え割合を出したのが以下の表 1 である。

表 1 で、語幹末母音に注目してみると a の語が 74%を占めており、圧倒的に多い。それ

に対し、語幹末母音 e である語は 4% と一番少ない。また、例外語に注目してみると、①②の当初から原形のまま存在していた語は 15 語と、かなり少ない。③は、語幹末母音が a のものしかなく数がやや多いが、音便化したりしなかったりと浮動している語なので、55 語が全く音便化しないわけではない。つまり、①、②に当てはまるような全く音便化しないサ行動詞は全数から見れば少なく、大方の語は音便化するのである。そして、その大方の語の多くは語幹末母音が a なのである。仮説で「カエス」が「カヤス」になったと述べているのも、このことに基づいている。

表 1 語幹末母音ごとのサ行動詞全数に占める割合

語幹末母音	a	u	e	o	計
語の数	203	20	12	38	273
割合	74.4%	7.3%	4.4%	13.9%	100.0%
①語数	0	1	0	1	2
①割合	0.0%	0.4%	0.0%	0.4%	0.7%
②語数	4	1	4	4	13
②割合	1.5%	0.4%	1.5%	1.5%	4.8%
③語数	55	0	0	0	55
③割合	20.1%	0.0%	0.0%	0.0%	20.1%
①②③語数	59	2	4	5	70
①②③割合	21.6%	0.7%	1.5%	1.8%	25.6%

5. 文献から見た「カエス」と「カヤス」

5.1. 文献調査の概要

中世語資料のサ行イ音便に関する先行研究は多いが、殆どがイ音便化している語を数え音便化率を出したものである。そこで、「かえす」がその中に含まれているかは不明である。橋本(1962)でキリシタン資料・狂言、奥村(1968)で狂言・浄瑠璃・洒落本等、高見(1978)で抄物、坂梨(1990)で近松浄瑠璃、柳田(1993)でキリシタン資料・狂言・抄物の「返す」のイ音便化した数を知ることができるが、「カヤス」については触れられていない。他にもどう抜き出したかや底本が不明である点などが、文献上の「カエス」と「カヤス」について検討するためには、先行研究の調査では不十分であると考え、先行研究で取り上げられている文献を調査することにした。

今回の調査に使用した文献は、全てサ行イ音便に関する先行研究でよく使用されているものであり、サ行イ音便が現れることが分かっているものである。室町時代末期口語資料の抄物・キリシタン資料、近世前期上方口語資料の狂言詞章・近松浄瑠璃で、それらの索

引によって「カエス」「カヤス」とその複合語の数を調べた。なお、数を出す際、「返す」「返」のように「カエス」「カヤス」のどちらか分からないものは除いている。「返し」「返い」のように「カエス」「カヤス」のどちらか分からないけれども、音便形かそうでないかが分かる場合は音便について見るときのみ採用した。

また、近松浄瑠璃に見られるサ行イ音便について、坂梨(1990)や依田(2005)でサ行イ音便の使用が当時既に一般的でなく、老人や地方の者の人物を特徴づけるための手法であったと指摘されている。これを受けて、今回はサ行イ音便が中央で既に衰退していたとされる近松浄瑠璃以降(1700 年以降)の資料は扱わない。

5.2. 中央語文献に現れる「カエス」と「カヤス」

サ行イ音便がよく現れる中世の抄物・キリシタン資料・狂言を中心としつつ、各時代に渡る文献資料を用いて、中央語文献に現れる「カエス」「カヤス」とその複合語の数を調べ、表 2 を作成した。

「カエス」は上代から存在する動詞である。今回調査した資料中、イ音便形「かえい」の初出は『西大寺蔵本護摩密記(長元八年点)』(1035 年)であった。

- (1) 然して然に^{ハハキ}箒を^{カヘイ}反て鈴自り始めて闕伽供物等に至るまで布列せよ。

「カヤス」については『日本国語大辞典第二版』にて『九冊本宝物集』(1179 年頃)が一番早い用例とされている。

- (2) 汝かへりてかやさんとて、多く人の物をかりたり。

しかし、この写本の書写年代は小泉(1963)によると近世初期頃と考えられ、1179 年に「カヤス」が存在したとは考えにくい。次に早く「カヤス」が文献に現れるのは『群書類聚』の「嫁入記」(1443~47 年)で、

- (3) 縫ひやう、ふせ縫也。すそをかやして縫べからず。

これも近世後期の写本であり、1443 年に「カヤス」が存在したのかは定かではないが、『請来目録』(1350 年)で「たかやす」が現われていることから、「カヤス」は中世前期頃成立したのではないかと考えられる。

以下の表 2 は「カエス」のイ音便形と「カヤス」の各活用形の文献における現れ方を示したものである。なお、単純語の他に複合語で現れるものも数に含めている。

「カヤス」が文献に現れる以前に「かえい」という「カエス」のイ音便形が現われていることから、先に示した条件の(1)が確認できる。しかし「かやい」が現れるようになって、サ行イ音便が衰退したとされる17世紀半ばまで、依然として「かえい」が用いられている。つまり条件の(2)については確認することができない。中央語文献でこの(2)が確認できなかったのは、「カヤス」が俗語的であったことが原因ではないかと考えられる。「カヤス」は、坂梨(1990)で「俗語的な響きがあって」と言われているように、「かえいた」のようなイ音便形より更に口語的であったと考えられる。よって口語的な資料とされているものにも文献の書記言語としての規範意識が働き、「カヤス」のイ音便形「かやい」ではなく「カエス」のイ音便形「かえい」を用いていたのではないかと考えられる。条件(3)については、今回見た限りでは「カヤス」が一番早くみられる『請来目録』で終止形「かやす」、次の『杜詩続翠抄』で未然形「かやさ」と、連用形以外のものから現れた。これは「かやいた」という形が作り出された時に、その活用形が間を置かずに作られたので、文献上には(3)のような現象は現れないということが考えられる。これらの文献調査では、仮説(2)(3)を証明することができなかった。それでは、方言のサ行イ音便や「カヤス」の分布状況から証明することはできないだろうか。

表2 文献における「カエス」のイ音便形と「カヤス」

成立年	文献資料	カエス	カヤス				
		かえい	かやい	かやさ	かやし	かやす	かやせ
1035	西大寺蔵護摩密記	1					
1350	請来目録					1	
1437	杜詩続翠抄	1		1			
1475	論語抄	2	1		4	3	
1481	日本書紀兼俱抄		1	3	1	2	
1482	漢書抄			4	3	4	
1524	日本書記桃源抄		1	2	2		
1525	古文真宝彦龍抄		1				
1529	蒙求抄	5					
1530	莊子抄					1	
1534	四河入海			10	3	1	
1539	毛詩抄	10	2				
1566	山谷抄	7	1				
1592	天草版平家物語	10					
1593	天草版伊曾保物語	1	1			1	
1624	狂言六義	5	1	6	4		8
1643	大蔵虎明本狂言集	1	4		2	3	
1666	狂言記			2			4
1700	狂言記外五十番			1			1
1700	続狂言記						5

6. 全国的な「カヤス」の分布

6.1. 分布図の作成

1 節で述べたように、「カヤス」とサ行イ音便は主に西日本に分布している。詳しくサ行イ音便と「カヤス」が日本全国でどのような分布をするのかを確かめるため、まずサ行イ音便が起こる範囲を確認した。資料としては、『口語法調査報告書』の第十五条と『GAJ』第2集の92図「出した」を用い、サ行イ音便を持つ地点を確認した。『GAJ』だけでなく、『口語法調査報告書』も用いた理由は、口語法調査が行われた明治時代にはサ行イ音便が存在したが、現在は衰退し存在しない地域(主に近畿)があるためである。今回は一語でもサ行イ音便化していたという記述があれば、音便化していた地域として扱っている。「カヤス」については『日本方言大辞典』と『現代日本語方言大辞典』で用いられる地点を確認し、その二つを重ねて図1を作成した。

以下に『口語法調査報告書』と『方言文法全国地図』の特徴、質問形式を挙げておく。

『口語法調査報告書』：通信調査。1903年9月実施。38条からなる質問票を全国の府県庁、師範学校に送付し、その回答に基づいてまとめられたもの。

第十五条 サ行四段活用動詞より、「て」「た」に続くときは、
「指い」てた「出い」てた「致い」てた「落い」てた「残い」てた「離い」てた
「流い」てた「崩い」てた「暮い」てた「殺い」てた「潰い」てた「延い」てた
「済い」てた(「勉強致します」なども云うか。)
右の如く云うか。而して、同じ活用にて、「消い」(て)・「押い」(て)・「召い」
(て)・「乾い」(て)・「貸い」(て)・「足い」(て)・「伏い」(て)など用いぬか。

『方言文法全国地図』：臨地面接調査。文法事象に関するこれまでの研究に地理的視野を与えることを目的として作製されたもの。

92 出した(過去形)

質問文：「きのう手紙を出した」と言うときの「出した」のところは、地方によって、ダシタ・ダイタなど、いろいろの言い方をします。この土地ではどのように言いますか。



図1 サ行イ音便と「カヤス」の分布

6.2. サ行イ音便と「カヤス」の分布

図1からは、「カヤス」が存在する地点は、殆どがサ行イ音便を持つ地域であることが分かる。これはサ行イ音便が「カヤス」の成立に影響を与えていることを示唆するものである。さらに、関東・近畿南部・山陰などを見ると、「カヤス」の分布よりもサ行イ音便の分布の方が周辺的であることも分かる。サ行イ音便の範囲の方が広く、その中に「カヤス」の地点が存在することから、この地理的分布を通時的に考えてみると、まずイ音便の現象が語形によって中央から地方へと伝播し、その後イ音便を追いかけて「カヤス」が伝播したのではないかと考えられる。このことは(1)に示した「かえいた」>「かやいた」の変遷を推定できるものである。黒で塗った範囲はサ行イ音便を持つ地域を示しているが、これ

は中央と同様に e-i の連続が嫌われ、「かえいた」となることが抑制された地域であるとも言える。だからこそ音便形が可能な「カヤス」を受け入れたのだろうと考えられる。

サ行イ音便を持っていない新潟県の一地点については、「カヤス」の語形のみが伝播したものではないかと考えられるが、「カヤス」がどんな分布をしているのか、辞典の記述だけではなく、なお細かく見ていく必要があると考えられる。

7. 富山県呉西地域における実態

7.1. 面接調査の概要

次に特定地域でその現象を詳しく見るため、富山県呉西地域での臨地面接調査を行った。富山県の方言区画は一般に呉東・呉西・五箇山と 3 つに分けられるが、今回の調査では呉西地域に五箇山(地点名は平・利賀)も含めている。現在、富山県内では新潟県に近い朝日・入善・宇奈月以外の全域においてサ行イ音便が残存している。富山県呉西地域で調査を行った理由は、筆者の出身地であり「カエス」のイ音便形と「カヤス」が存在することが分かっていたことと、富山県はサ行イ音便が残存する地域の東端であることからである。また、富山県呉東地域でのサ行イ音便の先行研究には小西(2001)があり、「カヤス」は音便化するが「カエス」は音便化しないと報告されているので、「カエス」のイ音便の東端は富山県呉西地域なのではないかと考えたからである。調査概要は以下の通り。

調査期間：2009 年 6 月

調査地点：富山県呉西地域(旧市町村)の 12 地点(図 2 を参照)

調査方法：『本を返した』の『返した』は普段どのように言いますか」と質問し、その後「かえした」「かえいた」「かえーた」「かいーた」「かやした」「かやいた」「かえた」「かいた」の語形を提示し、使用するか判断してもらう。「カエタ」の語形が可能という回答が得られた場合は、「換える」のようにタ形が同形になる語も使用するかを尋ね、使用するという場合は、区別はどう行っているかを尋ねる。

調査語：「返す」、複合語「一返す」45 語、「覆す」、「翻す」の 48 語

インフォーマント：生え抜き(外住歴なし)1 名ずつ、計 12 名。この調査のインフォーマントの出身地・生年・性別(M:男性 F:女性)を以下に挙げる。

氷見市 1931M/ 高岡市 1931M/福岡町 1940M/新湊市 1931 生 M/大門町 1931M/砺波市 1919F/小矢部市 1938 生 M/井波市 1917F/城端町 1934F/福光町 1935F/平村 1930F/利賀村 1939F

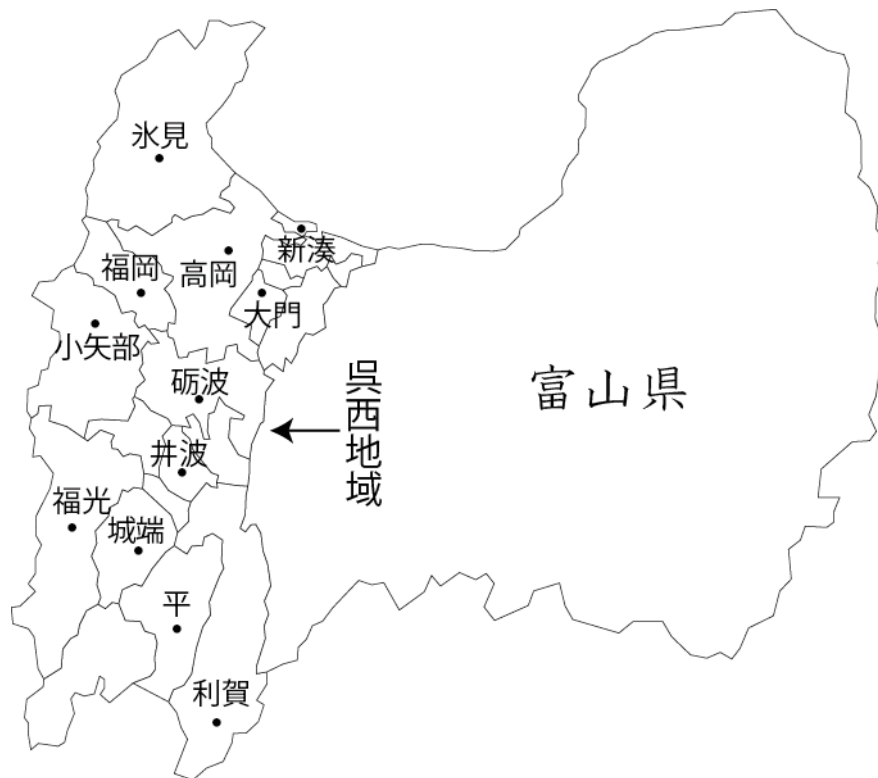


図2 富山県呉西調査地点

7.2. 富山県呉西地域における「カエス」と「カヤス」

調査の結果、この地域では「カエス」「カヤス」共に存在するが、「カヤス」が優勢なようである。それぞれの音便形を用いる数は、次の表3のようになる。

表3 「カヤス」調査結果

語 \ 地点	氷見	高岡	福岡	新湊	大門	砺波	小矢部	井波	福光	城端	平	利賀
かえいた	5	8	2	3	23	0	0	0	0	0	0	0
かえた	42	33	11	9	30	32	1	1	4	3	0	5
かやいた	46	39	44	36	42	42	47	43	39	40	48	47

表3で「かやいた」と「かえいた」の数を比べてみると、この地域で多く現れるのは「かやいた」であり、「かえいた」も存在するが殆ど現れないことが分かる。これはこの地域でも中央のように「かえいた」と e-i が連続するのを嫌って、「かやいた」が盛んになったことを示すものであろう。このことから、上記(1)(2)の点を推定できる。

ところで、この e-i の連続を嫌う現象はもう一つ、この地域独自の形を生み出すことに繋がった。すなわち「かえた」という語形の発生である。この「かえた」という語形はどの

ようなものなのか。音便形からの変化であると仮定すると、予想される変化は以下の 2 通りである。

- (1) /kaeita/ → /kae:ta/ → /kaeta/
- (2) /kajaita/ → /kae:ta/ → /kaeta/

(1)は「かえした」がイ音便化して「かえいた」となり、ei が e 列長音化して「かえーた」となり、さらに富山方言はシラビーム方言であるので、長音が脱落して「かえた」となったものである。(2)は「かやした」がイ音便化して「かやいた」となり、ai が e 列長音化し、長音が脱落して「かえた」になったものである。しかし、富山方言では ai の連母音融合は起こらないので、(2)の可能性は低く、(1)の変化を起こしたのではないかと考えられる。

この地域の特徴として、真田(1998)が「撥音・促音・長音などの部分が、標準語の音声に比べて短く詰まって聞こえる。しかし、その長さは東北部の場合のような短さではない。これらの音は独立してアクセントの山を担うことがないので、いわゆるシラビームの方言と言えるであろう。」と述べているように、完全なシラビーム方言ではなく、シラビーム的方言であることが挙げられる。そのシラビーム的であるという音声的な事情を背景として、e-i の連続を回避しようとして積極的に「かえた」という語形を作り出したのではないかと考えられる。



図3 かえいた



図4 かえた

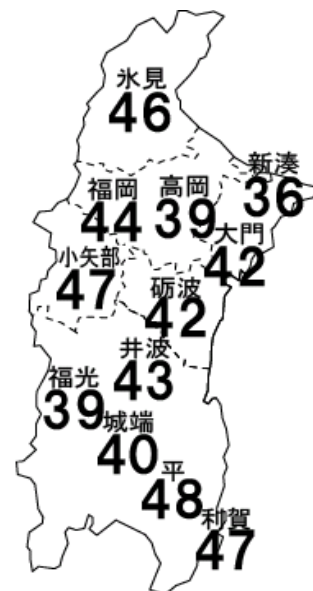


図5 かやいた

上の図3・4・5は表2の数を地点に置いたものである。この地理的分布と中央語文献での傾向を対比させると、次のようなことが考えられる。

すなわち、「かえいた」という「カエス」のサ行イ音便が中央からこの地域に伝播してきたと考えられるが、その「かえいた」という語は元々中央でも e-i が嫌われて、あまり広が

りを持たない語であった。それを反映してこの地域においても「かえいた」を受け入れたものの、海側の北部に留まった。その後「かえいた」の音便形の不都合を解消するために、先述のように「かえた」という語がその「かえいた」を持っていた北部で作り出され、南下を始めた。そのうちに今度は中央から「かやいた」という、e-i の形を避けた別語形が伝播し、一気に南部まで広まった。つまり、この地域では「かえいた」>「かえた」>「かやいた」の順で語形が広まったという推定ができるのである。

7.3. 「かえた」と「換える」などのタ形との区別

「かえた」という語形が現れた場合、問題となるのが「換える」などのタ形との区別である。インフォーマントの内省を尋ねたところ、その区別の仕方には以下の3つがある。

- (i) 同じ語形だが特に困る事はない
- (ii) 別の語に置き換える
- (iii) 「換える」の方言形「カワス」を使用するので同じ語形にはならない

一番多かったのは、(i)であった。例えば「取り返す」の音便形「トリカエタ」と、「AとBを取り換えた」等である。この「トリカエタ」と「取り換えた」は共にエにアクセントがあり、違いはないが、用いる文脈が違うので困らないようである。

(ii)は、例えば「言い返す」の音便形「イイカエタ」と、「AとBを言い換えた」では、「言い換える」を使用せず、「イイナオス」と言う。

(iii)は、例えば「切り返す」の音便形「キリカエタ」と、「AとBを切り換えた」では、「切り換えた」の方は「(キリ)カワイタ」と、方言形「カワス」を使用するので同じ語形にならないということだった。

ただ、大門で「笑い返す」の音便形「ワライカエタ」は、「笑い変えた」の意味になってしまうという回答があったので、同じ語形でも困る事はないという語は多いが、区別できなくなる場合もあるようである。

8. 中央語文献における「かえた」語形の存在

さて、文献調査を行った5節では、「カエス」と「カヤス」の調査のみを行った。次の6節で行った富山県呉西地域での調査では新たに「かえた」という語形が現れた。7節では「かえた」という語形はこの地域独自の形であると述べたが、その後改めて文献調査で使った索引を用いて中央語文献を精査してみると、「カヘタ」と表記しているものが宮内庁書陵

部蔵本『毛詩抄』（『抄物資料集成』第6巻に収録）の影印で3例見られた。全て「打チカヘタ」という形の複合動詞であり、『抄物資料集成』の自立語の索引である索引編には「打ち返す」でまとめられている。なお、この3例は、5節の文献調査では索引に従って、表2では「かえい」の数に含めている。すなわち、実際は『毛詩抄』（1539年成立）の「かえい」10例のうち、3例は「カヘタ」なのである。問題となる「カヘタ」がある箇所を掲載しておく。

笑ト云句ニ打カヘイテ見ルヲ
 鄭玄ハ惠アラハ來ルヘ
 レトヨムヲ笑ト云トミルヲ順ナ心カナイ程ニ州吁

二卷 12 ページ裏

事ヲ遊メテ申ノ反側ハカイサニ
 打カヘテ云事ヲ正
 事ヲ打カヘタハ正レウアイソ常ノニ打カロイタ
 やウ御座アル可然モナイト申テ候ヲ反側ハ

十二卷 44 ページ表

ウ罰ヒラフヤヲ知ヌソ註轉側ソアチヘ打カヘ
 コチヘ打カヘシ定ヲヌ人ソ

十五卷 10 ページ裏

亂テノクルソ其ヤウナ者ヲ用ニ程ニ徳ッ
 打カヘテ
 惡事ヲスルソ荒ハ致ニヲコタツク体ソ荒廢スルソ湛

十八卷 8 ページ表

静嘉堂文庫本を底本とした翻刻である『毛詩抄詩経』では、この箇所は全て「カヘイタ」

となっている。『抄物資料集成』索引編では、この3例を「打ち返す」の項に掲載しているが、*印を付けている。凡例を見ると、この*印は「音転などによる変化形が存する場合」に当てはまり、この索引の編者はこの「カヘタ」を「かえいた」の変化形と見ているようである。

線で囲ったのは「カヘタ」、傍線を引いたのは「カヘイタ」または「カヤイタ」である。「かえた」が3例もみられる以上、これは写し間違いや書き間違いとは考えにくい。この表記の揺れは、当時の口語でも揺れていたことの現れではないだろうか。「カヘイタ」のe-iが嫌われて、避けるために「カヤイタ」と「カヘタ」を作り出していたと考えられる。すなわち、富山県の調査で得られた「かえた」は、かなりくだけた口語であり、e-iの連続を避けた臨時的な語として、中央語や他の地域にも存在したものではないかと考えることができる。

9. おわりに

以上、本章ではサ行イ音便と「カヤス」の関係を探ることを目的とし、「カヤス」は「カエス」の音便が不都合であることを回避しようとして作り出した語である。」という仮説を立て、この仮説の検討を行った。そのために、以下の3点について確認した。

- (1)「かえいた」>「かやいた」という順番で現れる。
- (2)「かやいた」が現れると「かえいた」が衰退していく。
- (3)連用形のイ音便「かやいた」が終止形「かやす」等連用形以外の活用形より前に現れる。

その際、次の3つの方法を用いて検討を行った。

- a.中央語の状態を把握するため、中央語文献を資料とし、「カエス」から「カヤス」への通時的な変化を見る。
- b.全国方言の状態を把握するため、『口語法調査報告書』・『方言文法全国地図』と方言辞典を資料とし、全国的な分布を見る。
- c.特定地域でその現象を詳しく見るため、富山県呉西地域での臨地面接調査の結果を資料とし、「カエス」「カヤス」の振る舞いを見る。

その結果、次のことが分かった。

1. 仮説について、(3)は確認できなかったものの、(1)(2)は確認できたことから、「カヤス」は「カエス」のイ音便化を回避するために作り出され広まったと考えてよいと思われる。
2. e-iの連続を回避するために、中央では「カヤス」という語が作られた。富山県呉西地域でもそれを受け入れたが、それとは別に、「カエス」のイ音便形「かえいた」から短音化した「かえた」という語形を作るという独自の回避の方法もとられた。
3. 上記2の「かえた」「かやいた」は中央語にも存在するが、限られた抄物にしか出現しないことを鑑みると、かなり口語的なくだけた言い方であり、臨時的な語であったことが窺える。

以上のように、サ行イ音便という現象が影響を与え、語の形態的なあり方を変化させ、「カヤス」のような新語を成立させる可能性のあることが明らかとなった。このように、サ行イ音便が語彙に影響を与えることがあるということは、これまで言及されて来なかった。今のところ「カヤス」のような例は見つかっていないが、語彙の成立を考える際に、音便との影響関係を考えるという新しい視座を与えることができたと言えるであろう。

第9章 「咲く」の方言形「サス」の成立

1. はじめに

本章では、前章と同じくサ行イ音便が影響して成立したと考えられる特定の語に焦点を当て、形態論的な面から特徴を記述するとともに、その成立過程について考察する。具体的に本章では、「咲く」に対応する方言形「サス」を取り上げた。これまでの研究では、サ行イ音便のみが特異な現象として注目されてきたが、この現象に影響されて成立した語についての考察は管見の限りない。前章の「返す」の意の「カヤス」という事例は、サ行イ音便の影響を受けて語幹を変えた現象であったが、本章で取り上げる「咲く」の意の方言形「サス」は、サ行イ音便の影響を受けて別の活用を作り出す現象の事例として論じる。「カヤス」と「サス」は同じサ行イ音便が影響して成立した語ではあるものの、その成立過程は大きく異なる。

「サス」は西日本に存在する「咲く」の方言形である。この「サス」は坂梨(1990)において、「差す」のイ音便と混同することで生まれた現象であると指摘されている。しかし、「サス」についての詳細な検討は行われていない。そこで本章は、「サス」という語の地理的分布と地域の実態に即して、サ行イ音便との関係に注目し、「サス」の成立を明らかにすることを目的とする。

本章では、まず全国の「サス」の地理的分布を把握し、そこから「サス」の成立について考察する。次に、富山県呉西地域における「サス」からみた「サス」の実態を示し考察する。最後に、地理的分布と実態を踏まえて「サス」の成立過程を考察する。

「咲く」には同音意義の「裂く」も存在するが、地方において日常語ではないものと考えられ、また「裂く」が「サス」になるという先行研究や報告は存在しないため、今回は考察に含めない。なお、本章における片仮名表記「サス」は全て「咲く」の意味の方言形とする。また、連用形はテ形で代表させている。

2. 先行研究

「咲く」の方言形「サス」は、既にいくつかの先行研究で指摘されている。都築(1961)

は福岡県の音韻の項で、「筑後では東北人に聞く様な前進した k g の音を用いることが多い。随って筑後では花ガサス・サシタ・サシテと sʃ の音と混同して表記にまでする生徒が多い。」(p.149)と「サス」について言及している。それを受けて上村(1962)は、「随って筑後では花ガサス・サシタ・サシテと sʃ の音と混同して表記にまでする生徒が多い」とするのはいかなるものであろう。「咲く」をサスというのは、九州に広くきかれるところであって、音韻変化の問題とせず、形態変化として処理すべきものであろう。」(p.103)と述べている。

これについては筆者も、都築(1961)の言う音韻的な問題ではなく、上村(1962)が言うように形態的な問題であろうと考える。坂梨(1990)も、この上村(1962)のような「サス」が形態的な問題だとする立場であり、「日本方言大辞典」によれば、「さす」を「咲く」の意に用いる地方が、富山、福井、京都、愛媛、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島 of 諸地域に見られる。これは恐らく「咲い(て・た)」というカ行四段のイ音便を、サ行四段、例えば「差す」のイ音便と混同し、「咲く」を「咲す」というサ行四段動詞と認識してしまったためではないかと思われる。」(p.150)と、サ行イ音便との関係を指摘している。

筆者も「サス」については、この坂梨(1990)の考えを前提にすべきであろうと考える。しかし、坂梨(1990)はその成立を実際の方言に即して論じてはいないので、ここではその点をテーマにして詳しく検討してみたい。

3. 全国的な「サス」の分布

「サス」とサ行イ音便の関係を全国的な視点から検討するためには、「サス」が存在する地域の分布と、サ行イ音便が起こる地域の分布の関わりを確認することが必要である。そこで、「サス」が存在する地域の分布を示し、その分布をサ行イ音便が起こる地域の分布に重ねてみよう。まず、「サス」の全国的な分布を知るための資料は今のところ『日本方言大辞典』に限られるので、それを資料とする。次に、サ行イ音便については国語調査委員会(1906)『口語法調査報告書』の第十五条と国立国語研究所(1991)『方言文法全国地図 第2集』の92図「出した」を資料とする。この二つの資料を用いた理由は、サ行イ音便が起こる、またはかつて起こっていた地域の範囲を、より広く見るためである。

それらの資料から「サス」が存在する地域を◎で示し、サ行イ音便が見られる地域を黒く塗り潰して、図1の分布図を作成した。図1は市町村の境界線を表示したので区分が細かくなっているが、これはサ行イ音便の資料とした『口語法調査報告書』で報告の単位が県ごとに違うので、一番細かい市町村の単位に合わせて黒く塗り潰したからである。二重丸が「サス」が存在する地域であり、富山・福井京都の若狭湾周辺・愛媛・九州に点在している。

図1を俯瞰的に見ると、サ行イ音便は、東日本には殆ど見られないが、西日本は多くの

地域で見られる。また、「サス」は東日本には全く現れないが、西日本には現れている。このことから、「サス」とサ行イ音便には何かしら関係がありそうであると推定される。

さらに、西日本をより詳細に見ると、サ行イ音便が起こる地域（黒く塗りつぶした地域）と起こらない地域（塗りつぶしていない白い地域）があることがわかる。その中で「サス」はサ行イ音便が起こる地域に絡むように現れている。このことも、「サス」とサ行イ音便との積極的な関係を示唆するものであろう。

ではこのような分布状況から、「サス」という語はどのようにして成立したと解釈されるだろうか。そして、サ行イ音便とはどのような関係にあったと言えるだろうか。

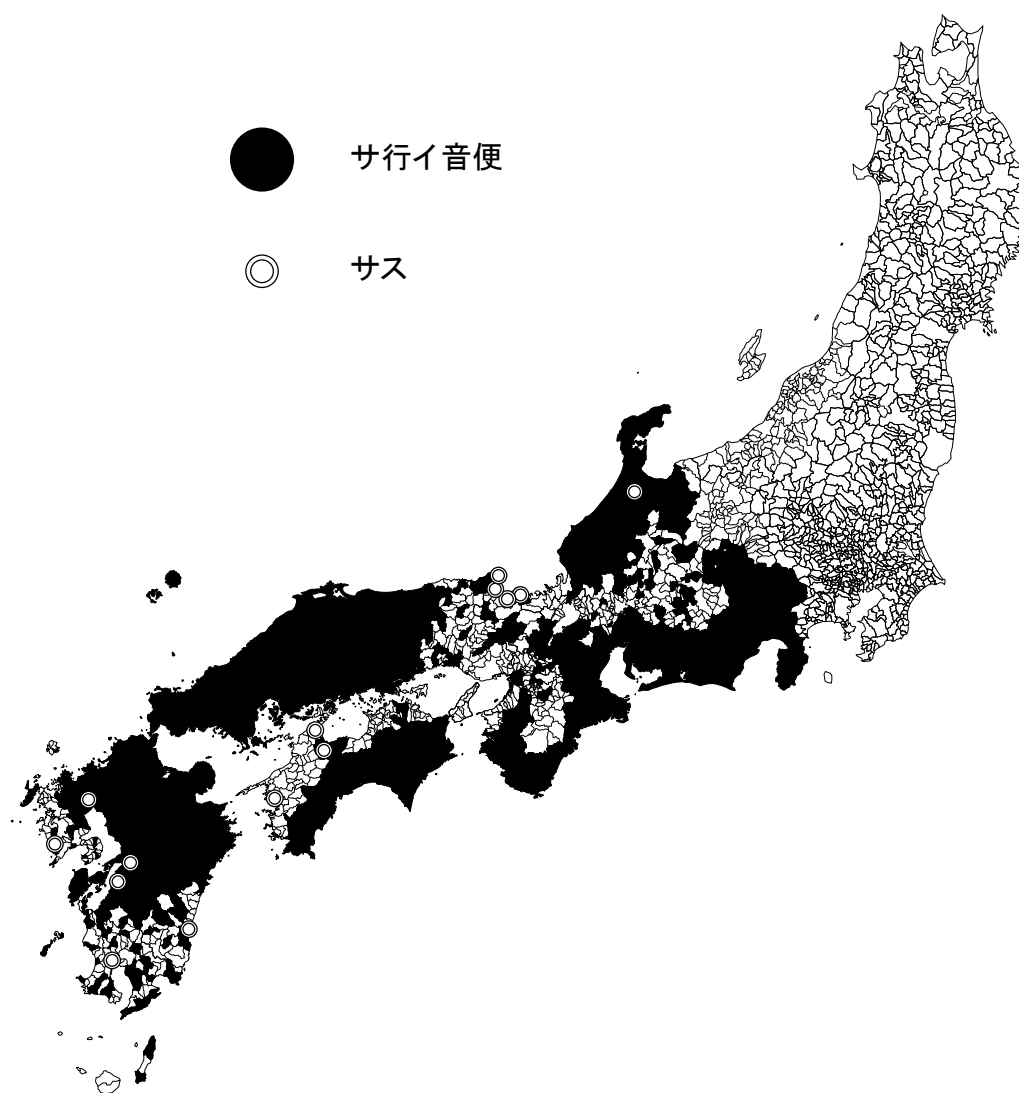


図1 サ行イ音便と「サス(咲く)」の分布

4. 「サス」の成立

4.1. 「サス」の成立過程

図 1 を踏まえて、「咲く」の方言形「サス」がどのように作られたのかを考えてみたい。「サス」の出現地域が、サ行イ音便の出現地域に絡むように現れていることから考えれば、坂梨(1990)のように、「サス」はサ行イ音便の影響を受けて、「咲く」が形態変化を起こしたものであるのが妥当ではないか。影響を受けたとは、サ行イ音便を契機として、本来カ行活用である「咲く」が「差す」と同じサ行活用になってしまったということである。

「サス」の出現地域はサ行イ音便に絡むように現れていると述べたが、さらに図 1 を詳細に見ると、サ行イ音便が現れる地域の外縁に現れている。これは、サ行イ音便が中央から伝播したその先端部分で、「サス」ということばが使用されているという地理的分布であるように見てとれる。そして図 1 で黒く塗りつぶした、サ行イ音便を持つ地域では、先端部分以外に殆ど「サス」は現れていない。これはサ行イ音便が伝播してきた地域で「サス」が一旦は使用されても、しばらくすると消滅したのだと推定される。「サス」は、非常に口語的であり、誤った形であるという意識を伴った可能性が高く、規範意識が働いて元のカ行活用に押し戻されたからであろう。

以上をまとめると、サ行イ音便が存在する地域の「サス」の成立過程は次のように解釈される。①中央でカ行四段動詞「咲く」の連用形が「咲いて」と音便化を起こす現象が生じた。②続いて中央でサ行四段動詞の「差す」の連用形が「差いて」と音便化を起こす現象が生じた。③「咲く」はカ行四段活用であったが、連用形が「咲いて」という形であり、それが新しく生まれた「差す」の連用形「差いて」と同じ形であることから、「差いて」に引きつけられることでサ行活用を開始し「サス」が発生した。この「サス」はサ行イ音便の伝播の後を追いかけるように地方へと伝播していった。④しかし中央語文献に「サス」という形の用例が管見の限り全く見られないということからすれば、「サス」は発生したとはいえ、そもそも完全に一語として成立したものではなく、活用が揃っていない不安定なものであったという可能性が高い。そのことを考慮すると、「サス」は中央での発生当初から、非常に不安定で口語的・非規範的という意識が強かったのであろう。それらが原因となって、伝播した先の地域でも定着することなく、しばらくすると元の規範的なカ行活用に引き戻されたと考えられる。

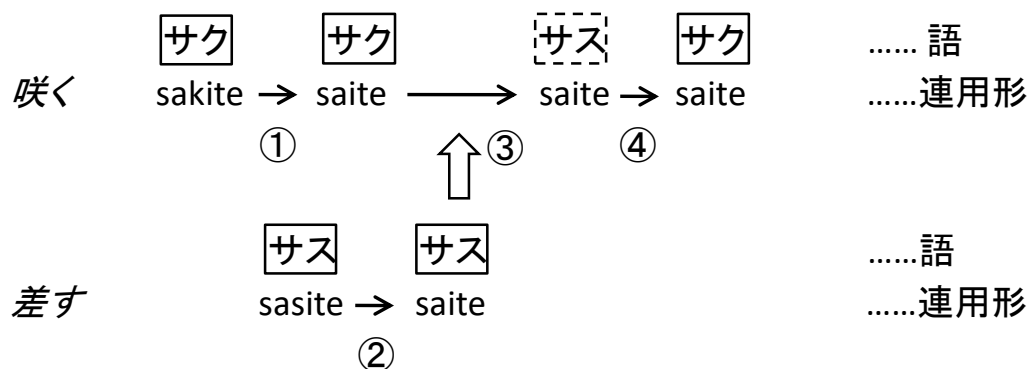


図2 「サス」の成立過程

4.2. 現在「サス」が見られる地域

以上からすると、現在「サス」が見られる地域というのは、「サス」が中央から伝播して行ったその最新の到達点を示していることになる。しかし、「サス」の使用地域は、単に伝播の先端という捉え方でよいか、さらに、積極的な意味はないか考えてみる必要があるだろう。

この「咲く」がサ行活用になるのは、連用形の音便形を契機として、本来活用の行を異にしているものが、一つにまとまってしまうという現象であり、言語の変化としては、合理化・経済化の変化であると言ってよいだろう。このような現象は、一般に日本の周辺部において、中央的な規範力の緩みが一つの原因となって起こると言われており、「サス」が周辺部に現れている現象も、同様に説明できるのではないかと考えられる。すなわち、「サス」が周辺部にある理由として、中央的な規範力の緩みが挙げられるのではないだろうか。中央的な規範力の緩みによって、中央では活用の揃わない不安定なものであったのを、より積極的に語として成立させようという力が働き、その結果現在見るような「サス」の地理的分布が出現していると推定される。ただし、そうなると「サス」の分布は多元的発生によるものではないかという疑いが浮上してくることになる。しかし、これだけ多くの地域に同じ「サス」が見られるということは、多元的な同時発生で説明をすることは無理があるのではないか。やはり上述のように中央から伝播したものが、各地で補強されたと考える方が妥当性が高いように思われる。

しかし、なお考えるべき点はある。それは、同じように日本の周辺部であっても、「サス」が存在しない地域もあるという点である。すなわち、「サス」が存在する地域は限られているのであり、これは、特にその地域で何らかの条件が働いて、現在でも「サス」という語が使用されているのであらうと考えられる。

では、現在「サス」が見られる地域の、地域的な条件とは何なのだろうか。ここで、「サス」が見られる、図1の◎の地域の、動詞のアクセントに注目してみよう。2音節動詞にお

いて、「咲く」が所属するアクセント類別上第一類と、「差す」が所属するアクセント類別上第二類が同じ型に統合されている地域を斜線で示したのが図3である。これらの地域は第一類と第二類でアクセントが同じか、ないしは無型アクセントの地域である。図1と図3を比較してみると、「サス」がある地域は図3の斜線の地域とほぼ重なる。「咲く」は「差す」と連用形「さいて」が同じ形であることに引きつけられてサ行活用の「サス」を生み出したが、図3の斜線の地域では、アクセントも含めて同形になる。これは「さいて」という形は同じだがアクセントが異なる中央よりも、より「咲く」がサ行活用に引きつけられやすい環境が整っていることになる。不安定なまま伝播してきた「サス」が、これらの地域ではアクセントも含めて同じであるため、それを背景にサ行の活用形態を揃えていったと考えられる。

このように、現在「サス」が見られる地域は、周辺部であり中央的な規範が緩みやすい地域であることと、2音節動詞においてアクセントの区別がなく「サス」が受け入れられやすかったという条件があることがわかる。



図3 2音節動詞でアクセントの区別がない地域

4.3. 「咲く」と「差す」

坂梨(1990)では「サス」の発生については明言しておらず、管見の限り文献資料にも「サス」は見られない。しかし筆者は「サス」が上述のように中央において、不完全な形では

あるが発生し、地方へと伝播したものであると考える。

では中央で「サス」が生まれた要因は何なのだろうか。それにはサ行イ音便の影響があったと考えられるが、「咲く」以外のカ行四段動詞もサ行イ音便の影響を受け、「サス」のような語を作り出したのかということ、そうではない。そのことを考える前提としてまず、カ行四段動詞に影響を与える可能性のあるサ行四段動詞について見てみよう。中央語において、2 モーラのサ行四段動詞の中でアクセント類別上第一類の語は音便化しないことが分かっている(橋本 1962、奥村 1990 などによる)。以下の表 1 で音便化するサ行動詞と音便化しないサ行動詞に分類した。

表 1 の音便化しない動詞は、サ行動詞がイ音便にならないので、「サス」のような語を作ることもない。音便化する動詞に対応するカ行動詞は、それぞれ「扱く」「咲く」「抱く」「泣く」「吹く」「剥く」がある。しかし、実際にサ行に活用する「サス」のような語を作り出したのは、「咲く」のみである。ではなぜ「咲く」だけが「サス」という語を作り出したのだろうか。

表 1 中央語における 2 モーラ動詞のサ行イ音便

音便化する動詞	越す	差す	出す	為す	伏す	生す
音便化しない動詞	押す	貸す	消す	増す	召す	

それは「咲く」に影響を与えたサ行動詞「差す」が、他のサ行動詞とは異なる性質を持つものであることに起因すると考えられる。奥村(1990)が

京阪語史におけるサ行イ音便は、〈室町末期～元禄期の間に、甚しく減少し、宝暦期頃には既に、ほぼ現代語と同様、サス等の化石形を除いて、殆ど衰退していた〉と言うべきであろうか。(p.721)

と述べているように、「差す」は中央語文献において他のサ行動詞より長くイ音便形「差いた」のままで用いられた。既にサ行イ音便が衰退していた時期の文献とされる近松浄瑠璃でも「差いて」が頻出し(奥村 1990、坂梨 1990 などによる)、絵入り狂言本では「差す」のみがイ音便形で現れる(山県 1987 などによる)。つまりイ音便が衰退してもなお、「差す」だけは「差いて」の形で用いられることが多かったのである。この「差いて」というイ音便形が長く用いられていたことから、中央では「差す」のサ行イ音便は他のサ行五段動詞より影響力を持っていたという解釈ができる。

また方言の中でも、奥村(1990)が

現代京阪語をはじめ近畿(淡路や若狭も含めて)中央部や四国等の大部分に、その残存が認められないからである。(中略)いろいろな形態素的特徴において京都の古形を示す口丹後・奥丹波地方でも、僅かな化石的現象指イタ形以外、サ行

イ音便は稀である。(p.712)

と述べているように、サ行イ音便が衰退している近畿の中心部で、「差す（上記先行研究では「指イタ」）」の一語だけがイ音便化するという現象が見られる。このことから、中央語だけではなく、方言においても「差す」のサ行イ音便は他のサ行五段動詞より影響力を持っていたという解釈ができる。それほど「差す」のサ行イ音便の力は強かったのであり、カ行活用で同じ語形の音便形「サイタ」を備えていた「咲く」も巻き込んで、同じサ行活用にしてしまう力を持っていたということが考えられる。「さいて」＝「さす」というように、＜「さいて」という音便形の原形は「さす」というサ行四段動詞である＞という考えを起こしやすい環境にあったことが、サ行イ音便を起こす動詞と対応するカ行動詞の中で「咲く」のみが「サス」という語を作り出した原因と考えられる。

5. 富山県呉西地域における「サス」

5.1. 調査概要と結果

さてここまでは全国的な「サス」の展開について見てきたが、現在「サス」が見られる地域において、実際に上述の推定のような動態を示しているかを確認するために、特定の地域について詳細に観察してみることにする。ここで対象とするのは、富山県呉西地域である。全国的に見て、富山県はサ行イ音便が存在する東端に当たる。さらに呉西地域には「サス」という語が存在するということが、『日本方言大辞典』の記述などによって明らかであったため、この地域を調査地点とした。調査概要は以下の通りである。

調査期間：2009 年 6 月

調査地点：富山県呉西地域(旧市町村)の 12 地点(図 4 を参照)

調査項目：大西拓一郎編(2002)の動詞の活用一覧表を参考にした「咲く」の活用

調査方法：「咲く」の例文を提示する翻訳式で行い、方言形にあたるサ行活用形式の有無を確認した。

インフォーマント：生え抜き(外住歴なし)1 名ずつ、計 12 名。この調査のインフォーマントの出身地・生年・性別(M:男性 F:女性)を以下に挙げる。

氷見市 1931M/ 高岡市 1931M/福岡町 1940M/新湊市 1931 生 M/大門町 1931M/砺波市 1919F/小矢部市 1938 生 M/井波市 1917F/城端町 1934F/福光町 1935F/平村 1930F/利賀村 1939F

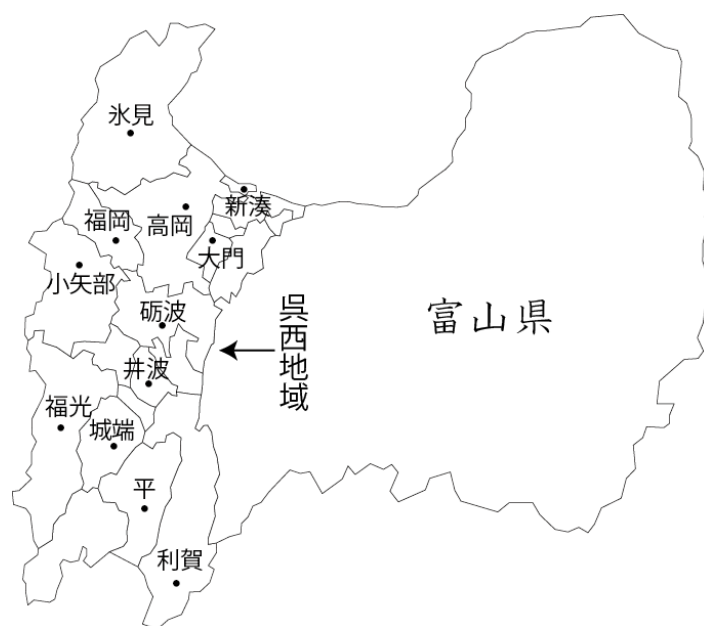


図4 富山県呉西調査地点

表2 「サス (咲く)」の活用 調査結果

カテゴリー	地点	「差す」	氷見	高岡	福岡	新湊	大門	砺波	小矢部	井波	福光	城端	平	利賀
N(否定)		sa	ka	sa	ka	sa	sa	sa	sa	ka	ka	ka	ka	ka
seru(使役)		sa	ka	ka	ka	ka	sa	sa	sa	ka	ka	ka	ka	ka
masu(丁寧)		si	si	ki	ki		si	si	si	ki	ki	ki	ki	ki
hajimeru(開始)		si	ki	ki	ki	ki	ki	si	si	ki	ki	ki	ki	ki
soRja(将然)		si	ki	ki	ki	ki	si	si	si	ki	ki	ki	ki	ki
ta(過去)		i	i	si	i	i	si	i	si	i	i	i	i	i
toru(進行)		i	i	i	i	i	i	i	si	i	i	i	i	i
tesimau(完了)		i	i	i	i	i	i	si	si	i	i	i	i	i
tajaro(過去推量)		i	i	i	i	i	i	i	i	i	i	i	i	i
言い切り		su	ku	ku	su	ku	su	ku	su	ku	ku	ku	ku	ku
toki(連体)		su	ku	ku	ku		ku	su	su	ku	ku	ku	ku	ku
jaro(推量1)		su	ku	ku	ku	su	su	su	ku	ku	ku	ku	ku	ku
kamosireN(推量2)		su	ku	ku	su	ku	ku	su	ku	ku	ku	ku	ku	ku
rasii(推定)		su	ku	ku	su	ku	ku	su	su	ku	ku	ku	ku	ku
joRja(様態)		su	ku	ku	su	ku	su	su	su	ku	ku	ku	ku	ku
kara(理由1)		su	ku	ku	su	ku	ku	su	su	ku	ku	ku	ku	ku
gade(理由2)		su	ku	ku	su	ku	ku	su	su	ku	ku	ku	ku	ku
gani(対比)		su	ku	ku	su	ku	ku	su	su	ku	ku	ku	ku	ku
ke(疑問)		su	ku	ku	ku		ku	su	ku	ku	ku	ku	ku	ku
jo(強調)		su	ku	ku	su	ku	ku	su	ku	ku	ku	ku	ku	ku
naR(詠嘆)		su	ku	ku	su	ku	su	su	ku	ku	ku	ku	ku	ku
gaja(準体助詞接続)		su	ku	ku	su	ku	su	su	su	ku	ku	ku	ku	ku
keredomo(逆接)		su	ku	ku	su	ku	ku	su	su	ku	ku	ku	ku	ku
ba(仮定)		se	ke	ke	ke	ke	se		se	ke	ke	ke	ke	ke

調査を行った結果が表2である。表2の太い枠で囲ってあるものが、「サス」のようなサ行活用の形が回答されたところである。サ行活用が回答された殆どの地点で、共通語である「サク」のようなカ行活用と併用するということだったが、サ行活用・カ行活用の両方が回答されたところは、サ行活用のみを表に挙げている。空白のマスは、回答が得られなかったところである。地点は、表2の左から右へ、北から南の順に並ぶようにした。

5.2. 富山県呉西地域における「サス」の動態

調査の結果、この地域では図5のように、大きく山間部（井波・福光・城端・平・利賀）と平野部（氷見・高岡・福岡・新湊・大門・砺波・小矢部）に分かれることが分かった（旧市町村レベルの調査であるため、その境界に線を引いた）。山間部では、「咲く」は全てカ行活用で現れ、サ行活用は現れなかった。一方平野部では、活用形によってサ行活用・カ行活用が現れた。この山間部と平野部での違いは、山間部は歴史的に古くカ行活用を保持しているのに対して、平野部は本来カ行活用をしていたところに、サ行活用が新たに広まってきたということを示しているのではないか。

この地域は一般的に、平野部は新しい語を受け入れやすく、山間部は古い語を残しやすい傾向にある。そうした一般的な傾向から考えても、山間部でサ行活用が現れず、平野部の地域にサ行活用が現れるということは、やはり「サス」が新しい現象であると言えるであろう。しかし、表2を見ると平野部を中心に「サス」が新しく入ってきているものの、一つの地点で完全にサ行活用が揃ってしまうわけではない。また、平野部でも氷見・高岡・新湊のように数語のみサ行活用になる地点や、福岡・大門・砺波・小矢部のように殆どのカテゴリでサ行活用になる地点もあり、混乱状態であるようである。地点によってどのカテゴリがサ行になるかにも明確な傾向はなく、サ行活用とカ行活用が混在している状況を考えると、「サス」は完全には成立しきっていないということがわかる。

さて今回の調査では、サ行四段動詞の「差す」の音便形は、全ての地域で「サイタ」と回答された。富山県は、呉東の一部を除いてサ行イ音便が完全に定着している地域である。「サス」が現れる地域はサ行イ音便が定着している地域の一部である。これは第4節で述べたように、サ行イ音便が定着し、そのあとで「サス」が発生したという中央における歴史的順序を反映している状態であると解釈できるだろう。

さらに表2を詳細に見てみると、サ行活用の形式の現れ方により、図5に示した平野部の中を、図6のように沿岸部と中間部に二分することができそうである。最もサ行活用の形式が出現するのは、中間部（福岡・大門・砺波・小矢部）であり、それに対して沿岸部（氷見・高岡・新湊）ではサ行活用の形式の出現が少なくなっている。この沿岸部の状態は、規範意識が働いて「咲く」がサ行活用をやめカ行活用に戻るという状態に向かいつつあることを示しているのであって、これも第4節で述べたように、サ行活用がカ行活用に戻っていく状態を実際に示しているのである。

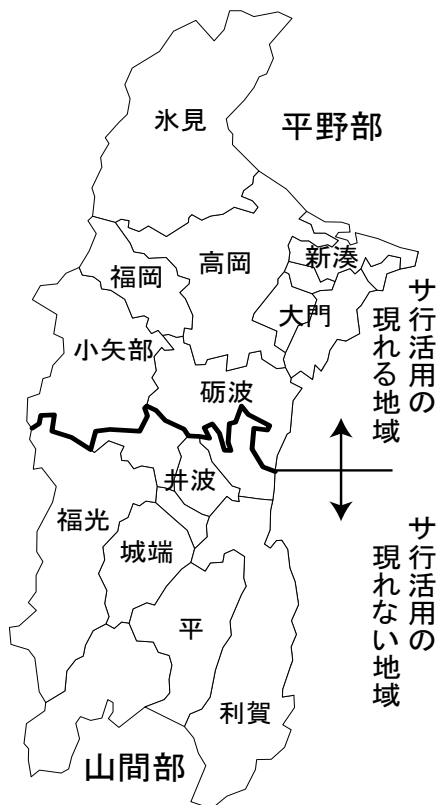


図 5 平野部と山間部

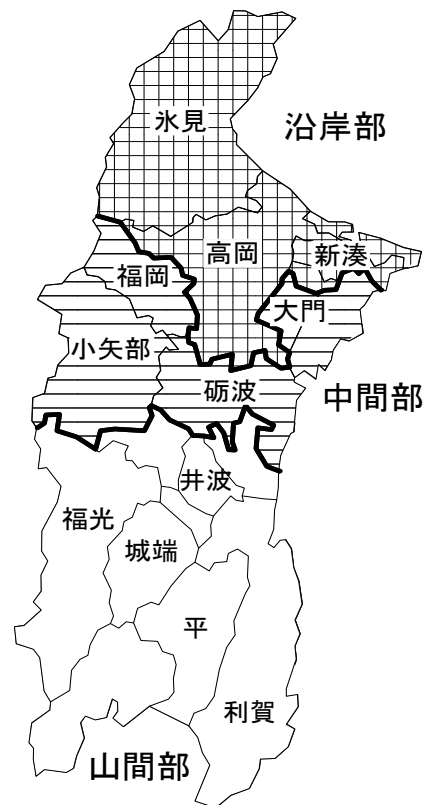
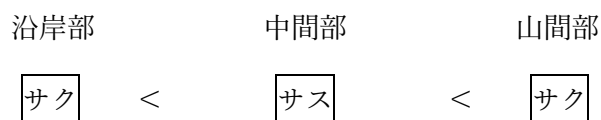


図 6 沿岸部と中間部

このように富山県呉西地域では、「サス」が伝播しこの地域に入ってきた過程も、消滅していく過程も、第 4 節で述べた全国の地理的分布から推定した「サス」の成立過程と一致しているのである。

ここで改めて山間部・平野部を合わせて、呉西地域での「サス」の動態について整理してみよう。まず山間部の力行活用は、沿岸部の力行活用とは事情が異なり、まだサ行活用が及んでいない状態を示している。中間部は上述の通り、サ行活用が活発であり、今まさに「サス」が定着しそうな状態ではあるが、完璧にはサ行活用が揃っていない状況にあり、一時的な現象であることを示している。そして沿岸部はサ行活用・力行活用の混乱状態を脱した収束状態を示す地域なのである。時間が経つと、中間部はやがて沿岸部と同じように力行活用に戻るものと考えられる。

これらの変遷は、以下のように表すことができる。



6. おわりに

以上のことから「サス」は、「差す」がサ行イ音便化することにより、「咲く」が引かれて成立したものであり、連用形「さいて」が同形であることを契機に他の活用形にもサ行の形態が及び、一時的に成立した語であることが明らかになった。成立と言っても完全に成立したわけではなく、「サス」はサ行イ音便を持つ殆どの地域では消滅し、特定の条件が揃った地域で今も見られる一時的な語であると言える。

一般的には、動詞がその活用を行を変えてしまうという変化はあまり見られない。しかし、今回取り上げた「サス（咲く）」の事例のように、音便形を介し、かつ、個別の地理的環境が影響することで、それが実現することが観察された。

第10章 本論文のまとめ

1. はじめに

本章では、これまで各章で述べてきたことを振り返り、本研究の成果を整理した上で、あらためて本研究の意義を示す。また、本研究を通して新たに見えてきた問題点や課題についても述べる。

2. 各章のまとめ

2.1. 第1章「研究の背景と目的」

第1章では、本論文の導入として、サ行イ音便について述べ、それをふまえて、本論文の目的や方法を提示した。本論文の主たる目的を、以下のように設定した。

〈サ行イ音便の、日本全国での分布形成過程を推定するとともに、サ行イ音便の影響で成立した語の成立過程を明らかにすることで、従来主として中央語文献を資料として研究されてきたサ行イ音便を、方言学の視点から新たに捉え直し、方言上、どのような現象として現れるのかを明らかにする。〉

具体的な目的としては、以下の3つが挙げられる。

目的(1)動詞の音便現象全体の地理的・歴史的分布形成を推定する。

目的(2)従来のサ行イ音便の中央語史に検討を加え、各地での記述的調査を行い、それを対照させてサ行イ音便の分布形成過程を示す。

目的(3) サ行イ音便の影響を受けたと考えられる語の成立過程を考察し、音便史と語彙史の交渉について考察する。

この目的のために用いる方法や、本研究が持つ意義についても述べた。

2.2. 第2章「サ行イ音便はどう取り上げられてきたか」

第2章では、これまでのサ行イ音便研究において、サ行イ音便がどのように取り上げら

れてきたかを概観した。中央語文献・方言・その他の分野で数多くの研究がなされており、特に中央語文献上のサ行イ音便については、橋本(1962)の中央語文献を資料としたまとめた論考をはじめとし、それを受けて他の文献や方言も考慮した奥村(1968)、それらをまとめサ行イ音便が共通語で消失した理由について考えた柳田(1993)等の主たる研究で区切りがついたと考えられている。それ以降、小西(2001)など方言での優れた研究はあるものの、研究が盛んに行われているテーマではなく、停滞している状態であると言える。また、サ行イ音便の消失ばかりが注目されており、以下に挙げるように、いくつかの点において十分でないといえる。

【中央語文献について】

- ・動詞の音便現象の中で、サ行イ音便はどのような位置づけなのかが明らかでない。
- ・中央語でサ行イ音便が消失した点に主眼が置かれ、それ以外のサ行イ音便に関する記述が少ない。
- ・方言と関連しそうであるという研究は多くあるものの、その検証が行われていない。

【方言について】

- ・話者が高年層にとどまり、年代差への視点が無い。
- ・記述は中部地方に多く、その他残存する地域の記述が少ない。

また、サ行動詞において音便化しない語群については、4つにまとめ、本章以降「中央語規則」と呼び基準とすること、その中央語規則にも時代別の段階があったことを述べた。

2.3. 第3章「動詞の音便の地理的・歴史的分布」

第3章では、中央語と方言に現れる動詞の音便の関係を明らかにするため、動詞の音便を横断的に扱い、音便化しないことも含めた音便現象の地理的・歴史的分布の形成について考察を行った。すなわち、動詞の音便を扱った地図や中央語文献の先行研究を用い、それらを俯瞰的に総合することで、大まかに方言と中央語に現れる音便の関係を捉えることを目的とした。その結果、GAJによる音便の地理的分布と、先行研究による中央語における変遷から、

- (1)音便は西日本だけで言えば、周圈的な分布で現れる。
- (2)音便の地理的分布は、中央語の歴史的変遷と対応している。
- (3)音便・非音便は中央からの伝播によって起こる現象である。
- (4)自律的变化によって音便・非音便が起こることもある。

ことが明らかになった。

2.4. 第4章「富山県におけるサ行イ音便」

第4章では、富山県内全域の調査により、富山県で現在使用されているサ行イ音便の実

態を明らかにすることを目的とした。

最初に行った富山県高岡市調査は、富山県全域調査でのインフォーマントの年代・性別を固定するために行った。結果、男女差はないが、年代差については、50 歳代を境に若年層(10・20 歳代)・壮年層(30・40 歳代)と老年層(60 歳代以上)に開きがあることが分かり、この結果を承けて富山県全域調査では、サ行イ音便を用いる年代としてインフォーマントを 60 歳代以上に固定することにした。

富山県全域調査は、富山県高岡市調査で得られた結果からインフォーマントを 60 歳代以上で固定し、富山県内での地域差と、各地点でのイ音便化する語・しない語の実態を明らかにした。その結果、海側の地域はイ音便化する傾向が強く、次いで平野部、そして山側の地域はイ音便化する傾向が弱いという地域差が見られた。これは調査現場での話者の反応も踏まえた地域差である。

イ音便化しない語については、中央語規則のうち「①2 音節動詞のうちアクセント第一類の語」・「④語幹末母音が e である語」は富山方言においても残存していることが分かり、「②いわゆる使役性他動詞」はやや残存している傾向のようなものが見られる。「③語幹末が長音である語」は富山方言においては当てはまらず、イ音便化することが分かった。

2.5. 第 5 章「鹿児島県におけるサ行イ音便」

第 5 章では、鹿児島県南部において、サ行五段動詞の音便・非音便を調査し、その結果を元に鹿児島県南部におけるサ行イ音便の実態について考察した。次の点を明らかにすることができた。

- (1)鹿児島県南部では、かつては中央語規則が存在したようではあるものの、現在は中央語規則に従う地点と従わない地点がある。
- (2)中央語規則に従わない地点の中でも、全て音便化する地点と全て音便化しない地点、その途中のような地点があり、中央語規則に従わない地点と言っても、その内実は地点によって異なる。

2.6. 第 6 章「高知県におけるサ行イ音便」

第 6 章では、高知県において、サ行五段動詞の音便・非音便を調査し、その結果を元に高知県におけるサ行イ音便の実態とその成立について考察した。結果、次の点が明らかになった。

- (1)高知県では、僅かに中央語規則①③④の存在が認められるものの、全体としてほぼ崩壊している状態であると言ってよい。
- (2)鹿児島県南部のように崩壊のパターンが複数ある状態ではなく、高知県は全地点においてほぼ全て音便化するというパターンの崩壊状態であり、同じ崩壊状態と言っ

ても内実は異なる。

- (3)動詞の音便よりもより上位概念の音声現象が、サ行イ音便という動詞の一形態の、地域独自の有り方に影響を与えることがある。

2.7. 第7章「サ行イ音便における中央語規則の地理的対応」

第7章では、まずGAJを用い中央語規則①がどのように全国に分布するのかを、地図を作成して見た。その地図を元に仮説を立てたが、今回の記述調査の地点では、全てのグループを検証することはできなかった。そこで第4章から第6章までの記述調査の結果を横断的に比較し、上掲の中央語規則が地理的にどう反映されているのかを考察した。結果、以下の2点が明らかになった。

- (1)Bグループである富山県の結果と鹿児島県・高知県の結果を比較すると、富山県は全域で中央語規則に比較的従っている。Bグループに含まれる地域では、中央語を保存しているため、中央語規則を守っている地点が多いのではないかと予想される。
- (2)Cグループである鹿児島県・高知県では、比較的中央語規則に従わない。その従わない内実も異なっており、高知県では規則に関係なくすべての語が音便形となってしまう崩壊の仕方をしているのに対して、鹿児島県では、比較的従っている地点も一部あり、また全て非音便形となる地点、高知県のように全て音便形となる地点と、地点によって様々な崩壊の仕方をしている。

2.8. 第8章「「返す」のサ行イ音便と「カヤス」の成立」

第8章ではサ行イ音便と「カヤス」の関係を探ることを目的とし、「「カヤス」は「カエス」の音便が不都合であることを回避しようとして作り出した語である。」という仮説を立て、この仮説の検討を行った。そのために、以下の3点について確認した。

- (1)「かえいた」>「かやいた」という順番で現れる。
- (2)「かやいた」が現れると「かえいた」が衰退していく。
- (3)連用形のイ音便「かやいた」が終止形「かやす」等連用形以外の活用形より前に現れる。

その際、次の3つの方法を用いて検討を行った。

- a.中央語の状態を把握するため、中央語文献を資料とし、「カエス」から「カヤス」への通時的な変化を見る。
- b.全国方言の状態を把握するため、『口語法調査報告書』・『方言文法全国地図』と方言辞典を資料とし、全国的な分布を見る。
- c.特定地域でその現象を詳しく見るため、富山県呉西地域での臨地面接調査の結果を資料とし、「カエス」「カヤス」の振る舞いを見る。

その結果、次のことが分かった。

1. 仮説について、(3)は確認できなかったものの、(1)(2)は確認できたことから、「カヤス」は「カエス」のイ音便化を回避するために作り出され広まったと考えてよいと思われる。
2. e-i の連続を回避するために、中央では「カヤス」という語が作られた。富山県呉西地域でもそれを受け入れたが、それとは別に、「カエス」のイ音便形「かえいた」から短音化した「かえた」という語形を作るという独自の回避の方法もとられた。
3. 富山県呉西地域でみられる「かえた」は、中央語にも存在した。

以上のように、サ行イ音便という現象が影響を与え、語の形態的なあり方を変化させ、「カヤス」のような新語を成立させる可能性のあることが明らかとなった。

2.9. 第9章「咲く」の方言形「サス」の成立

第9章では、前章と同じくサ行イ音便が影響して成立したと考えられる特定の語に焦点を当て、形態論的な面から特徴を記述するとともに、その成立過程について考察した。具体的には「咲く」に対応する方言形「サス」を取り上げた。前章の「返す」の意の「カヤス」という事例は、サ行イ音便の影響を受けて語幹を変えた現象であったが、本章で取り上げる「咲く」の意の方言形「サス」は、サ行イ音便の影響を受けて別の活用を作り出す現象の事例として論じる。「カヤス」と「サス」は同じサ行イ音便が影響して成立した語ではあるものの、その成立過程は大きく異なる。

結果、「サス」は、「差す」がサ行イ音便化することに、「咲く」が引かれて成立したものであり、連用形「さいて」が同形であることを契機に他の活用形にもサ行の形態が及び、一時的に成立した語であることが明らかになった。成立と言っても完全に成立したわけではなく、「サス」はサ行イ音便を持つ殆どの地域では消滅し、特定の条件が揃った地域で今も見られる一時的な語であると言える。

一般的には、動詞がその活用の行を変えてしまうという変化はあまり見られない。しかし、今回取り上げた「サス（咲く）」の事例のように、音便形を介し、かつ、個別の地理的環境が影響することで、それが実現することが観察される。

3. 本研究の意義と今後の課題

以上、各章における結果をまとめてきた。ここでは問題点を振り返りながら改めて本研究の意義を述べ、また本研究で解決に至らなかった点や今後の課題などを述べる。

3.1. 本研究の意義

本論文の意義としては、まず、本論文の全体に関わることとして、通時・地理両面の掛け合わせの視点から音便現象を捉えたことである。特に第3章において、文献での現象、方言での現象と別個に扱うのではなく、その両面を掛け合わせることで、これまでの史的考察や個別の方言記述を、地理的な広がりに関連付けて捉えた点が新しく、音便研究において意義はあったのではないかと考える。

次に、サ行イ音便の実態を記述するため、主要地点に赴き調査を行ったことである。特に第4章・第5章・第6章において、富山県・鹿児島県・高知県の多くの地点に訪れ、記述調査を行った。これまで文献中心に進められてきたサ行イ音便の研究に、方言学の視点を導入したことは本論文のひとつの特色である。文献を資料とした調査・研究では、限られた動詞についてしか知ることができないが、サ行イ音便が残存する地域に赴いて記述調査を行えば、未調査の動詞を調査することができる。

また、音便現象が影響して成立した語があるという新しい報告を行ったことも挙げられる。このような語があることは、各地方言の概説書などで触れられるのみであり、あまり注目されてこなかった。そのような語の成立を考察した研究は今までにない。従来、サ行イ音便の内部に留まっていた関心を、この現象に影響されて成立した語の考察に拡大することで、音便史と語彙史の交渉について検討した点も、本論文の意義であると言える。

3.2. 今後の課題

次に、本研究で残した課題について述べる。

- a. 記述調査を徹底すること
- b. サ行イ音便衰退の原因を方言の面から明らかにすること
- c. 音便の影響で成立した語の類例を発見すること

a に関して、本研究では富山県・鹿児島県・高知県での調査を行ったが、これらの地点の結果だけでは、日本語方言全体を捉えたことにはならない。ある程度の中央語規則崩壊のバリエーションは見られたが、他にも方言独自の規則を持っている地点に赴き、記述調査を徹底させることが必要である。さらに、地域ごとの音便現象の起こり方に、なぜ違いが現れるのかということも併せて考えていきたい。

b に関して、サ行イ音便衰退の原因については、本論文中では明らかにすることができなかった。これに関しては、中央語における要因と方言における要因の差について各言語体系の中から要因を見出し、内的変化の可能性も併せて考えていきたい。中央語での衰退は江戸時代だが、方言では衰退途中を捉えることができるので、その利点を生かして、衰退

原因に踏み込みたいと考えている。また、その中央語における要因の中で、多音節語がイ音便化しやすいという条件が先行研究で多く指摘されているにも関わらず、語の長さという点での分析を行わなかった。改めてその観点からの考察も行いたい。

cに関して、第8章・第9章のように、サ行イ音便が語彙に影響を与えることがあるということは、これまで言及されて来なかった。語彙の成立を考える際に、音便との影響関係を考えるという新しい視座を与えることができたと言えるであろう。それだけに、「カヤス」「サス」それぞれの類例を発見し、影響関係について更に考察を深めることが必要だと考える。

4. おわりに

本論文は、〈サ行イ音便の、日本全国での分布形成過程を推定するとともに、サ行イ音便の影響で成立した語の成立過程を明らかにすることで、従来主として中央語文献を資料として研究されてきたサ行イ音便を、方言学の視点から新たに捉え直し、方言上、どのような現象として現れるのかを明らかにする。〉という目的を立てて取り組んだものであったが、分布形成過程を予測するに留まってしまった。しかし、その予測の元となった富山県・鹿児島県・高知県のに関しては、サ行イ音便のある程度の傾向は掴めたと考える。今後は立てた予想が正しいのか確認していくことが一番の課題となるが、今後一層各地における音便現象を丁寧に観察・記述していくことで、方言記述の蓄積から文献国語史に新しい視座を与えられるような発見があるはずである。

使用した文献・索引

- 池田廣司・北原保雄(1983)『大蔵虎明本狂言集の研究』表現社
江口正弘(1986)『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院
江口正弘(1986)『天草版伊曾保物語対照本文及び総索引』明治書院
大塚光信編(1992)『続抄物資料集成 第十巻』清文堂
大野晋・武藤宏子編(1979)『曾我物語総索引』至文堂
岡見正雄・大塚光信編(1976)『抄物資料集成』清文堂
北原保雄(1973)『きのふはけふの物語研究及び総索引』笠間書院
北原保雄・大倉浩(1983)『狂言記の研究 下』勉誠社
北原保雄・大倉浩(1985)『続狂言記の研究』勉誠社
北原保雄・大倉浩(1997)『狂言記外五十番の研究』勉誠社
北原保雄・吉見孝夫(1987)『狂言記拾遺の研究』勉誠社
近世文学総索引編纂委員会編(1986)『近代文学総索引 近松門左衛門 別巻』教育社
坂詰力治(1984)『論語抄の国語学的研究』武蔵野書院
辻村敏樹編(1992)『とはずがたり総索引自立語編』笠間書院
東京都立大学中世語研究会編(2005)『狂言六義総索引』勉誠出版
時枝誠記編(1967)『改訂版徒然草総索引』至文堂

参考文献

- 秋山英治(1999)「サ行四段活用動詞のイ音便はなぜ衰退、消滅したのか」『愛媛国文と教育』32, 愛媛大学教育学部国語国文学会
有元光彦(2001)「九州方言における動詞テ形の音韻規則」『音声研究』5-3, 日本音声学会
飯豊毅一, 日野資純, 佐藤亮一編(1998)『講座方言学 6 中部地方の方言』国書刊行会
飯豊毅一, 日野資純, 佐藤亮一編(1998)『講座方言学 8 中国・四国地方の方言』国書刊行会
飯豊毅一, 日野資純, 佐藤亮一編(1998)『講座方言学 9 九州地方の方言』国書刊行会
池上二良(1953)「長野県木曽地方におけるサ行イ音便形とヨに終る命令形の分布」『信濃[第3次]』5-4, 信濃郷土研究會
今泉忠義(1951)「日葡辞書を通して見た字音と語法と」『国語学』6, 国語学会
今村かほる(1999)「中部地方方言のサ行イ音便の実態について」『弘前大語文』25, 弘前学院大学国語国文学会
植村雄太郎(2001)『種子島方言辞典』武蔵野書院
牛山初男(1969)『東西方言の境界』信教印刷
内間直仁(1984)『琉球方言文法の研究』笠間書院

- 榎垣実他(1962)『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 江口正弘(1975)「中古和文資料における動詞の音便形―源氏物語のイ音便ウ音便を中心に―」『国語と国文学』52-5,ぎょうせい
- 大倉浩(1995)「狂言記にみるサ行四段動詞のイ音便形」『文芸言語研究言語編』27,筑波大学
文芸・言語学系
- 大塚光信(1955)「バ四・マ四の音便形」『国語国文』24-3,京都大学国文学会
- 大西拓一郎編(2002)『方言文法調査ガイドブック』科学研究費補助金研究成果報告書
- 奥村和子(2003)「覚一本平家物語におけるサ行イ音便について」『言語文化研究日本語日本文学編』1,大阪府立大学人間社会学部言語文化学科
- 奥村三雄(1968)「サ行イ音便の消長」『国語国文』37-1,京都大学国文学会(柴田武・加藤正信・徳川宗賢編 1978『日本の言語学 第六巻 方言』大修館書店 所収)
- 奥村三雄(1990)『方言国語史研究』東京堂出版
- 鎌田良二(1968)「サ行五段活用動詞のイ音便―西日本方言について」『甲南女子大学研究紀要』4,甲南女子大学
- 上村孝二(1962)「展望 方言―九州・琉球―」『国語学』49,国語学会
- 上村孝二(1998)『九州方言・南島方言の研究』秋山書店
- 亀井孝(1982)「HABENT SUA FATA EXEMPLA」『ヨーロッパ文化研究』2, 成城大学大学
院文学研究科
- 川上泰(1988)「音便の音声」『国学院雑誌』89-8, 国学院大学
- 北原保雄(1973)『きのふはけふの物語研究及び総索引』笠間書院
- 木部暢子(1997) 平山輝男編『日本のことばシリーズ 46 鹿児島県のことば』明治書院
- 九州方言学会編(1991)『九州方言の基礎的研究改訂版』風間書房
- 金田一春彦(1967)「東国方言の歴史を考える」『国語学』67,国語学会
- 工藤力男(1978)「中性形容詞の終焉」『論集日本文学・日本語 3 中世』角川書店(工藤(1999)
『日本語詞の諸相 工藤力男論考選』汲古書院 所収)
- 窪蘭晴夫(1999)『日本語の音声』岩波書店
- 久保田篤(2004)「滑稽本を資料とした日本語研究について」『日本語学』23-12,明治書院
- 小泉弘(1963)「九卷本宝物集の成立年代について」『国文学言語と文芸』5-3,明治書院
- 国語調査委員会(1906)『口語法調査報告書』(1986 国書刊行会復刻版による)
- 国立国語研究所(1959)『日本方言の記述的研究』明治書院
- 国立国語研究所(1971)『動詞・形容詞問題語用例集』秀英出版
- 国立国語研究所(1991)『方言文法全国地図』第2集 国立印刷局
- 小西いずみ(2001)「サ行動詞イ音便化の例外語について―富山市方言の場合―」『地域言語』
13,天理・地域言語研究会
- 小西いずみ(2002)「サ行動詞イ音便化の例外語について―山梨県奈良田方言の場合―」『山
梨ことばの会会報』12,山梨ことばの会

- 小西いずみ(2004)「富山県の文法―地理的分布と記述研究の視点から―」『日本海沿岸の地域特性とことば 富山県方言の過去・現在・未来』桂書房
- 小西いずみ(2016)『富山県方言の文法』ひつじ書房
- 小林隆(2004)『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房
- 小林芳規(1967)『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』東京大学出版会
- 小松英雄(1981)『日本語の世界7 日本語の音韻』中央公論社
- 斎藤純男(1997)『日本語音声学入門』三省堂
- 坂喜美佳(2010)「富山県におけるサ行イ音便の実態」『言語科学論集』14,東北大学文学研究科言語科学専攻
- 坂喜美佳(2011a)「「咲く」の方言形「サス」の成立―サ行イ音便との関係から―」『国語学研究』50,東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会
- 坂喜美佳(2011b)「志摩市における動詞の音便」『三重県志摩市のことば』,徳島大学総合科学部日本語学研究室
- 坂喜美佳(2013)「「かえす(返す)」のサ行イ音便と「かやす」の成立」『国語学研究』52,東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会
- 坂喜美佳(2014)「動詞の音便の地理的・歴史的分布」『国語学研究』53,東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会
- 坂喜美佳(2016)「高知県のサ行イ音便について」『文化』80-1・2,東北大学文学会
- 坂口至(1990)「嚟本に見る近世後期上方語の諸相」『文学部論叢』31,熊本大学文学会
- 坂梨隆三(1987)『江戸時代の国語 上方語』東京堂出版
- 坂梨隆三(1990)「近世におけるサ行四段活用のイ音便」『東京大学教養学部人文科学科紀要』91,共立出版
- 櫻井光昭(1977)「生クの活用について」『国語学』110,国語学会
- 桜井茂治(1967)「中世京都方言の音節構造―そのシラビーム的性格について―」『季刊文学・語学』46,三省堂出版
- 桜井茂治(1968)「古代日本語の音節構造について―その特質と解釈―」『国学院雑誌』69-7,国学院大学
- 迫野虔徳(1998)『文献方言史研究』清文堂出版
- 迫野虔徳(2012)『方言史と日本語史』清文堂出版
- 真田信治(1998) 平山輝男編『日本のことばシリーズ 16 富山県のことば』明治書院
- 尚学図書編(1989)『日本方言大辞典』小学館
- 高橋顕志(1986)『松山市・高知市間における方言の地域差・年齢差―グロットグラム分布図集―』高知女子大学文学部国語学研究室
- 高橋顕志(1991)『四国言語地図―1986―』高知女子大学文学部国語学研究室
- 高見三郎(1978)「『社詩統翠抄』の音便形」『論集日本文学・日本語3 中世』角川書店
- 田中宣廣(1996)「「カエス」から「カヤス」へ―近畿およびその周辺の諸方言における近世

- 語から現代語への動詞語形推移の一例—〈版本「絵入狂言記」を資料として〉」『岩手県立宮古短期大学研究紀要』7-1,岩手県立宮古短期大学
- 田中宣廣(2001)「消えゆく? 日本語—「イズレ」・「オヤコ」・「タベル」・「カエス」—」『日本語学』20-6,明治書院
- 築島裕(1969)『平安時代語新論』東京大学出版会
- 築島裕編(1982)『講座国語史 4 文法史』大修館書店
- 築島裕(1987)『平安時代の国語』東京堂出版
- 築島裕(1991)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
- 築島裕編(2007)『訓点語彙集成 2』汲古書院
- 都竹通年雄(1952)「動詞の連用形とアクセント」寺川喜四男他編『国語アクセント論叢』法政大学出版局
- 都竹通年雄(1994)『都竹通年雄著作集 1 音韻方言研究編』ひつじ書房
- 都竹通年雄(1996)『都竹通年雄著作集 2 文法研究編』ひつじ書房
- 都築頼助(1961)「方言の実態と共通語化の問題点 1 福岡」『方言学講座』第四卷 東京堂
- 坪井美樹(2007)『日本語活用体系の変遷 増訂版』笠間書院
- 土居重俊(1962)『高知県ことば読本』高知市立市民図書館
- 土井忠生(1943)「近古の国語」『国語科学講座』5,明治書院
- 中川由美子(1984)「音便研究—近世上方語のイ音便を中心に」『山口女子大國文』6,山口女子大学国語国分学会
- 中条修(1989)『日本語の音韻とアクセント』勁草書房
- 新田哲夫(2004)「京阪式アクセントにおける動詞の類推変化について」『国語学』55-1,国語学会
- 日本放送協会編(1981)『全国方言資料』日本放送出版協会
- 丹羽一彌(2005)『日本語動詞述語の構造』笠間書院
- 額田淑(1963)「美作方言の動詞の活用について」『国語学』55,国語学会
- 橋本四郎(1959a)「「行く」の音便」『女子大國文』12,京都女子大学国文学会(橋本四郎(1990)『橋本四郎論文集 国語学編』角川書店 所収)
- 橋本四郎(1959b)「動詞活用の変遷」『国文学解釈と鑑賞』24, 至文堂
- 橋本四郎(1962)「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」『国語国文』31-4,京都大学国文学会(橋本四郎(1990)『橋本四郎論文集 国語学編』角川書店 所収)
- 蜂谷清人(1978)「室町末ハ行四段動詞連用形の音便—狂言・説経・幸若舞を中心に」『国語学研究』18,「国語学研究」刊行会
- 濱田敦(1954)「音便—撥音便とウ音便の交錯—」『国語国文』23-6
- 浜田数義(1966)『「幡多方言」の研究』高知県立中村高等学校内方言研究同行会
- 原田章之進(1963)「「サ行四段のイ音便」覚え書き—史的方言研究の一事例」『宮崎大学学芸学部紀要. 人文科学』15,宮崎大学学芸学部

- 彦坂佳宣(1980)「近世尾張方言のサ行イ音便一音便化の条件と位相と一」『岩手大学教育学部研究年報』40-1, 岩手大学教育学部
- 彦坂佳宣(1997)『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』和泉書院
- 平山輝男(1967)「トカラ群島・屋久島・種子島の方言」『国語学』69, 国語学会
- 平山輝男他編(1992)『現代日本語方言大辞典』明治書院
- 福井玲(1982)「飛騨萩原方言のサ行イ音便について」『国語学演習'82』東京大学文学部言語研究室
- 福島直恭(1992)「サ行活用動詞の音便」『国語国文論集』21, 学習院女子短期大学国語国文学会
- 古田恵美子(2005)「『往生要集』引用文から見た『宝物集』について」『築島裕博士傘寿記念国語学論集』汲古書院
- 外間守善(1960)「一中世文献にあらわれた一琉球方言の動詞」『国語学』41, 国語学会
- 宮治弘明(1993)「滋賀県方言の特殊なサ行イ音便について」『地域言語』5, 天理・地域言語研究会
- 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 矢島正浩(1986)「近松世話物における形容詞連体形のイ音便化について」『国語学』147, 国語学会
- 屋名池誠(2004)「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8(2), 日本音声学会
- 柳田征司(1993)『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院
- 山県浩(1985)「上方絵入狂言本の音便状況(上)一動詞の場合一」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』35, 群馬大学教育学部
- 山県浩(1987)「上方絵入狂言本の音便状況(下)一動詞の場合一」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』36, 群馬大学教育学部
- 山田敏弘(2000)「富山方言の語彙・文法的特徴について一富山市を中心とした方言話者に対する調査から一」『富山国際大学紀要』10, 富山国際大学
- 湯澤幸吉郎(1924)『室町時代の国語』東京堂出版
- 吉田則夫(1998)「高知県の方言」日野資純他編『講座方言学』8 国書刊行会
- 吉町義雄(1952)「九州語用言活用分布相要領並補遺」『国語学』8, 国語学会
- 依田恵美(2005)「中央語におけるサ行四段動詞イ音便の衰退時期をめぐって」『待兼山論叢 文学編』39, 大阪大学文学部
- 渡辺実(1997)『日本語史要説』岩波書店

既発表論文との関係

本研究の第3章・第4章・第6章・第8章・第9章は、これまでに発表した論文を大幅に加筆・修正しながらまとめたものである。以下に各章と既発表論文との関係を示す。

●第3章

坂喜美佳(2014)「動詞の音便の地理的・歴史的分布」『国語学研究』53,東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会

●第4章

坂喜美佳(2010)「富山県におけるサ行イ音便の実態」『言語科学論集』14,東北大学文学研究科言語科学専攻

●第6章

坂喜美佳(2016)「高知県のサ行イ音便について」『文化』80-1・2,東北大学文学会

●第8章

坂喜美佳(2013)「「かえす(返す)」のサ行イ音便と「かやす」の成立」『国語学研究』52,東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会

●第9章

坂喜美佳(2011)「「咲く」の方言形「サス」の成立ーサ行イ音便との関係からー」『国語学研究』50,東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会

資料

富山県全域調査の調査結果の一覧を資料として載せる。

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	共通語	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
2 モーラ動詞																				
a	カス(貸す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	サス(刺す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	サス(注す)	×	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	○	○	×	×	×
	サス(挿す)	○	○	×	○	×	/	×	×	○	○	×	×	○	?	○	○	×	×	×
	サス(差す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○	/	○	○	×	×	×
	タス(足す)	×	×	×	×	×	/	×	×	×	/	×	×	×	?	/	×	×	×	×
	ダス(出す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×
	マス(増す)	×	×	×	×	×	×	×	×	?	×	×	/	×	/	/	×	/	/	/
u	フス(伏す)	×	/	×	×	×	/	×	×	×	×	/	/	×	/	/	×	/	/	/
	ムス(蒸す)	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×
	ムス(生す)	/	/	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/	/
e	ケス(消す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
o	オス(押す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	コス(漉す)	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	×	?	/	○	×	×	×
	コス(越す)	/	×	×	×	×	/	×	/	×	/	×	○	×	/	×	×	×	×	×
	ノス(伸す)	○	/	/	×	×	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/	/
	ホス(干す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	モス(燃す)	/	/	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/	/
	ヨス(止す)	/	/	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/	/
3 モーラ動詞																				
a	アカス(明かす)	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	アマス(余す)	/	×	/	×	×	/	/	/	×	/	/	/	/	/	/	×	/	/	/
	アヤス	○	○	○	○	/	○	×	/	○	/	○	○	×	/	/	○	×	×	×
	アラス(荒らす)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	○	○	×	×	×
	アワス(合わす)	×	○	○	×	×	○	○	×	×	○	○	×	×	×	○	○	×	×	×
	イカス(生かす)	○	○	○	○	×	○	×	/	○	○	○	○	/	/	○	○	/	×	×
	イヤス(癒す)	/	/	/	?	×	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	×	/	/	/
	ウカス(浮かす)	×	○	○	○	×	○	○	×	×	○	○	○	×	/	○	○	×	×	/
	オカス(犯す)	×	○	○	○	×	/	○	/	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	カカス(欠かす)	○	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	/	×	×
	カザス(翳す)	/	/	/	×	○	/	/	/	×	/	○	/	/	/	/	×	/	/	/
	カラス(枯らす)	○	○	○	○	○	○	○	×	○	/	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	カワス(交わす)	/	○	○	○	○	○	○	/	/	○	○	○	×	/	○	○	×	×	×
	キカス(利かす)	×	/	○	○	×	○	×	×	○	○	×	○	×	○	○	○	×	×	×

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	共通語	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
a	キタス(来たす)	/	/	/	×	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/	/
	キラス(切らす)	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×
	クダス(下す)	○	○	○	○	×	/	○	×	○	○	×	○	×	×	○	○	×	×	×
	クラス(暮らす)	×	×	○	×	×	/	○	/	○	○	×	×	×	/	○	○	×	/	×
	ヨゴス(汚す)	×	/	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	/	/	○	○	×	×	×
	ケナス(貶す)	○	○	○	○	○	/	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	コガス(焦がす)	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	コナス	○	○	○	○	×	/	○	×	○	○	○	○	/	/	○	×	×	×	/
	コヤス(肥やす)	×	○	○	○	×	○	○	/	○	○	○	○	×	/	○	○	×	×	×
	コラス(凝らす)	/	○	○	○	×	/	/	○	○	○	/	○	×	/	○	×	×	×	×
	コワス(壊す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	サガス(探す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	/	○	○	×	×	×
	サマス(冷ます)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	サラス(晒す)	○	○	○	○	○	○	×	○	×	/	/	○	×	○	○	○	×	×	×
	ジャラス	/	×	○	×	×	/	×	○	○	○	×	○	×	/	/	○	/	/	×
	ジラス(焦らす)	○	○	○	?	○	/	×	/	/	/	?	○	○	/	○	○	×	×	×
	スカス(透かす)	/	○	○	○	×	/	×	/	/	/	○	○	×	/	/	○	/	/	/
	スマス(済ます)	○	○	○	×	○	/	○	/	○	/	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	スマス(澄ます)	○	/	/	×	×	○	/	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×
	ズラス	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	セカス(急かす)	○	○	○	×	×	/	/	/	/	○	○	○	×	/	○	○	/	×	×
	ソラス(反らす)	○	○	○	○	/	○	○	×	?	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	タダス(正す)	/	/	×	×	×	/	×	×	○	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×
	ダマス(騙す)	○	○	○	×	×	○	○	×	○	/	○	○	○	×	○	○	×	×	×
	タヤス(絶やす)	○	/	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	/	○	○	×	×	×
	タラス(垂らす)	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	タラス(証す)	/	/	○	×	○	/	/	/	/	/	×	/	×	/	/	×	/	/	×
	チャカス(茶化す)	/	/	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	/	○	×	×	×
	チラス(散らす)	/	○	×	○	×	○	×	○	○	/	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	ツカス	○	○	○	○	×	○	×	/	○	×	○	○	×	/	○	○	×	×	×
	デカス	/	/	/	×	×	×	/	/	○	○	/	○	○	/	/	/	/	×	/
	テラス(照らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	/	○	○	×	×	×
	トカス(溶かす)	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	ドカス	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	トザス(閉ざす)	/	/	/	○	×	/	/	○	○	○	/	○	×	○	/	○	/	/	/

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	共通語	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
a	トバス(飛ばす)	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	ドヤス	/	○	/	○	×	/	/	/	○	○	○	○	×	/	/	○	×	/	/
	ナガス(流す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ナラス(鳴らす)	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ナラス(慣らす)	/	×	/	×	×	/	/	/	○	/	/	/	×	/	/	×	/	/	/
	ナラス(均す)	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ニガス(逃がす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ヌカス(抜かす)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ヌカス	○	○	/	○	×	○	/	×	○	○	○	○	○	×	/	○	×	×	/
	ヌガス(脱がす)	○	○	○	○	○	○	○	/	×	○	○	○	×	/	○	○	×	×	×
	ヌラス(濡らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	/	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	ネザス(根ざす)	/	/	/	×	×	○	/	/	/	×	/	/	×	/	/	/	/	/	/
	ノカス(退かす)	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/
	ノガス(逃がす)	○	/	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	ノバス(伸ばす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	ハカス(吐かす)	/	○	○	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ハガス(剥がす)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	バカス(化かす)	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○	×	○	×	○	○	○	×	×	×
	ハタス(果たす)	/	○	×	○	×	○	×	○	○	○	/	○	○	○	○	○	×	×	×
	ハナス(離す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ハナス(話す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	ハヤス(生やす)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ハヤス(囃す)	○	/	○	×	×	○	○	×	○	○	×	○	○	/	○	○	/	/	×
	ハラス(腫らす)	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ハラス(晴らす)	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	バラス	○	○	×	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ヒタス(浸す)	○	/	○	○	×	/	×	/	/	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	ヒヤス(冷やす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	フカス(更かす)	○	○	○	○	×	/	○	×	/	○	○	/	×	/	○	×	×	×	×
	フカス(蒸かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	フヤス(増やす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ヘラス(減らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	ボカス(量す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	マカス(任す)	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	マカス(負かす)	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	共通語	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日	
a	マウス(回す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×	
	ミタス(満たす)	○	/	×	×	×	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	○	/	/	/	
	ムラス(蒸らす)	○	○	○	○	×	○	/	×	○	○	○	○	×	/	×	○	×	×	×	
	メカス	/	○	×	×	×	/	/	/	/	○	/	○	×	/	/	/	×	/	/	
	モヤス(燃やす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	
	モラス(漏らす)	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×	
	ワカス(沸かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	×	×	×	
	ワタス(渡す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	
u	イブス(燻す)	/	/	/	/	○	○	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	
	ウツス(移す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ウツス(写す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	カクス(隠す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	クズス(崩す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ジュクス(熟す)	×	×	×	×	×	○	×	/	○	○	/	×	×	/	/	/	×	×	×	
	タクス(託す)	/	/	/	×	×	○	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	×	×	×	
	ツクス(尽くす)	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ツブス(潰す)	○	○	○	○	○	/	○	/	○	○	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	ツルス(吊るす)	○	○	○	×	×	○	○	×	○	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×
	ナクス(失くす)	○	○		×	×	/	×	/	/	/	○	×	×	/	×	/	/	/	/	/
	ハズス(外す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ホグス(解す)	○	○	○	○	○	/	/	×	○	○	○	/	○	/	○	○	○	×	×	×
	ホツス	/	○	×	○	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	×	×
	マブス	○	○	/	○	×	○	○	/	/	/	○	○	×	/	/	○	×	×	×	×
	ヤツス(褻す)	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	○	/	×	×	×	×
	ヤクス(訳す)	×	×	×	×	×	×	/	○	○	×	/	×	×	○	×	×	×	×	/	×
	ユルス(許す)	○	○	○	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	○	/	×	×	×	×
	リャクス(略す)	×	/	×	×	×	○	/	×	×	×	×	/	×	×	/	×	/	×	/	/
	e	カエス(返す)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
シメス(示す)		/	×	×	×	×	/	/	/	/	×	×	×	×	/	/	×	×	×	×	×
タメス(試す)		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
ナメス		/	/	/	×	×	/	/	/	/	×	/	/	×	/	/	×	/	/	/	/
o	オコス(起こす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×	×
	オトス(落とす)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×	×
	オドス(脅す)	○	○	○	×	×	○	○	/	○	○	○	○	×	/	○	×	×	×	×	×
	オロス(降ろす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×	×

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	共通語	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
o	カモス(醸す)	/	/	/	×	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	コボス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	コロス(殺す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	スゴス(過ぐす)	○	○	/	○	○	/	○	/	/	×	○	○	×	/	/	○	/	/	/
	タオス(倒す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ナオス(直す, 治す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
	ニゴス(濁す)	×	○	○	○	×	○	○	×	○	○	×	○	×	×	○	○	×	×	×
	ノコス(残す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	モドス(戻す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ヤドス(宿す)	○	×	/	×	×	○	○	/	○	/	○	○	○	/	/	○	/	/	/
	ヨコス(寄越す)	○	/	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	/	○	○	×	×	×
	ヨゴス(汚す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
oo	トース(通す)	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	○ トイタ	×	×	×
	モース(申す)	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/		
4 モーラ動詞																				
a	アラワス(表す)	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	×	×	×	/	○	×	×	×
	イソガス(急がす)	○	○	○	×	×	/	×	×	×	○	?	○	○	×	○	×	×	×	×
	ウゴカス(動かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ウナガス(促す)	/	○	×	○	×	/	/	×	/	○	○	○	○	×	/	○	×	/	/
	オクラス(遅らす)	○	○	○	○	×	○	○	○	×	○	?	○	×	○	○	/	×	×	×
	オドカス(脅かす)	○	○	○	○	/	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	/	×	×	×
	カヨワス(通わす)	○	×	×	×	×	○	○	/	×	○	×	○	×	/	/	○	/	×	/
	カラマス(絡ます)	○	×	×	×	×	○	/	×	×	○	×	○	×	×	○	○	×	×	×
	カワカス(乾かす)	○	○	○	○	○	○	○	/	/	○	○	○	○	/	/	○	×	×	×
	クサラス(腐らす)	○	○	×	○	×	/	×	×	×	○	×	×	×	×	○	/	×	×	×
	クモラス(曇らす)	/	/	×	×	×	○	/	/	×	/	×	×	×	/	/	/	/	/	/
	クラマス(眩ます)	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	×	○	×	×	/	○	×	×	×
	クラワス(食らわす)	×	/	×	×	×	/	×	/	×	/	×	×	×	/	○	×	×	×	×
	クルワス(狂わす)	/	○	×	○	×	/	×	×	×	○	/	×	×	×	/	○	×	×	×
	ゴマカス(誤魔化す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	コロガス(転がす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	サワガス(騒がす)	○	×	○	×	×	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×
	シノバス(忍ばす)	/	/	×	×	×	○	/	×	?	/	/	×	×	×	/	×	/	/	/
	シデカス(仕出かす)	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	/	○	×	/	×

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	共通語	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
a	スベラス(滑らす)	○	○	×	×	×	○	○	×	○	○	×	○	×	×	/	○	×	×	×
	タガヤス(耕す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	チラカス(散らかす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ツイヤス(費やす)	○	/	×	○	○	○	○	×	/	○	○	○	×	×	○	/	/	/	×
	ツカワス(使わす)	○	×	/	×	×	/	○	×	/	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×
	デクワス(出くわす)	×	/	×	○	×	○	○	×	/	○	×	○	×	×	/	○	×	×	×
	トガラス(尖らす)	○	○	×	○	×	/	○	×	/	○	×	○	○	×	○	/	×	/	×
	ニギワス(賑わす)	○	/	/	×	/	○	×	×	○	○	/	×	○	/	○	/	/	×	/
	ニゴラス(濁らす)	○	○	○	×	×	○	○	×	×	○	/	○	○	×	○	○	×	×	×
	ハゲマス(励ます)	○	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	/	○	×	×	×	×
	ハヤラス(流行らす)	/	/	○	×	×	○	/	×	×	○	×	○	×	×	○	○	/	×	×
	ヒビカス(響かす)	/	○	○	○	×	○	/	×	×	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×
	フクラス(膨らす)	/	○	/	×	×	/	×	×	/	×	×	○	×	/	/	/	/	×	/
	フヤカス(ふやかす)	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×	/	○	×	×	×
	ヘコマス	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	×	○	○	×	/	○	×	×	×
	マドワス(惑わす)	/	○	○	×	×	/	○	×	/	○	/	○	○	×	○	○	/	/	/
	マヨワス(迷わす)	○	×	/	×	×	○	○	×	×	○	×	×	×	×	/	/	×	×	×
	メグラス(巡らす)	×	/	×	○	×	○	×	×	/	○	×	○	×	×	/	○	/	×	×
	モタラス(齎す)	/	○	/	○	×	○	○	×	/	○	○	○	×	×	/	○	×	×	×
	モテナス(持て成す)	○	○	○	○	×	○	×	×	/	○	○	○	×	×	/	×	×	×	×
u	ウツブス(うつ伏す)	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	キフルス(着古す)	/	/	/	○	○	/	×	×	○	/	×	○	×	/	○	○	/	/	/
	ヒレフス(ひれ伏す)	/	×	/	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
o	ウルオス(潤す)	/	○	×	○	×	○	×	×	○	/	○	○	×	×	/	○	/	×	/
	ホドコス(施す)	○	○	○	○	○	○	○	×	/	○	×	○	×	○	○	○	×	×	×
	ホロボス(滅ぼす)	/	○	/	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	×	/	○	×	×	×
oo	モヨース(催す)	/	/	×	×	×	○	×	×	○	×	×	○	/	○	○	○	×	×	×
5 モーラ動詞																				
a	オドロカス(驚かす)	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	オビヤカス(脅かす)	/	×	/	×	×	/	○	×	○	/	○	○	×	○	/	○	×	×	×
	カガヤカス(輝かす)	/	○	/	○	×	/	/	×	○	○	/	○	×	×	○	○	×	×	×
	カドワカス	/	○	/	○	/	○	○	/	/	/	○	○	○	○	/	○	×	×	×
	ココロザス(志す)	/	/	/	×	×	○	/	×	○	×	○	○	×	×	/	○	×	×	/
	コワガラス(怖がらす)	○	○	×	×	×	○	○	×	×	○	○	○	×	×	/	×	×	×	×
	ソソノカス(唆す)	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	共通語	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
a	タダヨワス(漂わす)	/	/	×	×	×	○	/	×	○	/	×	○	×	×	/	×	×	×	×
	タブラカス(誑かす)	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	/	○	/	×	×
	チョロマカス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	/	○	×	×	×
	トドロカス(轟かす)	/	/	/	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	トンガラス	/	○	○	○	×	○	×	×	×	/	×	○	×	/	○	/	×	×	×
	ニギヤカス(賑やかす)	/	/	×	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/
	ヒケラカス	/	/	○	○	○	/	/	/	/	/	/	○	○	/	/	○	/	/	/
	フクラマス(膨らます)	○	○	○	○	○	/	×	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×
	ホコロバス(綻ばす)	×	○	×	○	×	○	×	×	/	○	/	○	○	/	○	○	×	×	×
	ホノメカス(仄めかす)	/	×	○	○	×	○	×	×	/	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	マギワラス(紛らわす)	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	モテアマス(持て余す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	ワズラワス(煩わす)	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	×	×	/	/	×	×	×
e	クツガエス(覆す)	/	/	/	×	×	×	/	/	/	×	×	ガエタ	○	/	/	ガエタ	/	/	/
	ヒルガエス(翻す)	/	/	×	×	×	/	/	×	/	/	×	/	○	/	/	エイタ	×	×	×
o	オッコトス(落っことす)	○	/	○	/	○	/	/	/	/	/	/	○	○	/	/	×	/	/	/
複合動詞																				
足す	ツギタス(注ぎ・継ぎ)	○	×	/	×	×	/	×	×	×	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
出す	ナゲダス(投げ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ヨビダス(呼び)	○	○	○	○	○	/	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	オモイダス(思い)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ハナシダス(話し)	○	○	○	○	○	/	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
慣らす	キナラス(着)	/	/	/	×	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ハキナラス(履き)	○	○	○	○	○	○	/	/	○	○	○	○	×	/	○	○	×	×	×
果たす	ツカイハタス(使い)	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
回す	ツレマワス(連れ)	○	○	○	×	○	/	/	○	○	○	○	○	×	○	/	○	×	×	×
めかす	ジョーダンメカス(冗談)	○	/	○	○	×	○	/	/	/	/	/	○	×	/	/	○	×	×	×
巡らす	オモイメグラス(思い)	/	/	○	×	○	○	/	×	/	/	/	○	×	/	/	○	×	/	/
渡す	ミワタス(見)	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
返す	イイカエス(言い)	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	ウラガエス(裏)	×	○	×	○	×	ガエタ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	クリカエス(繰り)	×	○	○	×	○	/	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	トリカエス(取り)	×	○	×	×	×	/	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	ヒキカエス(引き)	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	ヒックリカエス	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

巻末資料 富山県全域調査の結果

複合動詞		氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
消す	フキケス(吹き)	×	/	×	×	×	/	×	×	×	×	×	×	×	×	/	×	×	×	×
示す	サシシメス(指し)	×	/	×	/	×	/	/	/	/	/	/	×	×	/	/	/	/	/	/
のめす	タタキノメス(叩き)	○	/	×	/	○	○	/	×	/	/	×	×	×	/	/	○	/	/	/
越す	オイコス(追い)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	カチコス(勝ち)	○	○	×	○	×	/	/	×	○	○	×	○	×	/	○	×	×	×	×
	ヒッコス(引っ)	○	×	×	×	×	/	×	×	○	○	×	×	×	/	○	○	×	×	×
	マケコス(負け)	○	○	×	○	×	/	×	×	×	○	×	○	×	/	○	×	×	×	×
	モチコス(持ち)	×	○	○	○	×	○	×	×	○	○	×	○	×	/	○	×	×	×	×
殺す	カミコロス(噛み)	/	○	/	○	/	○	/	○	/	○	○	○	×	/	○	○	/	/	/
過ごす	ノリスゴス(乗り)	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
	ヤリスゴス	○	○	○	○	○	○	/	/	○	○	○	○	×	/	○	○	×	×	×
干す	ノミホス(飲み)	○	○	○	○	○	/	/	×	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
通す	ヤリトース	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
		トイタ	トイタ	トイタ	トイタ	トイタ	トイタ	トイタ	トイタ	トイタ	トイタ	トイタ	トイタ	トイタ	トイタ	トイタ	トイタ			
使役辞	イカス(行かす)	○	×	○	×	×	○	×	/	×	×	×	○	×	×	/	○	×	×	×
	イワス(言わす)	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	オラス(折らす)	×	×	○	×	×	○	×	×	×	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×
	カガス(嗅がす)	×	×	×	×	×	/	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×
	キカス(聞かす)	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×
	クワス(食わす)	○	×	×	×	×	×	○	/	×	×	×	×	○	×	/	×	×	×	×
	シラス(知らす)	×	/	○	×	×	/	/	×	/	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×
	ナカス(泣かす)	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	○	×	×	×
	ネカス(寝かす)	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	×	○	○	×	○	○	×	×	×
	ノマス(飲ます)	○	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	○	○	×	×	×
	モタス(持たす)	○	×	○	×	×	/	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×
	アソバス(遊ばす)	○	×	○	×	×	○	×	×	×	○	×	○	×	×	○	○	×	×	×
	コロバス(転ばす)	○	×	×	×	×	○	○	○	/	/	×	/	×	×	/	/	×	×	×
	ハシラス(走らす)	○	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×
	ナワラス(習わす)	×	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	○	○	×	×	×
	ハタラカス(働かす)	/	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○	/	×	○	○	×	×	×

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	方言	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
2 モーラ動詞																				
a	サス	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	○	○	○	/	×	×	×
	ナス	○	○	○	○	/	○	×	/	/	/	○	○	×	×	○	×	×	×	×
u	ムス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	×	/
3 モーラ動詞																				
a	アカス	○	○	○	○	○	○	/	/	/	×	○	○	×	×	○	○	/	×	×
	オガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	オヤス	○	/	/	○	○	○	/	/	/	/	○	○	○	×	○	/	×	/	/
	カマス	○	○	○	○	×	/	×	○	×	○	○	○	×	×	○	○	×	×	×
	カヤス	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	/	×	○	○	×	×	×
	カワス	○	○	/	○	○	/	/	/	/	/	○	/	×	/	/	○	/	/	×
	キヤス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	×	/
	ケヤス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	/	○	○	○	×	×	×
	ゲナス	○	○	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ゲバス	/	/	/	/	/	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ゲワス	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	コカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	○	/	/	/	/
	コナス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	○	/	×	○	○	×	×	×
	コワス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	シャカス	○	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	○	○	/	/	/
	スカス	○	○	/	○	○	○	×	○	○	○	○	/	○	×	○	○	×	×	×
	タアス	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	タラス	/	○	/	○	○	○	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/
	ツバス	○	/	○	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	×	×	×
	ドヤス	○	○	/	/	○	/	/	○	○	○	○	○	/	×	/	○	×	×	×
	ヌカス	○	○	/	○	/	/	×	/	/	○	○	○	○	○	/	/	/	/	/
	ネサス	○	○	○	○	×	○	/	/	/	○	×	○	×	×	/	○	×	×	×
	ノカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ノラス	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ハヤス	/	/	/	/	/	/	/	○	/	○	○	/	○	/	○	/	/	/	/
	ホヤス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	メダス	○	○	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ミダス	○	○	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ヨカス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	×	/	/
u	イクス (渡す)	○	○	/	○	/	○	/	/	/	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	方言	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
u	イクス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	/	/	/	○	/	/	/	/
	エクス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	エグス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	シルス	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	スグス	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
o	オロス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×
	タオス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	トボス	○	○	○	○	○	○	×	/	○	○	○	○	○	×	○	/	×	×	×
4 モーラ動詞																				
a	アシダス	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	×	○	○	○	/	×	×
	アジャカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	アゲマス	×	/	/	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/
	イゴサス	○	/	○	/	○	○	/	○	/	○	○	/	○	/	/	○	/	/	/
	イナラス	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	イノカス	○	○	○	/	○	○	×	○	○	○	○	○	/	×	○	○	×	×	×
	イビスアス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	イラカス	○	○	○	○	○	○	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	エゴサス	/	○	/	○	/	/	/	/	○	/	/	○	/	○	○	○	×	/	/
	エノカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	エラカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	オラカス	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	/	○	○	/	/	/
	カザカス	/	/	/	/	/	/	/	○	/	○	○	○	/	/	/	/	/	/	/
	カヤラス	/	/	/	×	×	/	/	×	/	○	×	○	/	/	/	○	/	/	/
	クイダス	/	○	○	○	/	○	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	クラワス	○	/	/	/	/	/	×	×	×	×	×	/	○	×	/	/	×	/	/
	ケトバス	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	/	○	/	×	×
	コソガス	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	コチョガス	○	/	○	○	○	○	×	○	○	/	○	○	○	/	/	○	/	/	/
	コロガス	○	○	○	○	×	○	×	/	/	/	○	/	○	/	/	/	/	/	/
	サゲマス	○	/	/	/	×	/	×	/	/	/	/	/	×	/	/	/	/	/	/
	シマダス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	シャーカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/
	ズラカス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	タテマス	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/
	ダマカス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	方言	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
a	チョーマス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	×	×
	チョコガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	チョラガス	カス○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	チョロガス	/	○	○	○	○	○	×	○	/	○	○	○	○	/	/	/	/	/	/
	チラバス	○	○	/	/	/	/	/	○	○	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	ツカマス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	/	○	○	/	○	/	/	×
	ツシャカス	○	/	/	/	○	/	/	○	○	/	○	○	/	○	○	/	/	/	/
	ツラマス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	トカマス	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	トラマス	/	/	/	/	○	○	/	/	/	○	○	○	/	/	○	○	/	/	/
	ヌラカス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	/	/	○	×	×	×
	ノラカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ヒギダス	○	○	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/
	ヒマダス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	/
	ヒヤカス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	/	/	○	○	/	/	○	×	×	×
	ヒンダス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ヘコナス	/	/	/	/	/	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ヘンダス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/
	ボイダス	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	/	×	×	×
	ボエダス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ホコラス	/	/	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/
	ホタカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ホネカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	メトバス	/	/	/	/	/	/	/	/	×	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ヤッダス	/	○	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ヤブカス	/	○	○	○	○	/	/	○	○	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/
	ヤラカス	○	○	○	/	/	/	/	/	○	○	/	○	/	○	○	○	×	×	×
	ヤリダス	○	○	/	○	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ヤンダス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	○	×	○	○	×	×	×
	ワラカス	○	○	○	○	○	○	/	○	/	○	○	○	○	/	○	○	×	×	/
e	ゲカエス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
o	キタオス	○	○	ダオス	○	○	ダオス	×	○	/	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	スリコス	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	タテコス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	方言	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
5 モーラ動詞																				
a	アオダカス	○	○	○	○	○	○	×	/	/	○	/	/	○	×	○	/	/	/	/
	アオラカス	/	/	/	/	/	/	/	○	○	/	○	○	/	/	/	○	/	/	/
	アゴタラス	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	○	×	×	×
	アザラカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	×	×
	アジャカヤス	○	/	/	/	○	/	/	/	/	/	○	/	○	/	/	/	/	/	/
	アシヲダス	○	/	/	/	/	/	×	/	/	/	/	/	×	/	/	/	/	/	/
	アゼカヤス	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	/	/	○	○	/	/	/
	アタカヤス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	アタガヤス	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	アダガヤス	○	○	/	×	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	×	×
	アマラカス	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	/	/	○	○	×	×	×
	イゴガサス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	イタマカス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	/	/	○	○	×	/	×
	イッサカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	イッサガス	○	/	/	○	/	/	/	○	○	○	○	○	/	○	○	/	/	/	/
	ウシナカス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	/	/
	エッサガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	エベマワス	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	イエ○	/	/	/	/	/	/	/
	オクラカス	/	/	/	○	/	/	/	○	○	○	/	○	/	/	/	/	×	/	/
	オクラガス	○	○	○	/	○	○	/	/	/	/	○	/	○	○	○	○	/	/	/
	オゾケサス	/	/	○	/	○	/	/	/	/	/	/	○	/	○	/	○	×	×	×
	オゾゲサス	○	○	○	○	/	/	/	/	○	/	○	/	/	/	/	/	/	/	×
	オッペラス	/	○	/	/	/	/	/	○	/	○	○	/	/	/	/	/	×	/	/
	カキサガス	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	○	/	/	/	/	/	/
	カキツバス	○	○	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	×	×	×
	カケサガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	カゼフカス	○	/	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	/	×
	カチコワス	○	○	○	○	○	○	×	○	/	○	○	○	○	/	○	○	×	/	/
	カツコワス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	○	/	/	/
	カッコワス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/
	カツマカス	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	カナコワス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	カメコワス	/	○	○	○	/	/	×	/	/	○	○	○	/	○	○	○	×	×	×
	キセコワス	○	○	/	/	/	/	/	/	/	○	/	○	/	/	/	/	/	/	/

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	方言	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
a	キナルガス	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×
	キリマウス	○	○	/	○	○	/	×	○	○	○	×	○	○	/	/	○	×	×	×
	クイサガス	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	/	/	/	/	/	/
	クリマウス	/	/	○	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	グリマウス	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ゲーカヤス	/	/	○	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ケケラカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ケケラガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/
	ケッパナス	○	○	/	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	/	○	○	/	/	/
	ケナルガス	○	/	○	/	/	/	/	/	/	○	○	○	○	○	/	○	×	×	×
	ゴーヤカス	○	/	/	/	/	○	/	/	○	○	/	/	○	/	/	/	/	/	/
	ゴーワカス	○	○	○	/	/	○	×	○	○	○	○	○	/	/	○	/	×	/	/
	コチョバカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	サガネダス	○	/	○	○	○	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	サライダス	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	/	○	○	○	○	○	×	×	×
	シッカヤス	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	シテワタス	○	/	○	/	/	/	×	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/
	セーカカス	○	○	○	○	×	○	/	/	○	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/
	タテラカス	○	○	○	○	○	○	/	○	/	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	ダンカヤス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	チコマカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	チョコマカス	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/
	チョロマカス	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	/	○	×	×	×
	チャーラカス	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	チャーラガス	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	○	○	○	×	×	×
	ツゲガサス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/
	ツマンダス	○	○	○	○	○	○	/	○	/	○	○	○	○	○	○	/	/	×	×
	ツラハラス	○	/	/	/	/	○	/	/	/	○	○	○	/	/	○	○	×	×	×
	ハグラカス	○	○	○	○	○	/	/	/	○	○	○	○	○	/	○	○	/	/	/
	ハコチサス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ハジキダス	/	○	○	○	/	○	/	○	/	○	○	○	○	/	/	○	×	×	/
	ハズンカス	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	バタツカス	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	×	/	/
	ハッコワス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	×	×	×
a	ハッシャガス	/	○	○	/	/	/	×	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	方言	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
a	ハナナラス	○	○	/	○	○	/	×	/	○	○	○	○	○	/	/	○	×	×	/
	ハナラカス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ハネノカス	/	○	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/
	ハラキダス	/	×	○	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ヒッカヤス	○	×	○	○	○	○	×	○	/	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ヒッカヤス	○	○	/	/	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	/	×	×
	ヒッシヤカス	○	/	○	/	○	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/
	フクラガス	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	/	/	×
	フケラカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	フッサガス	○	○	○	○	○	○	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/
	フリサガス	/	○	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	×
	ヘネリダス	○	/	○	/	○	/	/	/	/	○	/		/	/		/	/	/	/
	ホッタカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/
	ホトバカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	マキサガス	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	マクサガス	/	○	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	マッサガス	/	○	/	○	○	/	/	○	○	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/
	ミチギダス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	メーサマス	○	○	/	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ヤッサガス	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/
	ヤッタラス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/
	ヤブラカス	○	○	○	○	○	/	/	○	○	/	/	/	○	/	/	○	/	/	/
	ヨボリダス	○	○	/	○	×	/	×	○	○	○	/	○	/	○	○	○	/	/	×
	ランカヤス	○	○	/	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
u	カキツブス	/	/	○	○	/	/	/	○	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	カッツブス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	/	○	○	×	/	×
	カンツブス	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	キマツブス	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	キモツブス	/	○	/	○	○	○	/	○	○	○	○	○	/	○	○	○	×	×	×
	ケマツブス	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ヒンツブス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×
	フンツブス	○	○	/	/	/	○	×	○	○	○	/	○	○	○	○	○	×	×	×
	ヘツツブス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ヘンツブス	○	○	○	○	○	/	/	○	○	○	○	○	○	/	○	○	×	/	/
e	アゼカエス	/	/	/	/	×	/	/	×	×	×	/	×	/	/	×	×	×	×	×

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	方言	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
e	コロガエス	ガエタ	ガエタ	/	/	/	/	/	/	/	/	?	/	/	/	/	/	/	/	/
	ランカエス	/	×	/	○	/	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
o	アクオコス	○	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	アゴオトス	○	○	○	/	/	○	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	アラオコス	/	○	○	/	×	/	/	/	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/
	カチオコス	/	/	○	/	/	/	×	/	/	○	/	○	/	/	○	/	×	/	/
	カチコロス	○	○	○	○	○	○	×	○	/	○	○	○	○	/	○	○	/	/	/
	カツコロス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×
	カッコロス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×
	カンオコス	/	○	/	○	/	/	/	/	○	/	○	×	/	/	○	/	/	/	/
	キシオコス	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/
	キシタオス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/
	キショオコス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	○	/	×	×	×
	キショタオス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/
	キセオコス	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/
	キセオロス	/	/	/	×	○	/	/	/	○	○	○	○	○	/	/	/	/	/	/
	キセタオス	○	○	/	/	/	/	/	/	○	/	/	○	/	○	/	/	/	/	/
	ケッタオス	○	○	○	○	○	/	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	シキオコス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ダオオコス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ハッコロス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	×	×
	ハッタオス	/	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	/	×	/	/
	ハキタオス	○	○	/	○	○	○	/	○	/	○	/	○	○	○	○	○	/	/	/
	ヘンチャボス	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/
6 モーラ動詞																				
a	イエヲマワス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	オッサバカス	○	/	/	○	○	○	×	/	○	/	/	○	/	/	○	/	/	/	×
	オッピラガス	/	○	○	/	○	/	/	/	○	/	○	○	○	/	/	○	×	×	/
	オッピロガス	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	オッペラカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/
	オッペラガス	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	カッチャアワス	/	○	○	○	/	/	/	/	×	○	○	○	○	/	○	○	/	/	×
	カッチャラガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	カラダマワス	/	○	/	/	○	/	/	/	○	○	×	/	○	/	/	/	/	/	×
	キャータラガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	方言	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
a	ケッキヤラガス	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ケッケラガス	/	/	/	/	/	/	/	○	/	○	○	/	○	/	/	/	/	/	/
	ケッコラガス	○	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ケッコロガス	/	○	/	○	○	○	/	/	/	/	/	○	/	○	○	○	×	×	/
	シットカマス	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	スットカマス	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ダランカヤス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	チョウランバス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ツカミサガス	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/
	ツカンサガス	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ツツキサガス	○	/	○	/	/	○	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ツツクサガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ツッコラガス	○	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/
	ツッコロガス	/	○	/	○	○	○	/	○	/	○	○	○	○	/	○	/	×	/	/
	テッコロガス	/	○	○	/	○	○	/	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ドクデアカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	トツツカマス	○	○	○	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	トンガラカス	○	ガスC	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	/	○	○	×	/	/
	ハジキサガス	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ハズミクワス	○	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/	×	○	○	○	/	×	/	×
	ハズンクワス	/	○	○	○	×	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/
	ハズキサガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ハズクサガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ハタキサガス	○	/	/	/	/	○	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ハダキサガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ハナデフカス	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	×	/	/
	バナリコワス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	×	×	×
	ヒットラマス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/
	ヘッコマカス	○	○	/	○	○	/	/	○	○	○	○	○	○	/	○	○	/	/	×
	ヘロゲサガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ホッカラカス	/	○	/	/	○	/	/	○	○	/	/	/	/	/	/	○	×	/	/
	ホッカリダス	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ホッタラカス	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	/	○	○	×	×	×
	ホッチャラカス	/	○	○	/	○	/	/	/	○	○	○	○	/	/	○	○	×	×	/
	ホッチャラガス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	方言	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日	
a	ホッパラカス	○	/	/	○	○	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	
	ホンナゲダス	○	○	/	/	/	/	/	/	○	○	/	○	○	○	○	○	×	/	/	
	ヤッテカマス	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/	
	ヤブチラカス	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
	ヤマイバラス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
u	カラダツブス	○	○	○	○	○	/	×	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	シンショツブス	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
o	シンケオコス	/	/	/	/	×	/	/	/	○	○	/	○	/	/	/	○	/	/	×	
	サライオトス	○	○	○	○	○	/	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
	ツツキオコス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
	テクロオコス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	×	/	/	
7 モーラ動詞																					
a	アゲチンクワス	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	×	/	×
	アゼクリカヤス	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
	ケンツククワス	/	/	/	/	×	/	/	/	○	/	/	×	/	/	/	/	×	/	/	
	ゴーハジサラス	○	○	○	○	○	/	×	/	○	○	○	○	○	○	○	○	/	/	/	×
	サカテンカヤス	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
	シックリカヤス	/	/	○	○	○	/	/	○	/	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	
	ソバカゼフカス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	×	/	/	
	タタッコロガス	/	/	○	/	/	/	/	○	/	○	/	/	/	○	○	/	/	/	/	
	ツヅクリアワス	/	/	/	/	×	/	/	/	○	/	○	/	/	/	○	/	/	/	/	
	ツヅクルアワス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	/	×	/	/	
	ツツキサガス	/	○	/	○	/	/	×	○	/	/	○	○	/	/	○	/	/	/	/	
	テックリカヤス	/	○	/	○	○	○	/	○	○	○	/	○	○	/	○	/	/	/	/	
	ドテズリカヤス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	○	○	/	/	/	/	/	/	
	トトッパスダス	○	○	○	○	○	○	/	/	/	/	○	○	/	/	○	/	×	/	/	
	ハノソトニダス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
	マクズリカヤス	○	○	/	○	/	○	/	/	/	/	/	/	/	○	○	○	/	×	/	/
	マックリカヤス	○	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
	ンネコツカヤス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
e	アゼクリカエス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	/	/	
	カイコツカエス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
	ツメズリカエス	カヤス	カエス	カヤス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
	テクズリカエス	○	カヤス	カヤス	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	
	テックリカエス	/	×	/	/	×	/	/	/	/	/	/	×	×	/	×	/	×	×	×	

巻末資料 富山県全域調査の結果

語幹末	方言	氷見	高岡	福岡	大門	小杉	福野	上平	婦中	八尾	富山	大沢野	細入	立山	上市	滑川	魚津	宇奈月	入善	朝日
e	テックリガエス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/
	ドタウシカエス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ドテズリカエス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	×	×	/	/	/	/	/	/
	ニークツカエス	/	カヤス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	×	×
	マックリカエス	×	/	/	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ランチキカエス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
o	イザコザオコス	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	/	○	×	/	×
	イサブリオコス	○	○	○	/	○	○	/	○	○	○	○	○	○	/	○	○	×	/	×
	エザコザオコス	/	/	/	/	/	/	×	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/
	コキズリオロス	○	○	○	/	/	/	/	○	○	○	×	○	○	/	○	○	×	/	/
	マクズリオコス	/	○	○	/	○	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	○	/	/	/
	マナイタナオス	/	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/	/
8 モーラ動詞																				
a	クチバシヤンダス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	/	/	○	/	/	×	/
	サカテンボカヤス	○	○	○	○	○	/	/	/	○	/	/	/	/	○	/	/	/	/	/
	ダイソードカヤス	/	/	○	/	/	/	/	/	○	/	/	○	○	○	○	/	/	/	×
	トトッパスハラス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	ハシバコヤンダス	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
e	サカテンボカエス	×	×	×	×	×	/	/	/	×	×	×	/	/	×	/	/	×	/	/
	ダイソードカエス	/	/	×	/	/	/	/	/	/	/	/	×	×	/	/	/	×	/	/
o	カンノムシオコス	○	○	/	/	○	○	/	/	○	○	/	/	○	/	/	○	/	/	×
9 モーラ動詞																				
a	クソコナシニコナス	/	/	/	/	○	/	/	/		○	/	/	○	/	○	/	×	/	/
u	ニガムシカンツブス	○	○	○	○	○	○	/	○	○	○	○	/	○	/	○	○	×	×	×